

上新庄ニシウラ遺跡

野々市町南部土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 I

1998年

石川県野々市町教育委員会
野々市町南部土地区画整理組合

上新庄ニシウラ遺跡

野々市町南部土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 I

1998年

石川県野々市町教育委員会
野々市町南部土地区画整理組合

例　　言

- 1 本書は石川県石川郡野々市町新庄2丁目地内に位置する上新庄ニシウラ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、野々市町南部土地区画整理事業にかかる上新庄ニシウラ遺跡の緊急発掘調査報告で、野々市町教育委員会が野々市町南部土地区画整理組合の委託を受けて1989年度に調査を実施したものである。
- 3 現地調査は、平成元年4月4日から6月20日まで延べ78日間を要し、主に野々市町教育委員会社会教育課（現文化課）主事横山貴広が担当、同主事吉田　淳（現同主査）、同主事補田村昌宏（現町農政課主事）の援助を受けた。
- 4 遺物の整理及び報告書作成に必要な記録資料整理にあたっては、洗浄作業を伊藤忠行、尾崎義雄、小松義一、三納友吉（故人）、遠塚一豊、長谷川啓子、浜野光蔵、南外志雄、宮野渡が、また記名・接合・実測・トレースを川端敦子、大杉幸江、市村美知栄、長谷川啓子、増山明美が行った。その他、図版作成、写真撮影を横山が担当し、調査中の庶務には町教育委員会社会教育課主事中田八千代（現町住民課主事）があたった。
- 5 本書の執筆及び編集は横山が行った。
- 6 図版の縮尺はすべて図上に標示し、水平基準線レベルは海拔高である。なお方位はすべて磁北を指す。
- 7 調査によって得られた資料は、すべて野々市町教育委員会が一括して保存管理している。
- 8 発掘調査から報告書作成に至るまで、多くの方々や機関からご教示・ご協力をいただいた。
以下にご芳名を記して深甚の謝意を表したい。（敬称略・順不同）

伊藤雅文・垣内光次郎・金山弘明・北野　博・木田　清・小嶋芳孝・小林　修（故人）
高堀勝喜（故人）・田嶋明人・出越茂和・柄木英道・西村康賢（故人）・橋本澄夫
平田天秋・藤田邦雄・本田秀生・松山和彦・三浦純夫・南　久和・宮本直哉
谷内尾晋司・山本直人・湯尻修平・吉本外茂治
石川県教育委員会・石川県立埋蔵文化財センター・（社）石川県埋蔵文化財保存協会
松任市教育委員会・野々市町南部土地区画整理組合

目 次

例 言

第1章 位置と環境 ······	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境 ······	1
第2節 周辺の歴史的環境 ······	1
第2章 調査の契機と経過 ······	8
第1節 調査の契機 ······	8
第2節 調査の経過（調査日誌抄） ······	11
第3章 調査の成果 ······	19
第1節 遺跡の概要 ······	19
第2節 古墳時代以前の遺構と遺物 ······	19
1. 堅穴住居 ······	19
2. 掘立柱建物 ······	33
3. 溝 ······	35
4. その他の遺構・遺物 ······	46
第3節 古代の遺構と遺物 ······	51
1. 堅穴住居 ······	51
2. 掘立柱建物 ······	59
3. その他の遺構・遺物 ······	76
第4章 出土遺物の検討 ······	90
第1節 古墳時代以前の遺物 ······	90
第2節 古代の遺物 ······	91
第5章 まとめ —古代の集落構造— ······	95

写 真 図 版

挿図目次

第1図 遺跡の位置 ······	1	第37図 6・7号住居跡出土土器 ······	53
第2図 周辺の遺跡 ······	2	第38図 8号住居跡実測図 ······	54
第3図 埋蔵文化財分布図 ······	9	第39図 8号住居跡出土土器 ······	55
第4図 上新庄ニシウラ遺跡調査区図 ···	12	第40図 9号住居跡実測図 ······	56
第5図 A区遺構全体図 ······	16	第41図 9号住居跡出土土器・土錐 ······	57
第6図 B・C区遺構全体図 ······	17	第42図 10号住居跡実測図 ······	58
第7図 調査区土層断面図 ① ······	20	第43図 3号掘立柱建物実測図 ······	60
第8図 調査区土層断面図 ② ······	20	第44図 4号掘立柱建物実測図 ······	61
第9図 調査区土層断面図 ③ ······	21	第45図 5号掘立柱建物実測図 ······	62
第10図 調査区土層断面図 ④ ······	22	第46図 6号掘立柱建物実測図 ······	63
第11図 1号住居跡実測図 ······	23	第47図 7号掘立柱建物実測図 ······	64
第12図 1号住居跡出土土器 ······	24	第48図 8号掘立柱建物実測図 ······	65
第13図 2号住居跡床面状況実測図 ······	25	第49図 9号掘立柱建物実測図 ······	66
第14図 2号住居跡床面下状況実測図 ···	25	第50図 10号掘立柱建物実測図 ······	68
第15図 2号住居跡出土土器 ······	27	第51図 11号掘立柱建物実測図 ······	69
第16図 2号住居跡出土土器 ······	28	第52図 12号掘立柱建物実測図 ······	70
第17図 2・3号住居跡出土土器 ······	29	第53図 13号掘立柱建物実測図 ······	71
第18図 3号住居跡実測図 ······	31	第54図 14号掘立柱建物実測図 ······	72
第19図 3号住居跡東半床面下状況実測図	32	第55図 15号掘立柱建物実測図 ······	73
第20図 4号住居跡実測図 ······	32	第56図 16号掘立柱建物実測図 ······	74
第21図 4号住居跡出土土器 ······	33	第57図 17号掘立柱建物実測図 ······	75
第22図 1号掘立柱建物実測図 ······	34	第58図 各ピット出土土器 ······	80
第23図 1号掘立柱建物柱穴出土土器 ···	35	第59図 各ピット出土土器 ······	81
第24図 2号掘立柱建物実測図 ······	36	第60図 各ピット出土土器 ······	82
第25図 1号溝・SK-06実測図 ······	37	第61図 各土坑実測図 ······	84
第26図 1号溝出土土器(下層) ······	39	第62図 土坑出土土器 ······	85
第27図 1号溝出土土器(下層) ······	40	第63図 包含層出土土器(古代) ······	88
第28図 1号溝出土土器(下層) ······	41	第64図 包含層出土遺物 ······	89
第29図 1号溝出土土器(下層) ······	42	第65図 竪穴住居・掘立柱建物配置図	93
第30図 1号溝出土土器(下・中層) ······	43	第66図 A郡建物配置図 ······	99
第31図 1号溝出土土器(中・上層) ······	44	第67図 B郡建物配置図 ······	100
第32図 1号溝出土土器(上層) ······	45	第68図 C郡建物配置図 ······	101
第33図 各土坑実測図(古墳以前) ······	47	第69図 D郡建物配置図 ······	102
第34図 各ピット出土土器 ······	48	土器観察表 ······	104
第35図 包含層出土土器(古墳以前) ······	50		
第36図 5・6・7号住居跡実測図 ······	52		

写真図版

第1章 位置と環境

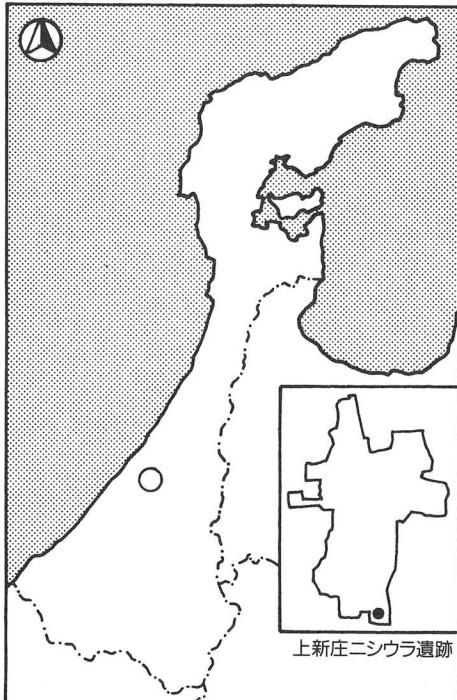
第1節 遺跡の位置と地理的環境

石川郡野々市町は石川県のほぼ中央南寄りに位置し、町域のほとんどは手取川によって形成された広大な手取扇状地北端に存在する。白山連峰を源とする手取川は、鶴来町付近より流路を北から西方向に転じ、石川郡美川町にて日本海へ注いでいる。手取扇状地はこの県下最大の河川の堆積作用により扇径約12km、展開度約110度の規模を有し、その威容を金沢平野に横たえている。町域の北側から東側にかけての一帯を金沢市に、西側から西南にかけての一帯を松任市に、また南側を鶴来町に接する当町は、古くから交通の要地、商都として開かれた。その伝統は今に伝えられ、面積約13.56km²、人口約43,000人を数え、中央を横断する旧国道8号線（現157号線）に沿って巨大な商業地帯を有している。また膨張著しい金沢市に南郊することによる人口及び開発の急増という問題を抱えていであることから、周辺の景観は目まぐるしい変貌を遂げており、それによって失われて行く遺跡の数も年間かなりの面積に上っている。

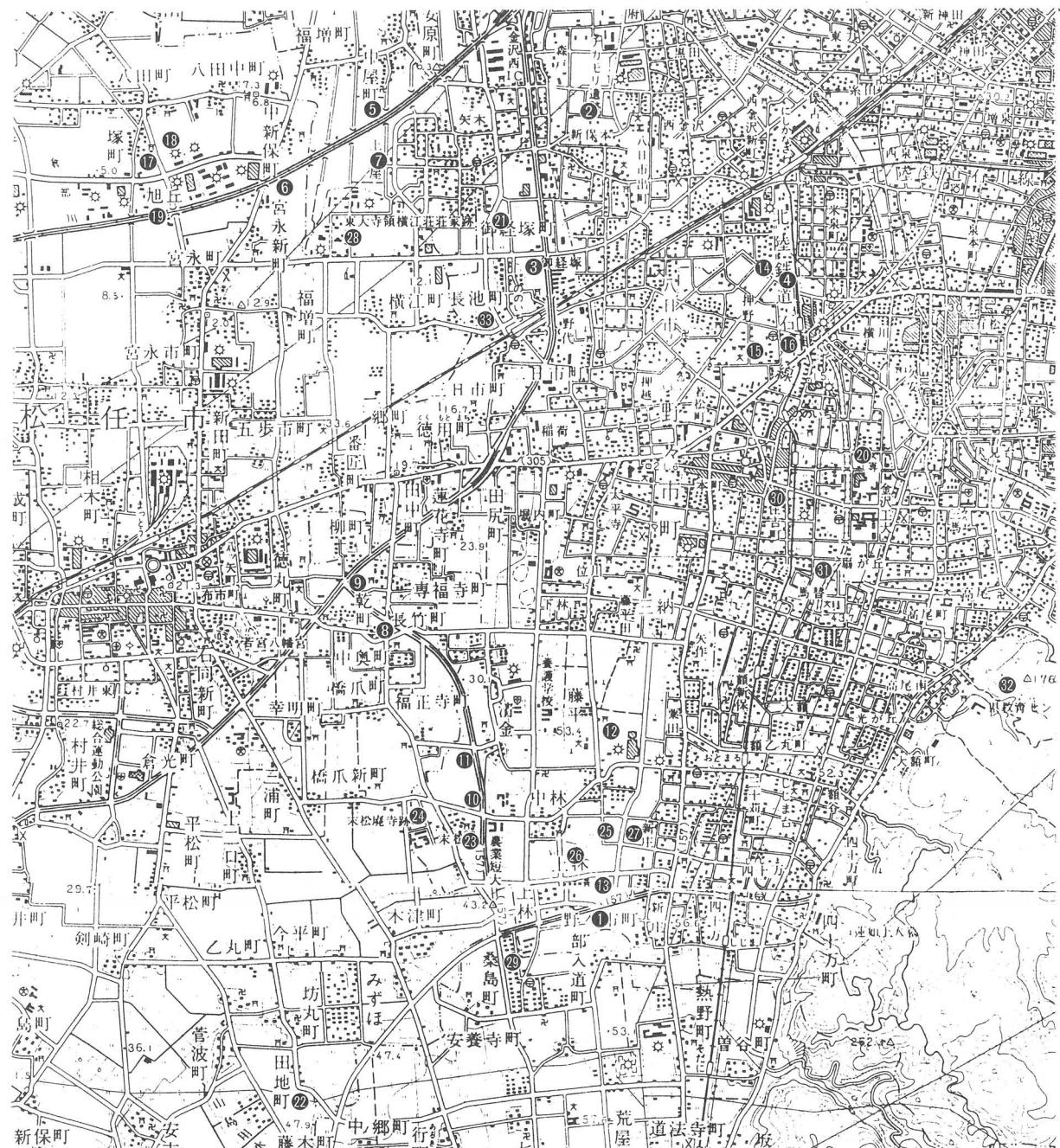
上新庄ニシウラ遺跡は、この野々市町の南部、新庄2丁目に位置し、上新庄の旧集落の西隣、通称「ニシウラ」に存在する。標高40～45mを測る扇状地の扇央部北東寄りに位置し、北側目前を加賀産業道路が横切り、東側には七ヶ用水の一つである富樫用水の分流、木呂川が北流する。この上新庄ニシウラ遺跡を擁する野々市町南部地区は、組合施行による土地区画整理事業もいよいよ終盤を迎え、大型店舗の進出及び住宅の急増、また縦横に走る道路網の整備等、周辺の景観は調査当時とは比べ物にならないほどの発展を見せており、当遺跡の所在地も現在は大型レジャー施設及び都市計画道路本町新庄線へとその姿を変えている。

第2節 周辺の歴史的環境（第2図参照）

野々市町南部遺跡群の所在する手取川扇状地の扇央部、扇端部はこれまで県内有数の各時代にわたる遺跡の密集地として知られている。また、すでに飽和状態に達した金沢市南部がさらに



第1図 遺跡の位置



- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|---------------|
| ① 上新庄ニシウラ遺跡 | ⑩ 末松遺跡 | ⑯ 宮永遺跡 | ㉓ 横江庄遺跡 |
| ② 新保チカモリ遺跡 | ⑪ 清金アガトウ遺跡 | ㉐ 高橋セボネ遺跡 | ㉔ 安養寺遺跡 |
| ③ 御經塚遺跡 | ⑫ 粟田遺跡 | ㉑ 御經塚シンデン遺跡 | ㉕ 富櫻館跡 |
| ④ 米泉遺跡 | ⑬ 上林新庄遺跡 | ㉒ 田地古墳 | ㉖ 扇が丘ハイワイゴク遺跡 |
| ⑤ 中屋遺跡 | ⑭ 押野大塚遺跡 | ㉓ 末松古墳 | ㉗ 高尾城跡 |
| ⑥ 下福増遺跡 | ⑮ 押野タチナカ遺跡 | ㉔ 末松庵寺跡 | ㉘ 長池キタバシ遺跡 |
| ⑦ 上荒屋遺跡 | ⑯ 押野ウマワタリ遺跡 | ㉕ 下新庄アラチ遺跡 | |
| ⑧ 長竹遺跡 | ⑰ 一塚遺跡 | ㉖ 上林テラダ遺跡 | |
| ⑨ 乾遺跡 | ⑱ 八田小鮎遺跡 | ㉗ 下新庄タナカダ遺跡 | |

第2図 周辺の遺跡 (1/50,000)

南へ膨張を続けており、周辺の松任市、鶴来町を含め近年都市化の著しい地区としても位置付けられる。そのため急増した開発行為に伴う事前の分布調査及び緊急発掘調査も多数実施されており、新たに発見された遺跡や範囲の拡大した遺跡も数多く見られ、すでに幾度の改定を経た『石川県遺跡地図』の新たな改定を待たずして質・量ともに増加の一途を辿っており、現代に生きる我々に多くの情報や資料を与えていている。反面、あまりにも加速した開発行為のスピードに追われ、対象となる遺跡の価値や意義が十分に検討されないまま、記録保存を目的とした発掘調査により失われていくことは大変憂慮すべき問題である。

縄文時代

本遺跡周辺において、最初の人間の営みの痕跡として認知されているのは縄文時代後期中葉～晩期に展開した拠点的大集落跡として知られる新保チカモリ遺跡・御経塚遺跡である。また、若干距離はあるものの、米泉遺跡も該期の拠点集落として知られており、新保チカモリ遺跡とともに巨大な樹木を半截した環状列木が検出されている。御経塚遺跡において大型土坑群とされた環状に巡る土坑群（昭和49年度第6次調査）も木柱痕こそ検出されていないが、環状列木であった可能性が高く、能都町の真脇遺跡とともに何らかの精神文化的つながりのあったことを窺わせる。また、これらの周辺には他にも中屋遺跡・宮永B遺跡・福増遺跡・下福増遺跡・横江A遺跡・下安原遺跡・上荒屋遺跡・旭遺跡群などの集落が点在している。これらはいずれも地下水の自噴地帯として知られる標高10m前後を測る扇端部に位置しており、集落の選地にあたってまず生活水の確保を第一に考えていたことを窺わせる。

一方、扇央部にあって現在までに集落跡として知られているのは長竹遺跡・乾遺跡の二遺跡のみである。この他末松遺跡・清金アガトウ遺跡・粟田遺跡・上林新庄遺跡などでも晩期に属する土器片や打製石斧をはじめとする石器類が散発的に検出されるものの、定住生活を示す痕跡は未だ確認されていない。これらの評価については別に譲るが⁽¹⁾、手取川の氾濫を主な要因とする不安定な地勢は容易に人々を受け入れなかつたようである。

弥生時代

弥生時代に入っても、前述の集落の在り方にはさほど大きな変化は見い出せない。扇端部にあっては、初期農耕の段階として知られる柴山出村式土器が御経塚遺跡と押野大塚遺跡で若干量確認されており、御経塚遺跡では後続する矢木ジワリ式土器も僅かであるが検出されている。中期にあっては押野タチナカ遺跡で中期後半の磯部式土器が数個体まとめて出土しているが、土坑内出土ということで明確な住居跡等の確認は皆無に等しい。これに対して、後期後半以降、北加賀法仏期～月影期になると、周辺では集落の数が爆発的と言ってもよい状況で増加する。この現象は何も手取扇状地に限った事象ではなく県内全域に見られることであるが、特に標高10mを測る

ライン上付近には一塚遺跡・八田小鰯遺跡・竹松C遺跡・宮永遺跡・相川新A遺跡など多くの集落跡が確認される。また、高橋川の後背湿地を生産基盤として自然堤防上に展開する高橋セボネ遺跡なども安定した集落経営を見せ始める。これらは前述のごとく縄文時代の遺跡と立地をほぼ等しくし、農耕技術の発達に伴う経済基盤の確立と、生活環境重視の選択とがある一定の段階で融合した結果と思われる。集落の増加と拡大は人口の増加を示唆し、該期に広く見られる遺跡の急増は農業経営基盤のある程度の確立を示している。このような流れの中にあって、御経塚遺跡デト地区に見られる弥生時代末としては北陸最大規模の竪穴式住居の存在や、それに続く御経塚シンデン遺跡・一塚遺跡のような大古墳（墳墓）群の造営を成し得る権力基盤も整えられて行ったのであろう。

この時代の扇央部の状況は、前期から月影期を通して先の縄文時代と同様、目立った集落の拡大、増加といった様相は見られない。前期としては上林遺跡と乾遺跡から柴山出村式土器が一定量出土しているほかは粟田遺跡において遠賀川式土器が僅かに検出されているのみである。（乾遺跡ではある程度まとまって見られるようである。）続いて弥生時代の集落跡が確認されるのは月影期を待たなければならず、木津（末松）遺跡・荒屋遺跡で数棟の竪穴式住居跡が確認されている。本遺跡でも後述のごとく月影期～白江期の住居跡、溝跡などが検出されている。しかし、これらはいずれも続く古墳時代までは存続しない短期間に営まれた集落であり、木津遺跡に見られる数度の洪水に伴う砂礫被覆の状況など、到底安定した経営とは思われないものである。

古墳時代

この地域に存在するモニュメントとしての古墳は非常に少なく、僅かに7世紀後半の河原石積み横穴式石室を持つ田地古墳（円墳）及び詳細は不明であるが末松古墳の2基を数えるのみである。また、平成3年度に当遺跡と同じく組合施行に係る土地区画整理事業に先立つ緊急発掘調査として実施された上林新庄遺跡の調査では、7世紀前半代に位置付けられる横穴式石室をもつ上林古墳が検出されている。後世の削平を受けていることに加えて築造後50年たらずで石室が破壊された痕跡が窺われ、石室最下部のみの検出のため墳形及び規模などは不明であるが、土地の古老の話などを参考にすると、大正時代より始まった耕地整理によりいくつか存在した“小高い丘”的なものを削平して均したということが考えられる。末松地区に多く残る「塚」のつく小字名などはこのことを裏付ける史実と思われ、近代までの扇状地開発の過程でいくつかの古墳が失われて行った可能性は高い。扇端部においても扇状地開発の爪痕は著しく、耕作土下遺構検出面までが浅いという特質からかなりの数の古墳が失われたものと思われる。全長27mを測る前方後方墳1基を盟主とし、全15基からなる御経塚シンデン古墳群や、山陰地方との関係を顕著に示す四隅突出墳ほか多くの墳墓群を検出した一塚遺跡はその最たるものであり、平野部に眠る前期古墳群の存在を強く意識付けた。しかし、扇央部も含め、これらを造営したと思われる母体となる集落の確認は依然として希薄であり、僅かに扇端部にあっては前期の上荒屋遺跡、扇央部では後

期の末松遺跡群及び上林新庄遺跡において見られるのみである。

奈良～平安時代

扇央部における該期遺跡の存在は、近年の発掘調査事例の増加によりかなりの密度で展開していたことが知られることとなった。当遺跡周辺でも平成元年度以降継続して調査が行われており、粟田遺跡まで続く島状微高地上に奈良時代を中心として平安時代前期前半（9世紀前半）まで存続する集落がかなりの規模で確認されている。網の目状に流れる手取川の伏流水により、中洲状に細長く展開する島地形はほかにも多く存在すると見られ、周辺での該期遺跡の動向を考える上でひとつの指標を提供したと言えよう。

奈良時代直前の7世紀後半代になると、当遺跡の西方約1.8kmに位置する末松地区でも集落の痕跡はかなりの広がりを見せ始める。この内末松ダイカン遺跡、末松遺跡はいずれも後述する末松廃寺跡と深い関係をもつ集落跡として位置づけられ、清金アガトウ遺跡でも8～9世紀の集落跡が確認されており、扇状地開発における一大画期として捉えることができる。法起寺式伽藍配置をもつとされる末松廃寺は7世紀末～8世紀初頭、白鳳期末の建立と考えられており、まさにこれらの扇状地開発の成果に呼応する政治的モニュメントとして威容を誇ったものであろう。その建立者については以前より在地有力者の道君との関係を指摘されているものの、はっきりとした確証は未だ得られていない。しかし、建立の経緯を考える時、当地の開発がある程度の成果を見せ、在地首長層の経済基盤の確立が成された上でできごとと理解するのが最も自然ではなかろうか。前述の田地古墳を含むいくつかの後期古墳の存在や、国道157号線敷設に先立つ最近の末松地区の発掘調査例、上林新庄遺跡での7世紀前半代の集落の確認など、開発の取り組みは6世紀末、遅くとも7世紀前半と捉えるのが妥当と考えられる。末松廃寺跡の建立時期の理解及び資料の増加など環境の相違はあるものの、浅香年木のいう「大規模な人工灌漑手段による扇状地開発に必要な政治勢力は、古墳期を通して、手取川扇状地に充分な成長をもしくは浸透を達成することができず、石川平野の開発拠点が、依然として、扇状地から外れた末端の海岸砂丘後背地や、犀川・伏見川流域の低湿地ないしは扇状地東側縁辺の山麓部分にあって、自然灌漑に基づく湿田・半湿田の経営に止まっていたことは否定し難い。」⁽²⁾という論理は少々時期を溯って考える必要があろう。

中世

中世のこの地域において、まず注目しなければならないのは林氏の存在である。林氏の居館伝承地としては鶴来町日御子・知氣寺・野々市町中林・松任市向島などが上げられるものの、いまだ考古学的実証はなされていない。ただ、その支配の痕跡として今も地名に上林・中林・下林（いずれも野々市町）などの名称が残されている。時代は前後するが、当遺跡周辺では西へ約1km離

れたところに安養寺遺跡（10世紀前半～11世紀前半）が確認されており、南へ下った現上林集落も、土地の伝承によればその起源は平安時代に求められるという。9世紀前半に集落の立地が一大画期を迎えることに対する評価は後に譲るが、安養寺から下林へ延びるラインを前述の島状地形のひとつと捉えれば、この時期の集落跡を基として、現在の集落が形成されていると考えることもできる。この地域においては、依然として大規模な開発計画に伴う面的な調査は行われていないため、該期の集落跡は確認されていない。しかし、当遺跡の位置する野々市町南部地区の遺跡群は9世紀後半を待たずして廃絶されており、調査に際しての試掘調査でも遺跡群の乗る島状微高地から区画整理の範囲西端（上林～中林集落の東端）までは深い鞍部の伸びが確認されていることからも、このことは案外荒唐無稽な想像ではあるまい。

もう一方で、中世の野々市を考える上で忘れてはならないのが富樫氏の存在である。承久三年（1221）の承久の乱において院方に味方して没落した林氏・上道氏に代わって台頭した富樫氏は、北条氏一族や斯波氏・赤松氏の支配を受けるという苦汁の時を過ごしながら、当時「野市」、「布市」と呼ばれる市が形成されていた現在の野々市町の中心部に守護所を定めている。付近には「御所」、「富樫館」、「長土居」、「馬場跡」、「宮地」などの関連すると思われる地名が今も多く残されており、平成5年度には民間開発を端緒として小規模ではあるが行われた発掘調査において、内郭西限と思われる堀跡が検出されており、堀底より和鏡が1点出土している。これまで伝承や江戸時代の絵図のみでの考証で、推定の域を出なかった館跡の位置が一部確定できた調査として意義深い。

室町時代も末の頃になると、1488年、高尾城で第14代富樫政親を滅ぼした一向一揆が歴史の表舞台に登場し、以後約100年間織田信長の統一政権によって崩壊するまで所謂「百姓の持ちたる国」として自治を行うこととなる。

このような背景の中で、中世の野々市を考古学的立場で検証できる資料は非常に乏しいと言わざるを得ない。前述の富樫氏関連の遺跡については、現在当町でも最も市街化の著しい地区に密集しており、僅かに点としての調査が例年行われているに過ぎず、集落として捉えるにはあまりに散発的である。しかし、扇端部にあっては、JR野々市駅の北西400mに位置する長池キタバシ遺跡において該期の良好な集落及び屋敷地の構造を示す事例も確認されており、今後の検討が待たれる。

近世以降

織田信長による一向一揆の崩壊以降、野々市の地名はしばらく文献資料の上からも姿を消すこととなる。この時期の遺跡としては、御経塚遺跡デト地区が上げられる。18世紀後半～19世紀にかけての良好な土器群などが検出されており、大量の井戸及び室状構造、屋敷地を区画すると思われる溝跡などが確認されている。金沢市における城下町の調査にも言えることであるが、該期の遺跡は村御印に残る地名などから知られるように現在の集落と重複するケースがほとんどであ

り、再開発事業等を契機として発見もしくは調査されることが多い。そこには既得権の問題等様々な障壁が存在し、大規模再開発もしくは公共事業によってでしか調査を行うことが難しいのが実情ではなかろうか。

- 註 (1) 山本 直人 「縄文時代の地域社会論に関する一試論—手取川水系を中心にして—」
(『古代文化』 42-12 1990)
- (2) 浅香 年木 「古代における手取川扇状地の開発」
(『古代地域史の研究』 法政大学出版局 1978)

第2章 調査の契機と経過

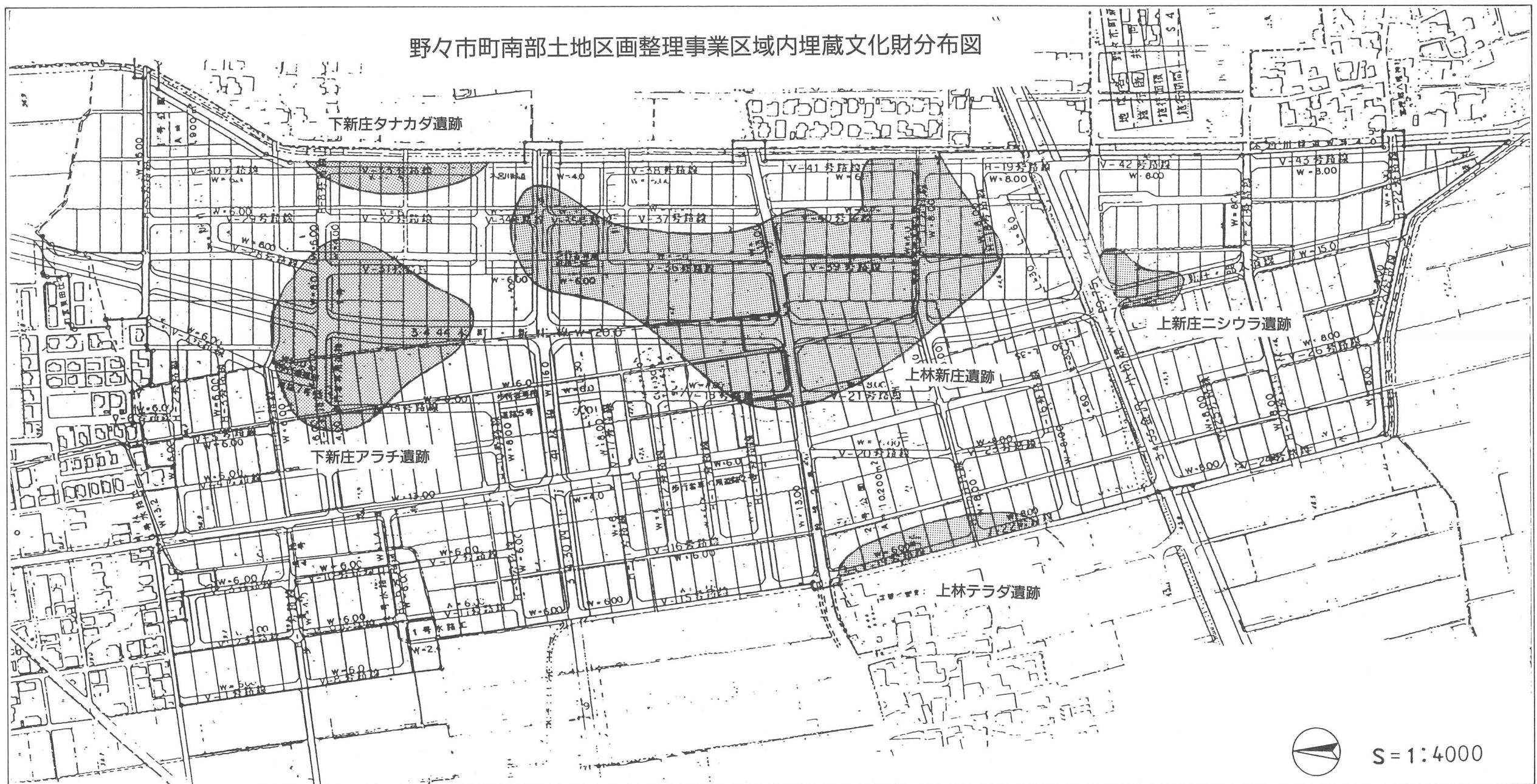
第1節 調査の契機

1984年2月、地元での区画整理事業実施に対する機運の高まりを受けて野々市町都市整備課(現都市計画課)はその実施を検討、1988年2月には事業対象区全域が市街化区域に編入された。その後同年3月の事業認可を受けて区画整理組合が発足、名称を野々市町南部土地区画整理組合とし同年12月より工事に着手することが決定された。同時に事業対象区域内の埋蔵文化財の状況について町都市整備課より打診を受けた野々市町教育委員会は、その可能性を検討し詳細な遺跡分布確認調査の必要性を確認、その旨を口頭で伝えるとともに地元の理解と協力を求めるため区画整理組合と事前の協議を行った。

1988年9月7日付発野都第132号で、町都市整備課長より町教育委員会教育長宛てて、本区画整理事業施行範囲内における埋蔵文化財分布調査実施の正式な依頼が文書で提出された。これを受けて町教育委員会では10月4日付取野教社第432号で町都市整備課長宛てて分布調査実施の計画書を提出、10月11日～11月12日の日程で調査を行う旨を通知し、併せて地権者への周知徹底を依頼している。

現地における調査では、まず対象区を便宜的に現道や用水などの現地形を考慮してA～E区の5区に分割し、それぞれに踏査及び人力による約1m四方の試掘坑を翌年以降も一部耕作を行うことに配慮しつつ、都市計画道路と区画街路の予定地を中心に設定した。この他、道路敷予定地で判断に苦慮する部分については街区予定地にも試掘坑を設定し、判断の助けとした。試掘坑の総数は、対象面積約400,000m²に対して218箇所を設定しており、それぞれ埋め戻し後は転圧機による転圧を十分に行い、カラーピニールテープを結んだ竹の棒を目印として刺す方法を取った。その結果、対象区東側に南北に伸びる微高地の存在が窺われ、その上に連なるように分布する4遺跡約57,500m²と、現在の上林の集落下へ西延すると思われる1遺跡約3,000m²が確認された。これらの遺跡は土地に残る小字名を参考に南より順に上新庄ニシウラ遺跡(約2,000m²)、上林テラダ遺跡(約3,000m²)、上林新庄遺跡(約40,000m²)、下新庄タナカダ遺跡(約3,500m²)、下新庄アラチ遺跡(約12,000m²)と命名され(第3図)、12月15日付発野教社第109号において町教育長より町都市整備課長へ報告書の提出が行われた。

翌年よりの区画整理事業施行に先立ち、町教育委員会、町都市整備課、野々市町南部土地区画整理組合の三者で本調査に対する協議を重ねた結果、まず基幹となる都市計画道路本町新庄線敷設予定地を優先して調査することで合意、初年度は鶴来町境界から加賀産業道路南側に位置する上新庄ニシウラ遺跡の推定地全域を調査することに決定した。これを受けて1989年4月1日付で区画整理組合理事長小林修より文化庁長官へあてて文化財保護法第57条の2第1項の届け出がされ、4月13日付教文取第180号により周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知が届けられている。また、発掘調査の実施については4月1日付発野教社第14号で町教育長



第3図 埋蔵文化財分布図

より文化庁長官へ法98条の2第1項による発掘通知が提出され、4月1日付で町教育委員会と南部土地区画整理組合との間で発掘調査に関する受委託契約を締結、4月4日より現場での発掘調査に着手した。その後の経過は第2節の通りである。

事務的な処理もほぼ目処のついた12月22日、発野教社第88・89号で埋蔵文化財の発見届、保管書がそれぞれ町教育長より松任警察署長、県教育委員会へ提出され、1990年1月16日付教文収第22号で県教育長より文化財の認定通知を受けている。その後3月20日付発野教社第30号で区画整理組合へ発掘調査に係る実績報告を提出し、1989年度の事業はすべて完了した。

第2節 調査の経過（調査日誌抄）

4月4日（火）晴 調査区設定。便宜的に東側小調査区をA区、中央街区予定地をB区、都市計画道本町新庄線敷設予定地をC区とする（第4図）。重機により調査区全体の畦畔ブロックの除去、搬出及びA区北側より耕作土の除去を開始する。同時に調査のため分断される農業用水の確保のため、仮設水路の掘削を行う。

4月8日（土）雨 現場プレハブ小屋2棟建て上げ、事務所備品、畳等搬入。雨のため土の状況が悪く、表土除去作業は休止。

4月10日（月）曇 本日より作業員を入れてA区より遺構検出作業にかかる。B・C区に比べて遺構検出面のレベルが低く、地山の色調も暗灰色がかったり予想外に手間取る。これより東側は鞍部に向かうと思われ、遺構密度も低い。検出状況の写真撮影後掘進開始。B・C区の表土除去作業も本日で終了。

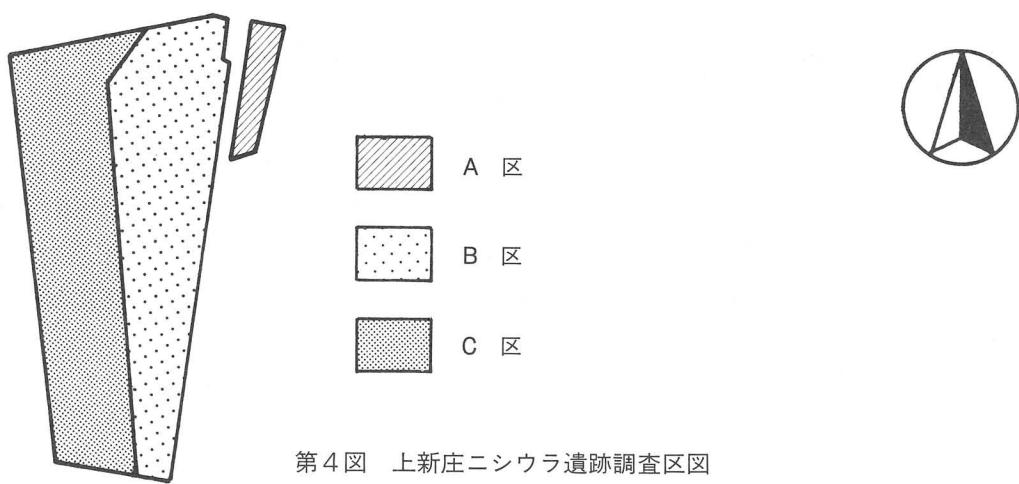
4月11日（火）雨のち曇 午前中の降雨のため作業は休止。午後より吉田主事、田村主事補の援助を受け調査区の杭打ちを行う。ベルトコンベア等発掘機材の搬入。

4月12日（水）曇のち晴 A区遺構掘進継続。平行して余剰人員をC区の遺構検出に振り分ける（南側より）。本日でA区は完掘。

4月14日（金）曇のち晴 住居跡の全体像及び配列の状況確認のためC区の掘進と平行して隣接するB区も南壁際より20mの地点まで遺構の検出を行う。この時点で弥生時代終末期及び奈良時代の竪穴住居が混在することが判明、掘立柱建物跡もかなりの規模で見られる。A区清掃後借り上げたスカイマスターを使って上空より全景写真の撮影を行う。（社）石川県埋蔵文化財保存協会 小嶋芳孝氏来跡。



(1/2,500)



第4図 上新庄ニシウラ遺跡調査区図

4月19日（水）晴 先週末の降雨は調査着手以来初めてのまとまった雨であった。昨日より水中ポンプを導入し、冠水した遺構周辺の排水を行いながら掘り進める。南壁際起点より約40mの地点まで調査終了。今春より歴史の勉強を始めたと言う富陽小学校の6年生児童7名（男子4名、女子3名）来跡。簡単な説明をした後、雨により排土中から顔を出した遺物を見つけては歓声を上げている。

4月25日（火）晴 掘立柱建物跡の分布密度が高く、B・C区平行して遺構確認を行うこととする。1号住居跡床面状況の実測図作成開始。石川県立埋蔵文化財センター松山和彦氏来跡。町南域の大動脈である加賀産業道路に面するためか、多くの方が立ち寄っては声を掛けている。孤独な担当者としては何よりの励みである。

4月27日（木）曇のち雨 8号住居跡の写真撮影及び遺物の取り上げを行う。雨が近づいており、明日も雨模様ということで、ゴールデンウイーク前のひとくぎりとして掘立柱建物跡が調査区外へ延びるB区の東側に0.1m³掘削機でトレンチを設定、遺跡の範囲を再度確認する。その結果良好な地山が約10m続くことが判明、連休明けに区画整理組合と調査区拡張についての打ち合わせの必要を感じる。ついでにベルトコンベアで積み上げた排土の処理を行う。宇ノ気町教育委員会の山川正一氏ほか1名来跡。

5月1日（月）曇時々小雨 連休の最中ということで作業員の出席が少ない。田植えも繁忙期ということか。B区南東側の掘進と平行してすでに掘り上げた部分の平面実測作業を開始する。巷では休みをとっている人も多いことだろう。

5月6日（土）曇 補測用の杭打ちを行う。巷では…

5月8日（月）晴 全体像が検出されていなかった2号住居跡、5号住居跡周辺の拡張を行う。またB区東側の拡張についても区画整理組合より労いの言葉とともに快諾を得る。地元の理解と協力が何よりも有り難い。

5月10日（水）晴 B区東側に拡張区設定、重機を用いて表土を除去する。2号住居跡、5号住居跡ともに拡張区を含めて床面まで完掘、写真撮影を行う。午後より区画整理組合理事長以下理事の皆さんのが来跡、お礼とともに調査の進捗状況などを説明する。土地柄か掛けて下さる言葉が終始暖かい。

5月12日（金）曇のち雨 2号住居跡拡張区を残しC区の平面実測作業終了。この住居跡は2度建て替えられており、中央から良好な状態で特殊ピットを検出、段部肩より緑色凝灰岩のプロ

ックが出土している。1号住居跡拡張区の実測を開始。午後3時の休憩を境に雨が激しくなりやむなく作業の中止を決定する。

5月13日（土）雨のち曇 朝からの雨のため現場作業は中止。晴れ間を見て吉田主事、粟田遺跡へ派遣されている田村主事補の協力で基準レベルの設定と簡易遣り方の杭打ちを行う。その後住居跡床面レベル記入、掘立エレベーションの実測、未検出の掘立柱建物跡の検討を行う。土曜日だというのに先輩、後輩に激務を強いてしまった。感謝。

5月16日（火）晴 1・2・5号住居跡の検出終了、清掃後写真撮影を行う。先日来の雨を吸い、粘性の増した排土を無理に流していたためベルトコンベアのベルトが断裂、交換をお願いする。

5月17日（水）曇のち雨 2・8号住居跡の床面下調査及び掘立柱建物跡の確認調査を行う。
(社)埋蔵文化財保存協会山本直人氏来跡。

5月19日（金）曇時々雨 B区東側拡張区の遺構検出開始。もう少し東へ延びているようだが農道を分断できないため断念する。C区掘立確認調査及びレベル記入、1・2・8号住居跡床面下状況の写真撮影を行う。

5月24日（水）晴 B区8・9号住居跡掘進。調査区周辺の草刈りとともにセクション実測のため北壁、東壁の清掃を行う。1・2・8号住居跡の床面下実測図にレベル記入。県文化課の谷内尾晋司氏来跡。

5月29日（月）晴 先週末までに遺構の掘進はほぼ終了、今週より調査区の排水及び清掃作業にかかる。しばらく休んでいた掘立柱建物跡の柱穴エレベーション実測を再開する。担当者が1人のためなかなか継続して実測作業を進めることができない。石川県立埋蔵文化財センター伊藤雅文氏来跡。

5月30日（火）晴 ベルトコンベアを撤去した後、最後に残ったコンベア下の調査を開始する。本日にて遺構検出作業を終了。B区の遺物取り上げを行った後、清掃作業に入る。石川県立埋蔵文化財センター北野博氏来跡。

5月31日（水）晴 調査区の清掃が終わった後、スカイマスターで全景写真の撮影を行う。午後より発掘機材の洗浄及び搬出、現場プレハブ小屋の清掃。実測要員数名を残し、他の作業員には明日から町教委の吉田主事が行っている粟田遺跡（町スポーツ施設建設に係る緊急発掘調査）

の調査へ参加してもらうこととする。

6月1日（木）晴 残った作業員6名とともにセクションベルトの清掃及び3号住の床面下等の補足調査を進める。また、後日のために2人1組体制で実測の方法を説明する。金沢市教育委員会南久和氏来跡。

6月2日（金）晴 平面実測作業を作業員に任せ、私は掘立柱穴のエレベーションと住居跡等のセクション実測に専念する。まずまずの出来でほっと一安心。松任市教育委員会木田清氏他2名、高堀勝喜先生、坪井清足先生が相次いで来跡。これまで調査の手が入っていなかった地区に良好な古代の集落跡が発見されたためか、連日多くの方々が来跡されては有益なご教示を下さる。有り難い気持ちとともに改めて自分が行っている調査に対してプレッシャーを感じる。

6月9日（金）曇のち雨 実測作業もある程度ペースに乗り、ほぼ半分を終了。金沢市教育委員会出越茂和氏来跡。

6月13日（火）晴 遺構平面図の実測作業もほぼ終了し、後は調査区のセクション実測とレベルの記入を残すのみとなった。6月に入って大きな天候の崩れもなく、なんとか無事調査を終わるそうな気配である。石川県立埋蔵文化財センター湯尻修平氏来跡。

6月20日（火）晴 最後に残ったA区のレベルを記入後、実測を使った機材の洗浄、かたづけを行う。本日にて現場作業の全てを終了する。

〈調査参加者（敬称略・五十音順）〉

【野々市町】

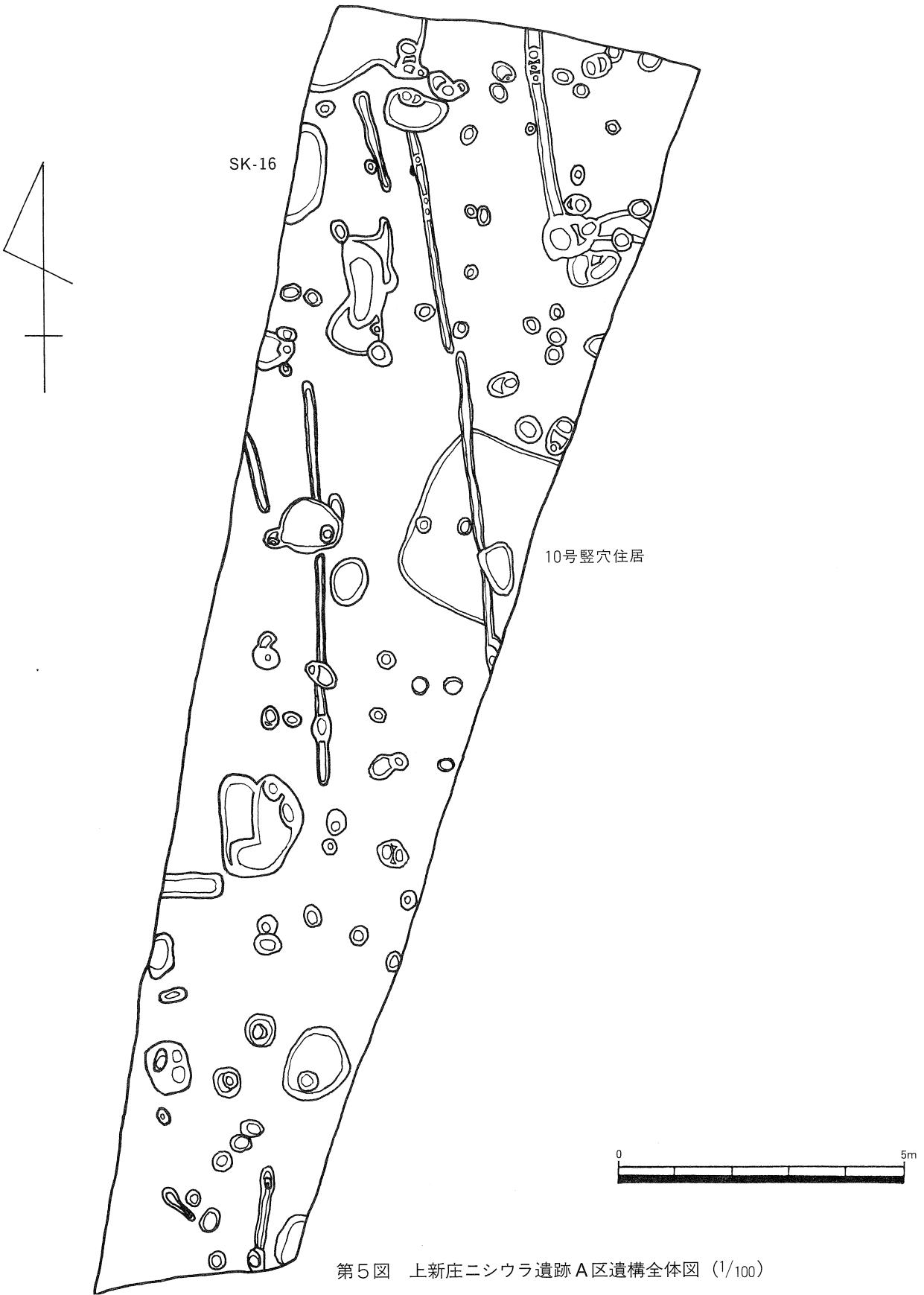
秋元民子 東 若菜 伊藤忠行 井手和郎 猪又邦子 大村導子 尾崎義雄 栗山 久
小林昭子 小松義一 小柳幹男 小山周作 三納友吉 高橋利幸 谷口初代 遠塚一豊
中小田博子 西 幸次 西本タキ 長谷川啓子 浜野光藏 佛田克子 古川信行
毎田百合子 南外志雄 宮川美津子 宮野 渡 安田幸三 山本いつ子 横山美弥子

【金沢市】

沢田フミ子 宮崎勇孝 宮下トヨ子

【鶴来町】

長田亀美雄



第5図 上新庄ニシウラ遺跡A区遺構全体図 (1/100)



第6図 上新庄ニシウラ遺跡B・C区遺構全体図 (1/200)

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

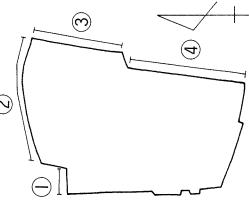
手取川扇状地の扇央部北東寄りに位置する上新庄ニシウラ遺跡は、調査区南端で遺構検出面の標高44.3m、同じく北端で43.8mを測る。調査区の南北延長は約65mであり、南から北へ向けて緩やかに傾斜していく地形である。また、本調査及びそれに先立つ試掘調査の結果から、東側には北流する現木呂川との間に南北に延びる鞍部が確認されており、西側についても、同様に大正時代までは開削されていた旧河道を挟んで地山が落ち込んで行く。北側については加賀産業道路下に向かって遺構が若干延びていることが推測され、南側では手取川支流の旧河道段階の自然礫層が地山上に表れており、遺構の延びは見られない。

現地表面より遺構検出面までの深さは、北端で約90cm、南端で約60cmを測る。基本的な層序は4層からなり、第1層が耕作土、第2層がそれに伴う床土、第3層は間層として存在する淡褐灰色粘質土、第4層が包含層となる暗褐色粘質土である（第7～10図）。一部第3層より切り込む遺構の存在が確認され、また一定量の遺物の出土も認められるため第4層上面を生活層とする時期の存在も予想されたが、平面での土色の違いによるプランの確認が非常に困難であり、上記のような状況もごく限られた範囲でのみ確認されるに過ぎないため、大方は第4層を包含層として以後の調査を進めた。その結果、当遺跡は弥生時代末～古墳時代初頭と、奈良・平安時代の大きく2時期にわたる集落跡であることが確認された。以下、それぞれの時代の遺構、遺物について順次報告して行くこととするが、遺物についてはその概略を記すに止め詳細は別表土器観察表を参照していただきたい。

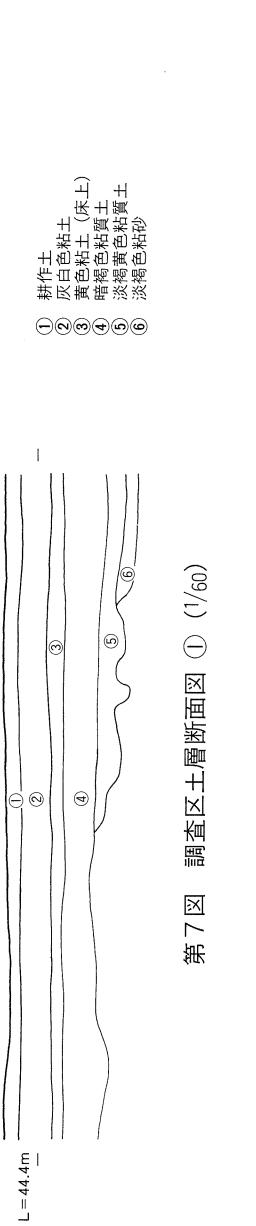
第2節 古墳時代以前の遺構と遺物

1. 積穴住居

1号積穴住居（第11図） C区南側に位置し、平面プラン隅丸方形を呈する。長軸6.4m、短軸6.1mであり、床面積36.2m²、長軸方位N40°Eを測る。検出面からの深さは最も残りの良い地点で約14cm、壁の立ち上がりは各面ともやや内湾ぎみに立ち上がる。壁溝については壁全面で確認されており平均で幅約18cm、床面よりの深さ約8cmである。主柱穴については4本柱であり、内東側に位置する柱穴1つは後世の掘立柱建物の柱穴によって壊されている。原形を保つ柱穴の最大径は上端で54cm、深さ56cmを測り、主柱間距離は心間で260cmである。床面は整地されているもののかなり起伏があり、一部で扇状地形成過程における自然礫層が表出している。中央には長軸190cm、短軸最大で138cm、深さ48cmを測る不定形の土坑を持つ。やはり後世の掘立柱建物築造による柱穴によって破壊されているが、特殊ピット様のものであろうか。当初の大きさは長軸135cm、短軸105cm、深さ30cm程度の橢円形と思われる。また、北東側壁内側に壁溝状の溝がもう1条、

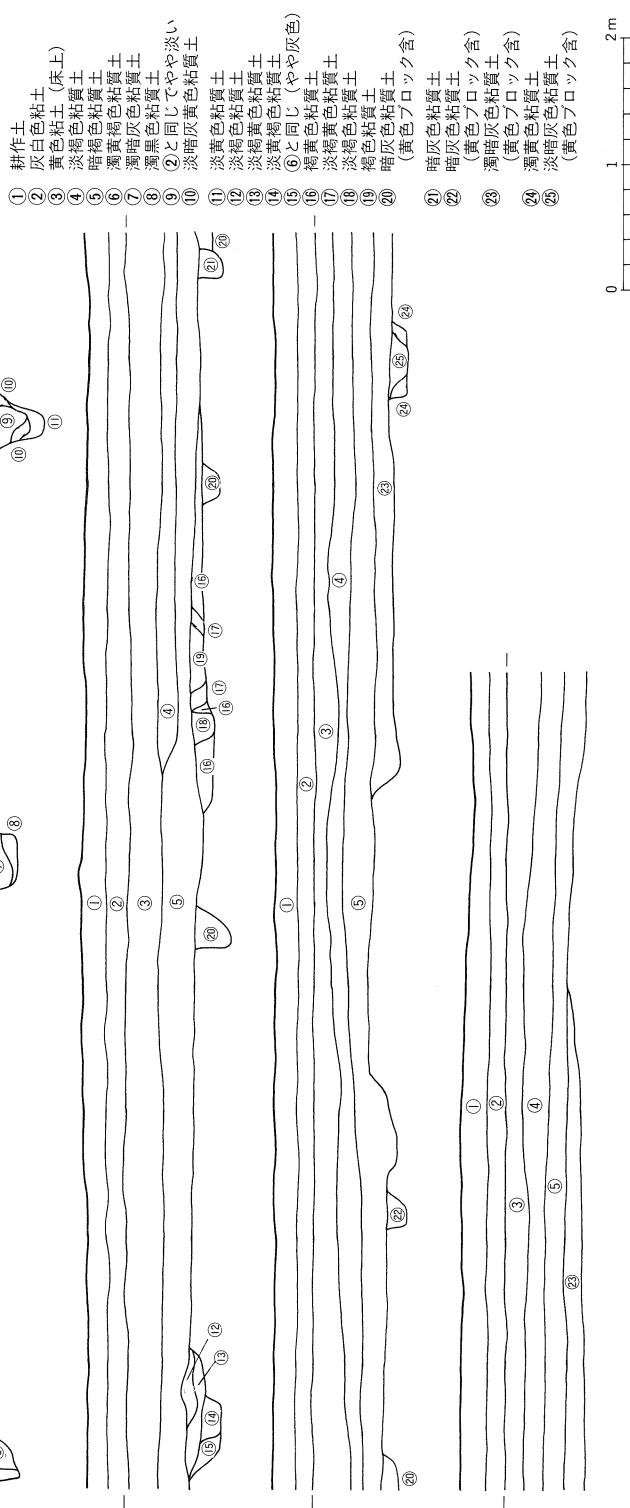
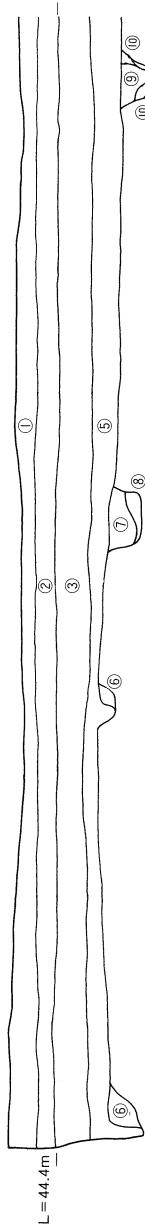


第7図 調査区土層断面図① (1/60)



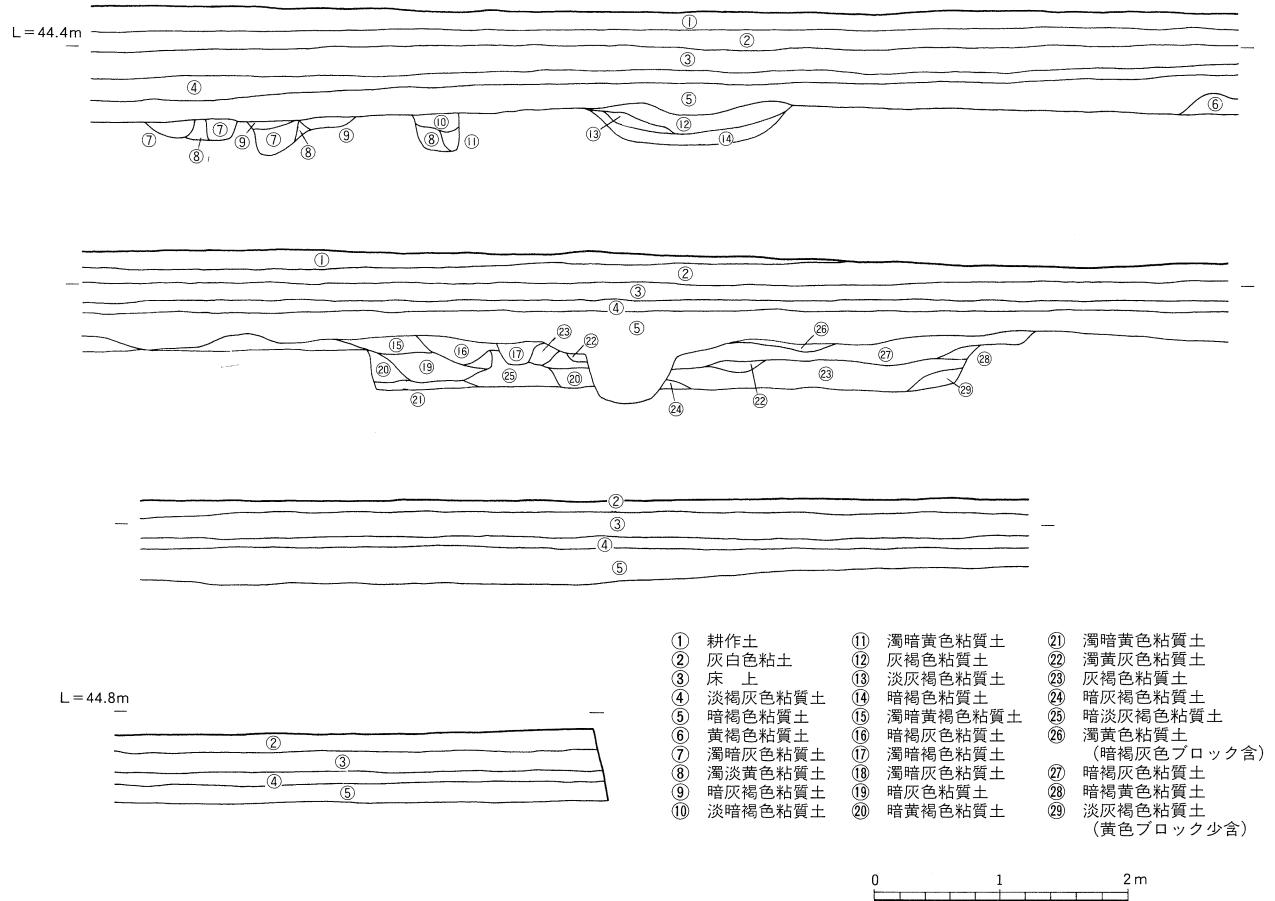
- ① 耕作土
- ② 灰白色粘土
- ③ 黄褐色粘土(床土)
- ④ 暗褐色粘质土
- ⑤ 淡褐色粘质土
- ⑥ 淡褐色粘砂

調査区土層断面図
実測地点模式図



0 1 2 m

第8図 調査区土層断面図② (1/60)



第9図 調査区土層断面図 ③ (1/60)

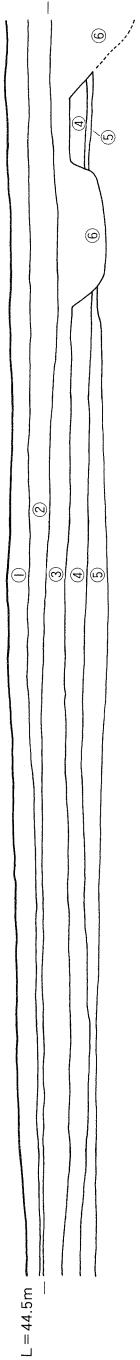
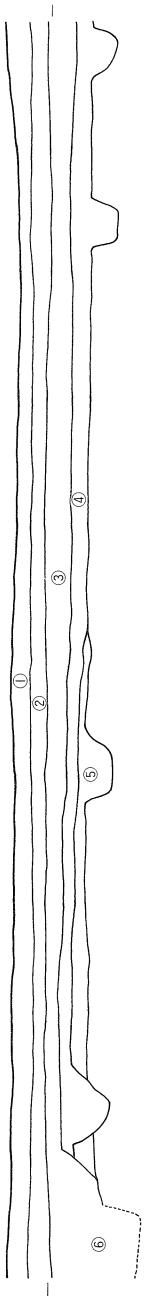
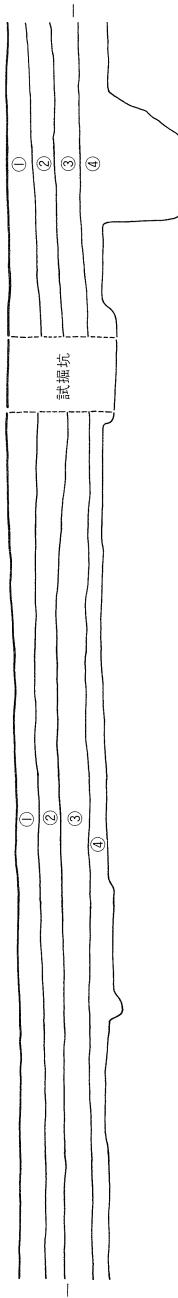
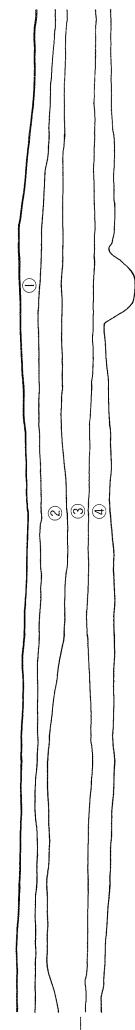
東コーナー部でさらにもう1条確認されている。土層断面ではいずれも住居覆土下に存在するため、拡張される以前の住居に伴うものと考えられるが、当初の主柱穴が確認されておらず判然としない。その他西側コーナー部に見られる土坑状のものは風倒木痕である。

1号堅穴住居からは、図化可能なものとして7点が出土している(第12図)。1は有段口縁の甕口縁部である。擬凹線は見られず、段部下端に突起部をもち直上にヘラ状工具による細い凹線が1条巡る。焼成があまく外面は黒灰色を呈し、一部炭化物の付着が認められる。2は端部が強く水平近くにまで外反する甕の口縁部である。外面に一部焼成時の黒斑が認められる。3は小型の鉢型土器である。摩耗が激しく、有段口縁外面下半に2条の浅い擬凹線が僅かに認められる。4は小型高壺の受部である。口縁端部で垂直に強く屈曲し、内外面ともに丁寧なミガキ調整の後赤彩を施す。5は高壺の脚部である。どっしりとした重量感があり、外面には縦方向の丁寧なミガキ調整を施す。6は屈曲部に焼成前穿孔を施す脚裾部である。上部より急激に強く開く裾端部は軽く面取りを施す。底径に比べて体部との接続径が大きく、器台の脚部と思われる。7は高壺

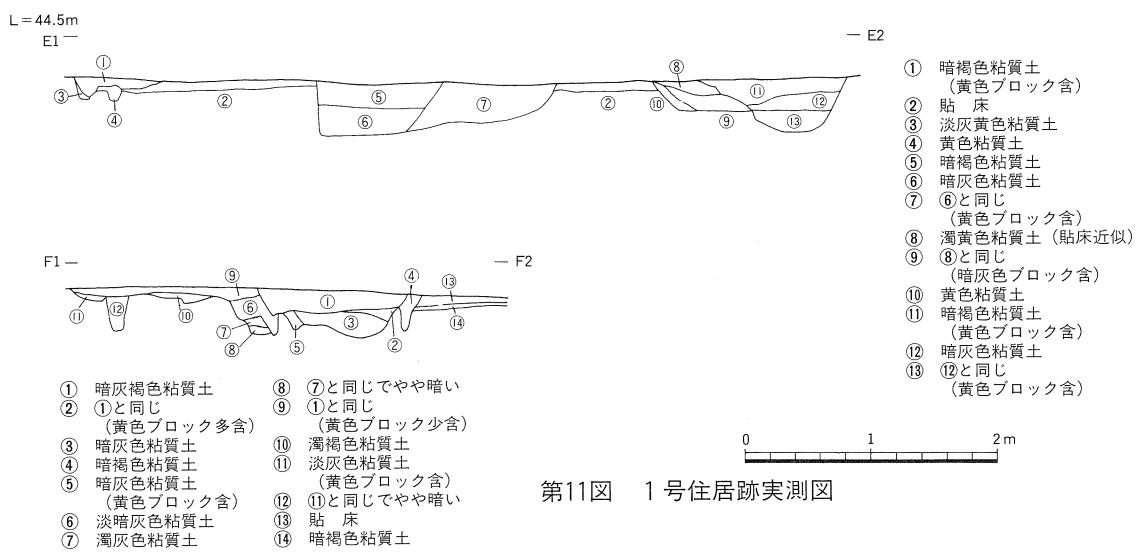
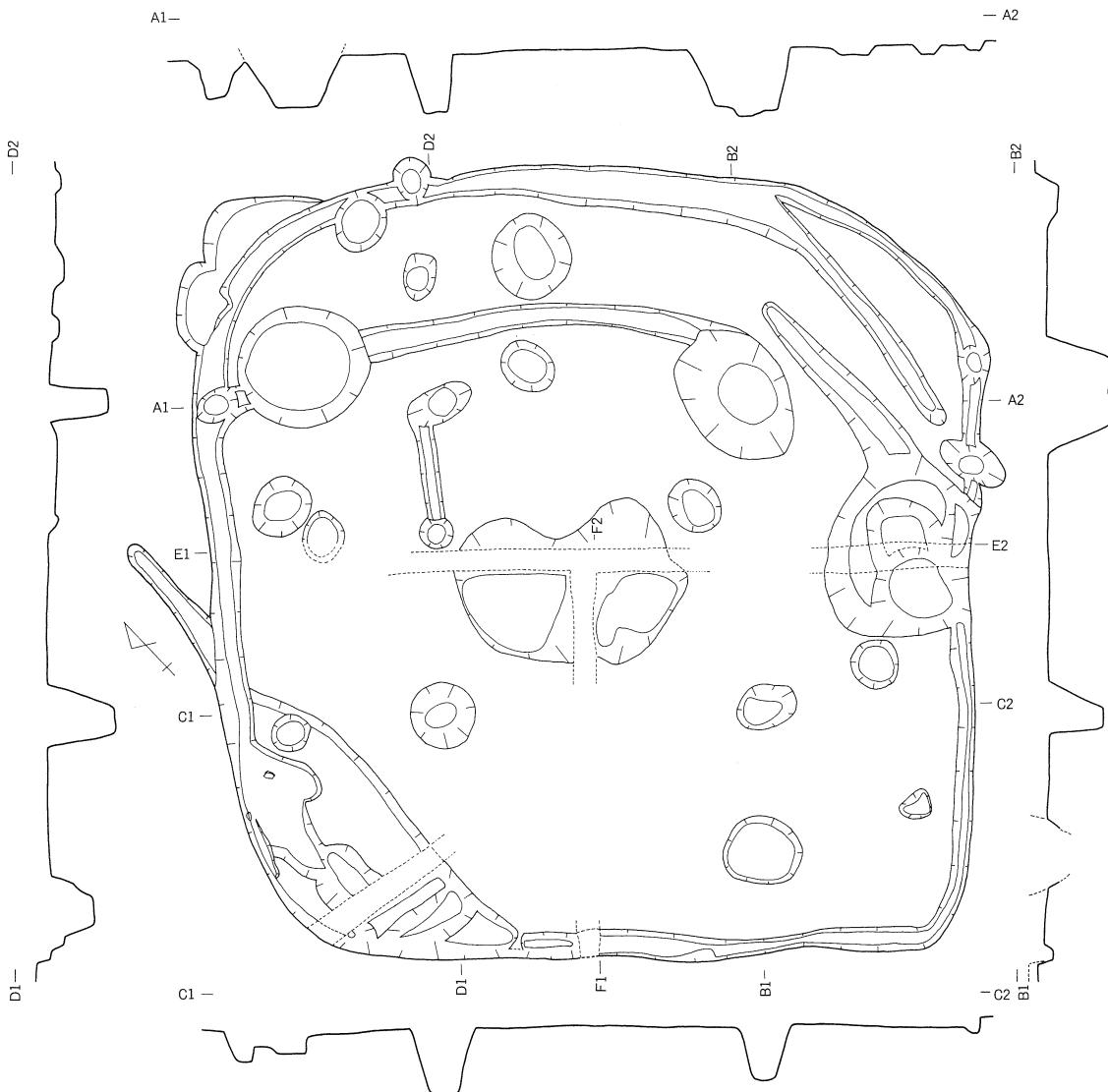
— 44.5m —
0 1 2 m

① 灰白色粘土
② 床
③ 淡褐色粘质土
④ 暗褐色粘质土
⑤ 明褐色粘质土
⑥ 近世溝

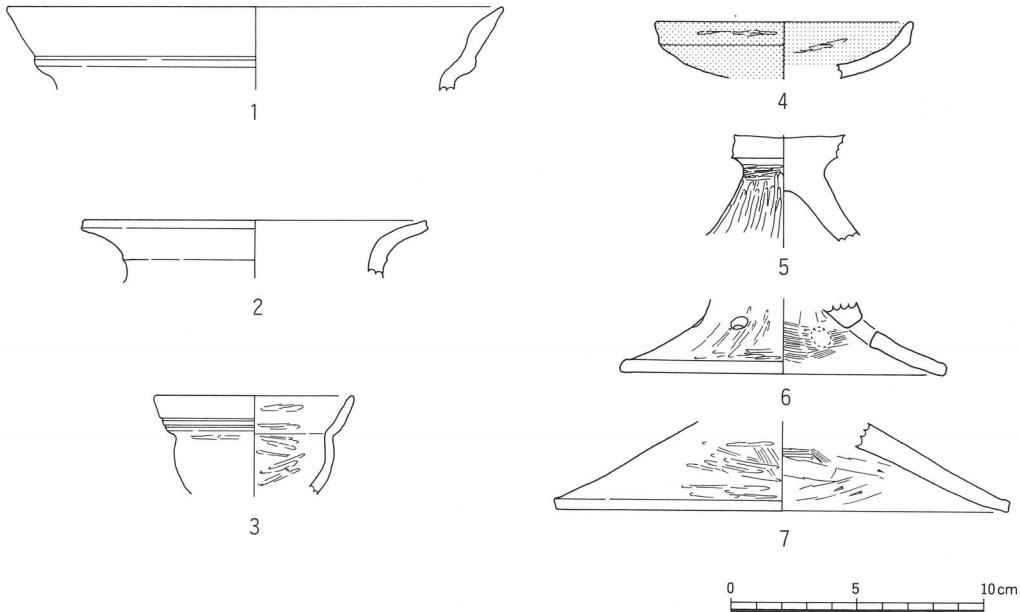
L = 44.5m



第10図 調査区土層断面図 ④ (1/60)



第11図 1号住居跡実測図



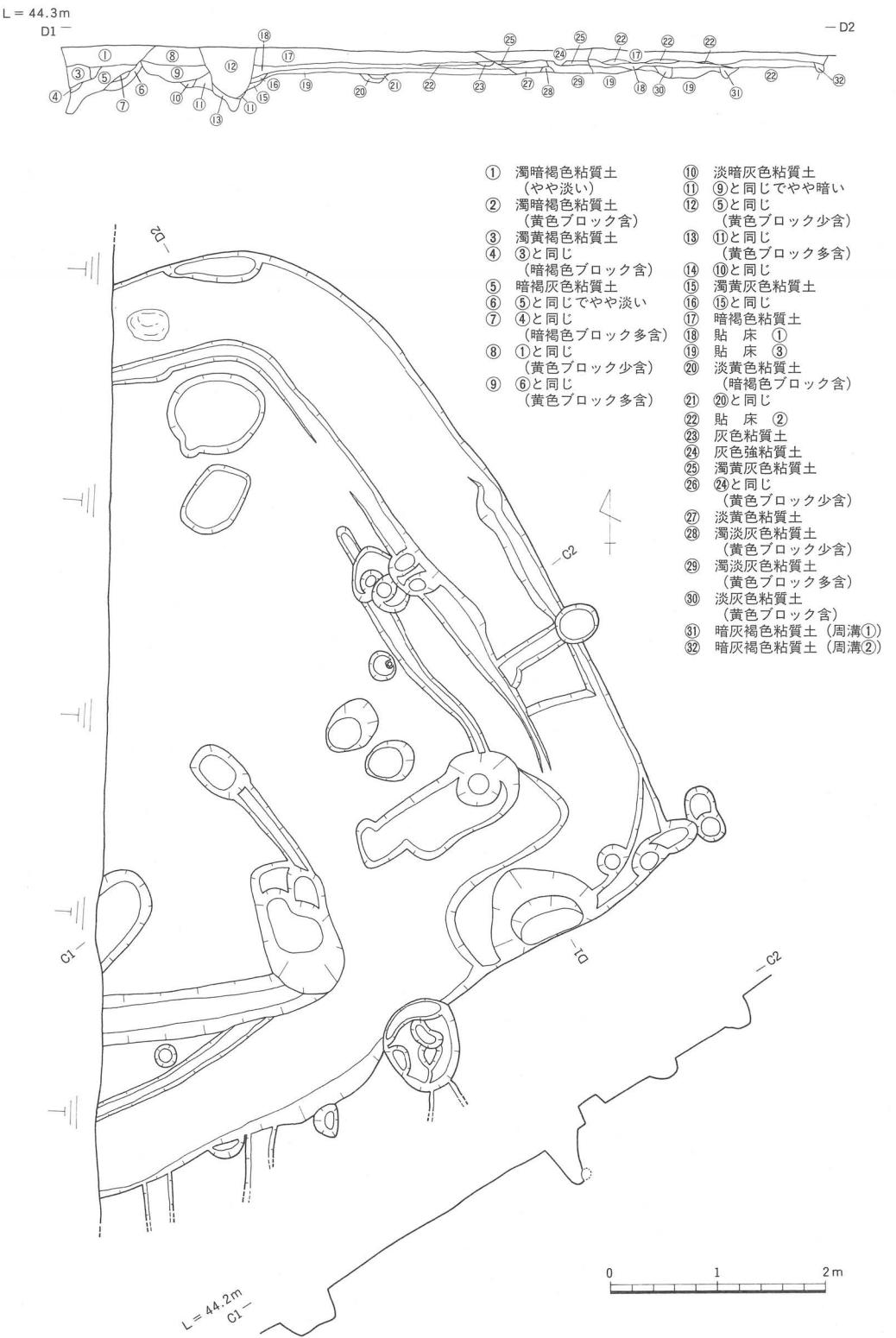
第12図 1号住居跡出土土器

の脚裙部である。端部に面取りを施し、直線的になだらかに立ち上がる。

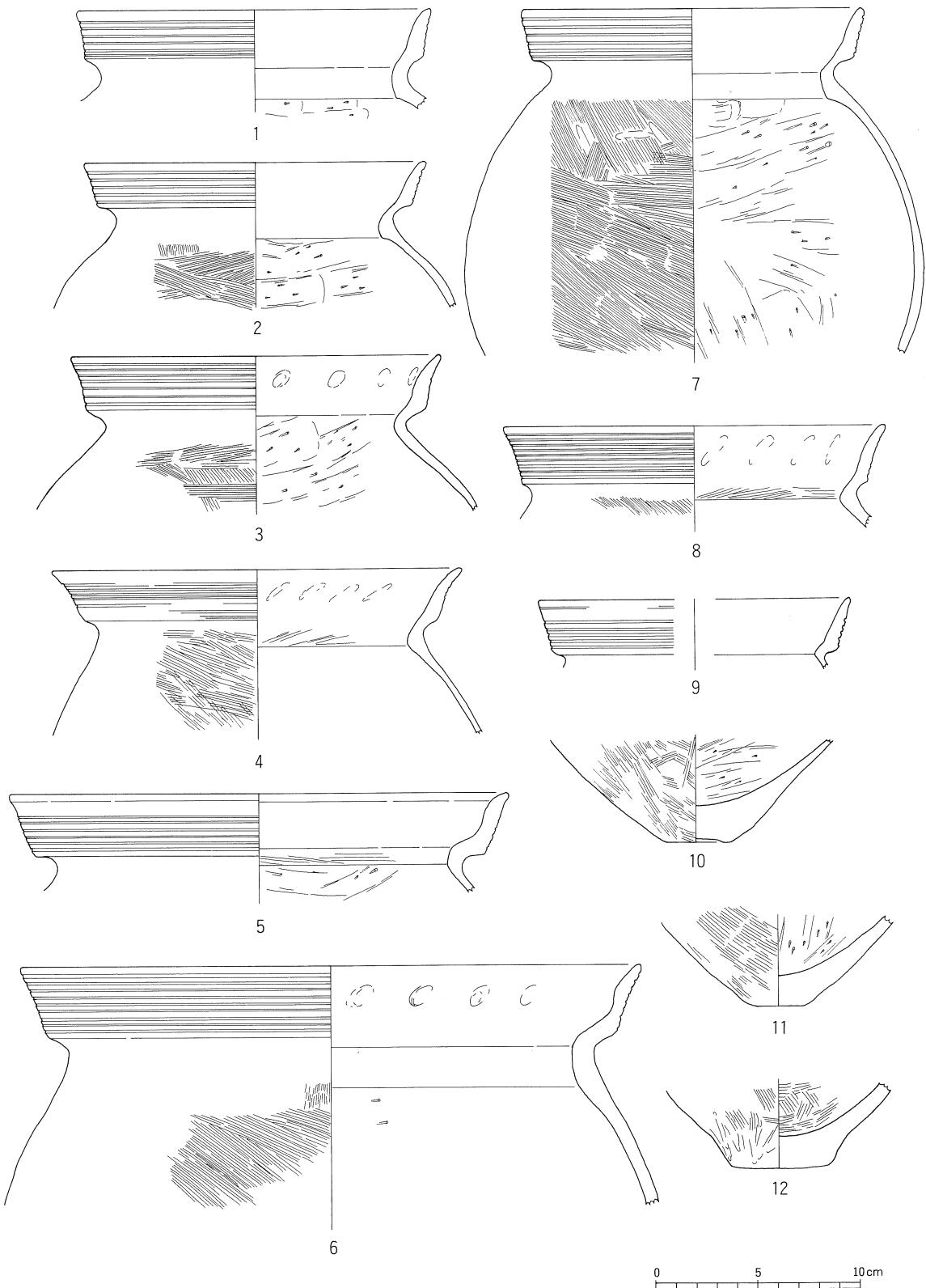
2号竪穴住居（第13・14図） C区南西壁際に位置し、ちょうど対角線状に東側半分が検出されており、西半については耕地整理以前の旧用水路により破壊されている。確認された壁面内側のほぼ全域に壁溝状の細い溝が見られ、土層断面の観察からやはり拡張されたことがわかる。いずれも平面プラン隅丸方形を呈し、検出面より床面までの深さは17cm、軸方位N55#Eである。当初の規模は一辺5.7m、床面積推定で33.7m²、主柱穴径48cm、深さ47cm、心間距離280cm及び壁溝幅25cm、深さ12cmを測る。拡張された住居は一辺7.4m、床面積推定53.1m²、主柱穴径72cm、深さ52cm、心間距離440cm及び壁溝幅23cm、深さ11cmを測る。1号竪穴住居と同様東側コーナーの柱穴は後世の掘立柱建物により壊されており、拡張された段階で南東壁寄りに定形化した特殊ピットを持つ。長軸130cm、短軸128cm、深さ62cmを測る略正方形を呈し、2段掘りされたテラスから緑色凝灰岩の塊が出土している。出土した遺物は竪穴式住居の中では最も多く（第15～17図）、後述の大溝と並び当遺跡での古墳時代以前としては主体をなす。図中1・5・8・13・18・19・20・22・26・27・28・は床面直上よりの出土であり、2・12は特殊ピット、4・30は南東壁際にあるピットからの出土であるが、このピット自体は土層断面の観察より後に掘り込まれたものであることが看取される。9・15は外側壁溝覆土よりの出土である。33は床面レベルよりの出土であるが、旧用水路掘削の際の混入品である。1～4・7～9は有段口縁に擬凹線を施す中型の甕である。1・7以外は内面頸部屈曲部の面が消失しており、4は内外面共にさらに形骸化が著しい。3は口縁部内面に指頭圧痕が認められる。7はずんぐりとした口縁部に大きく張り出す体部を持



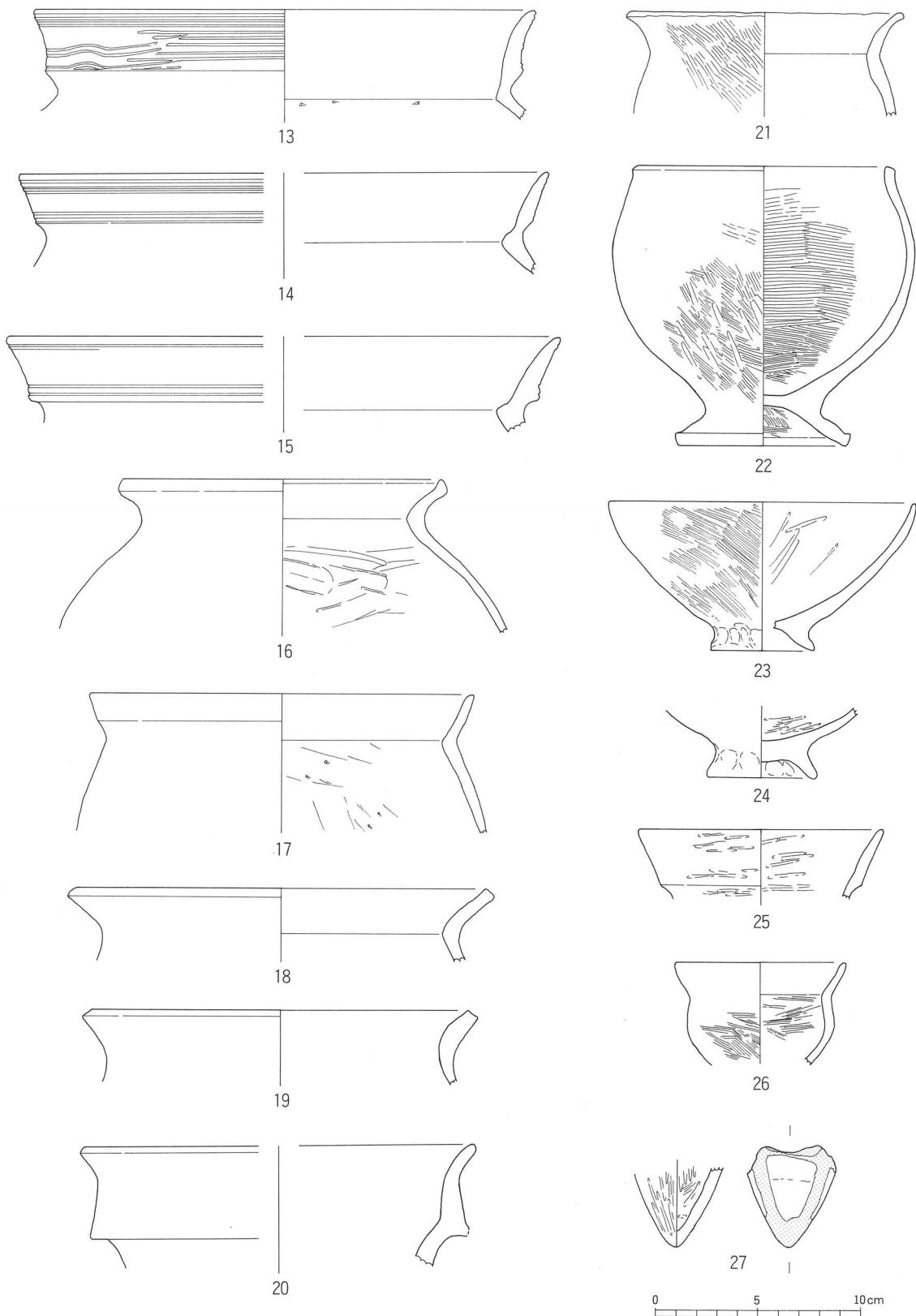
第13図 2号住居跡床面状況実測図



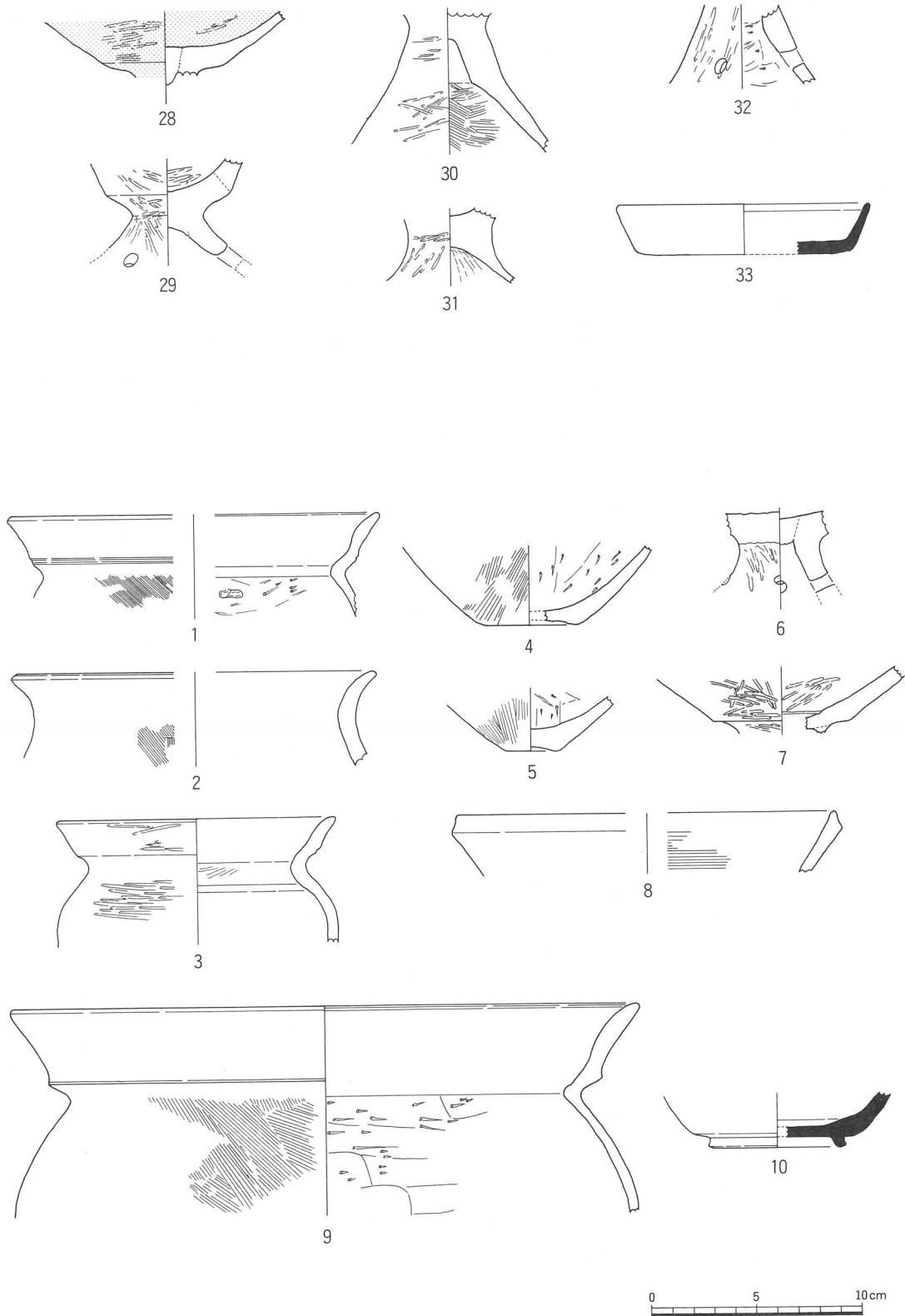
第14図 2号住居跡床面下状況実測図



第15図 2号住居跡出土土器



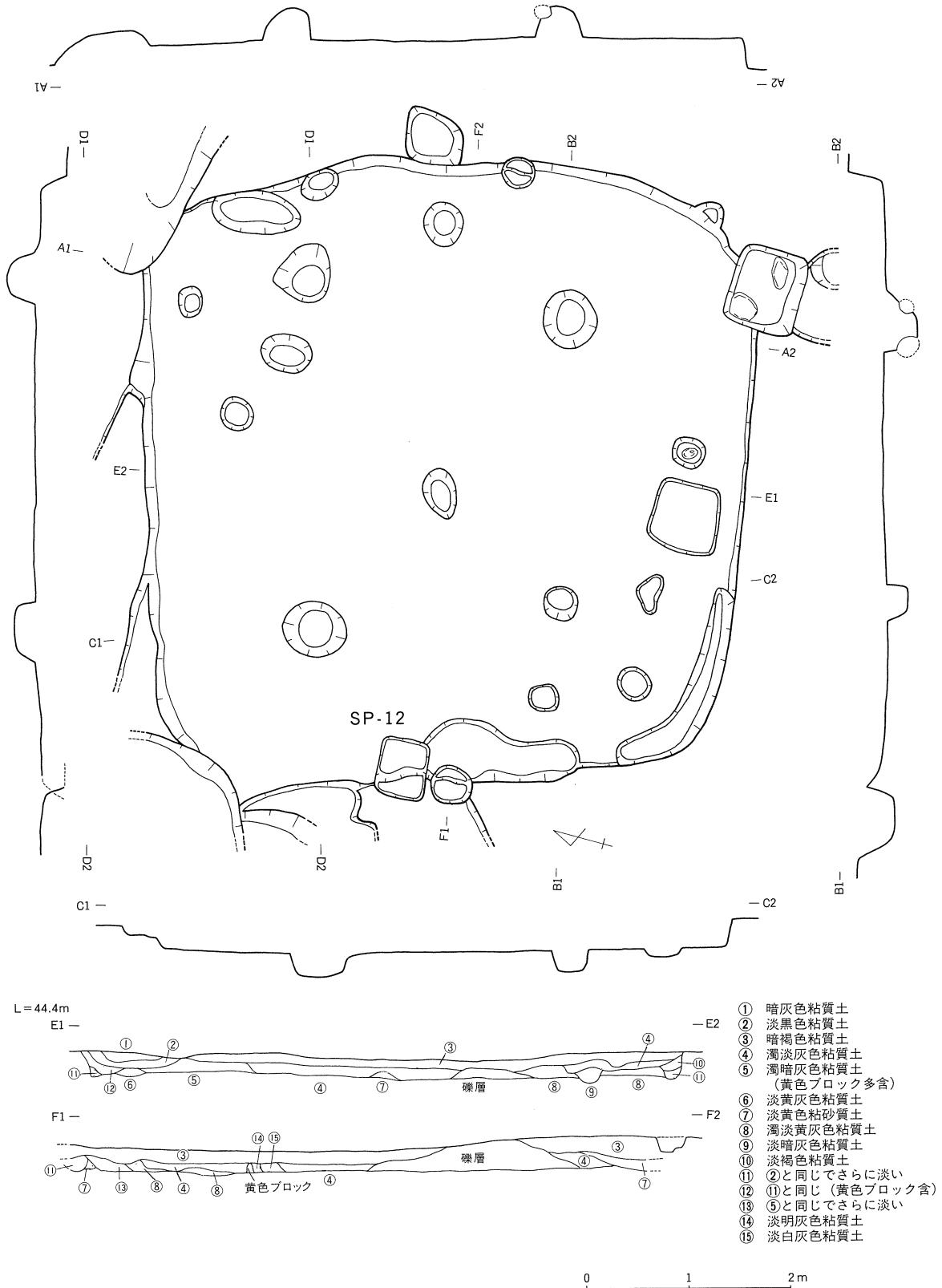
第16図 2号住居跡出土土器



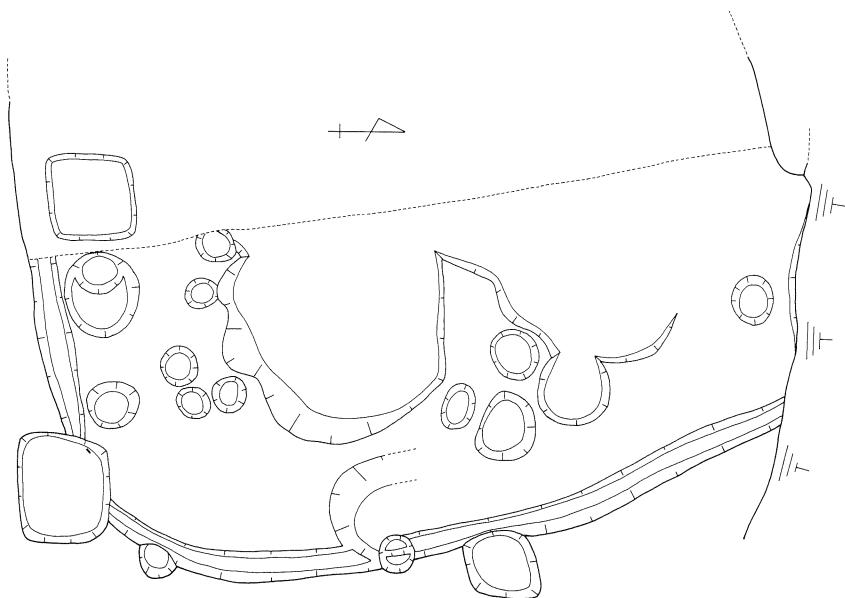
第17図 2・3号住居跡出土土器 2号住(28~33)、3号住(1~10)

ち、北加賀V様式系の特徴をよく残す。5・13～15は同じく有段口縁のやや大型の甕である。5は口縁部上位に擬凹線が見られず、頸部の屈曲部内面にハケ調整痕を残す。13は直立ぎみに外反する口縁部の端部を外展する先細りに仕上げ、外面の擬凹線には大きな乱れが認められる。14・15はいずれも口縁帯外面の口唇部と下端に細い擬凹線を巡し、中央を無紋とする。5以外は頸部内面に面を持たない。6は有段口縁に擬凹線を巡らす大型の甕である。頸部内面に広い面を持ち、口縁部内面に指頭圧痕が認められる。16～19は所謂くの字口縁を持つ中型の甕である。16は球状に大きく張り出す体部に強く屈曲する口縁部が付き、端部を上方へ摘まみ上げてすんぐりとした断面三角形状に仕上げる。17はやや内湾ぎみに伸びる短い口縁端部に軽く面取りを施す。18・19は共に短い口縁部が外反して端部に面取りを施す。19は口唇部の器壁が厚く、シャープさに欠ける。21は小型のくの字口縁の甕である。外面に口縁端部までハケ調整を施す。20は端部を強く外反させる壺である。22～24は台付きの鉢・椀型土器である。22は球状に丸く膨らむ体部から内湾して口縁部に至る深い器形であり、内外面共にハケ調整を施す。内面の調整原体はやや木目の粗い小口を用いるが、調整自体は台の造り同様非常に丁寧なものである。27は小型尖底土器である。非常に精緻な造りであり、尖底部を丸く包む赤彩により4区画の文様を描き出す。28は高坏の受け部下半であり、内外面共に赤彩を施す。29は東海地方に出自を求められる高坏型土器である。鋭角的に強く立ち上がる受け部に大きく開く脚部が付く。30～32は高坏の脚部である。32は中位に4箇所穿孔が認められる。33は須恵器の盤である。周辺よりの混入品であろう。

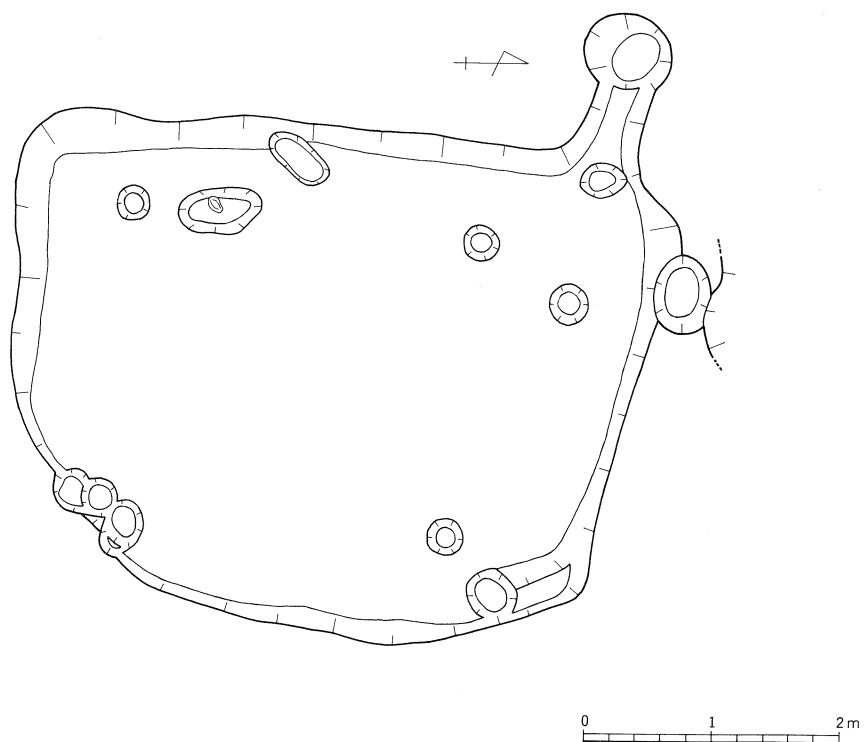
3号竪穴住居（第18図） B区中央やや東寄りに位置し、平面プランは隅丸方形を呈し、検出面より床面までの深さ22cm、軸方位N14°Wを測る。長軸6.2m、短軸5.8m、床面積33.2m²であり、南東側コーナー部はやや弛緩した形態を示す。壁溝は南西隅において僅かに確認されるのみであり、平均で幅28cm、深さ8cmを測る。主柱は4本柱であり、心間距離280cm、最も大きな柱穴で直径62cm、深さ25cmである。床面は均一に整地されており、同時代のものとして他に目立った遺構は見られない。遺物は図化可能なものとして10点が出土している（第17図）。1は1号竪穴住居1と同タイプのものである。口縁部外面下端の稜がやや鈍く、頸部内面に僅かに面を持つ。2は小片のため口径が不確実であるが、短い口縁部が強く外反するくの字口縁の甕である。端部外面に軽く面取りを施し、口縁部は内外面共に横ナデ、外面頸部以下を雑なハケ調整で仕上げる。3はやや小振りの壺である。外面口縁部と体部共に施されたミガキは雑であるが、内面は非常に丹念なミガキを施す。9は無紋有段口縁の大型の甕である。口縁部の外面下端に稜を持ち、細い凹線を1条巡らす。頸部内面も鋭い稜を持ち、以下を横位ケズリで仕上げる。7は高坏の受部下半である。内面は丁寧なミガキを施すが、外面は器表がかなり荒れている。8は非常に小片であるが、土師器長胴甕の口縁端部であり、図上破断面より緩やかに外へ屈曲する形跡が僅かに残る。端部を上面に摘まみ上げ、外面にやや内屈する面取りを施す。10は須恵器の有台坏底部である。8と共に混入品である。



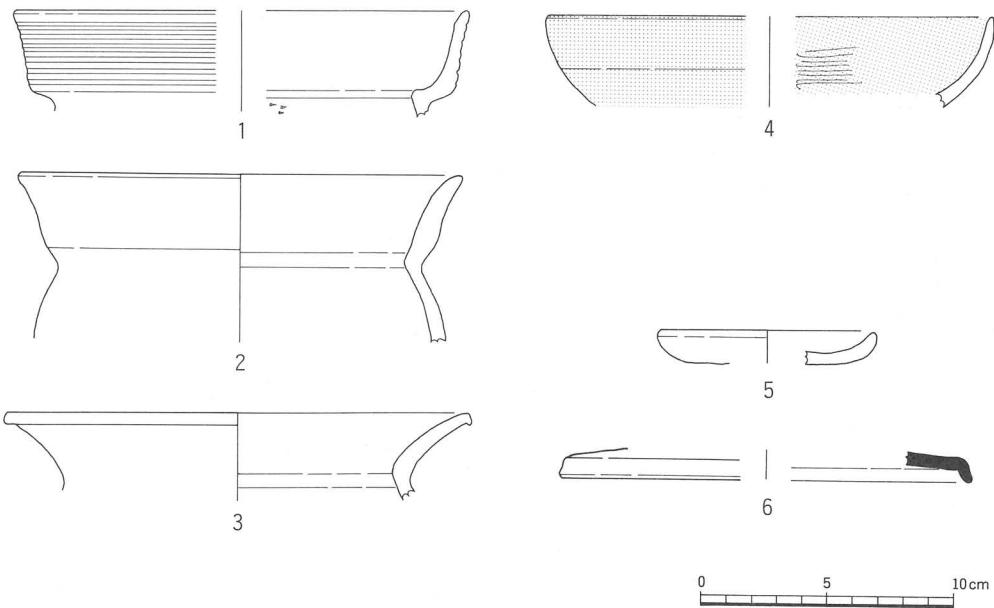
第18図 3号住居跡実測図



第19図 3号住居跡東半床面下状況実測図



第20図 4号住居跡実測図

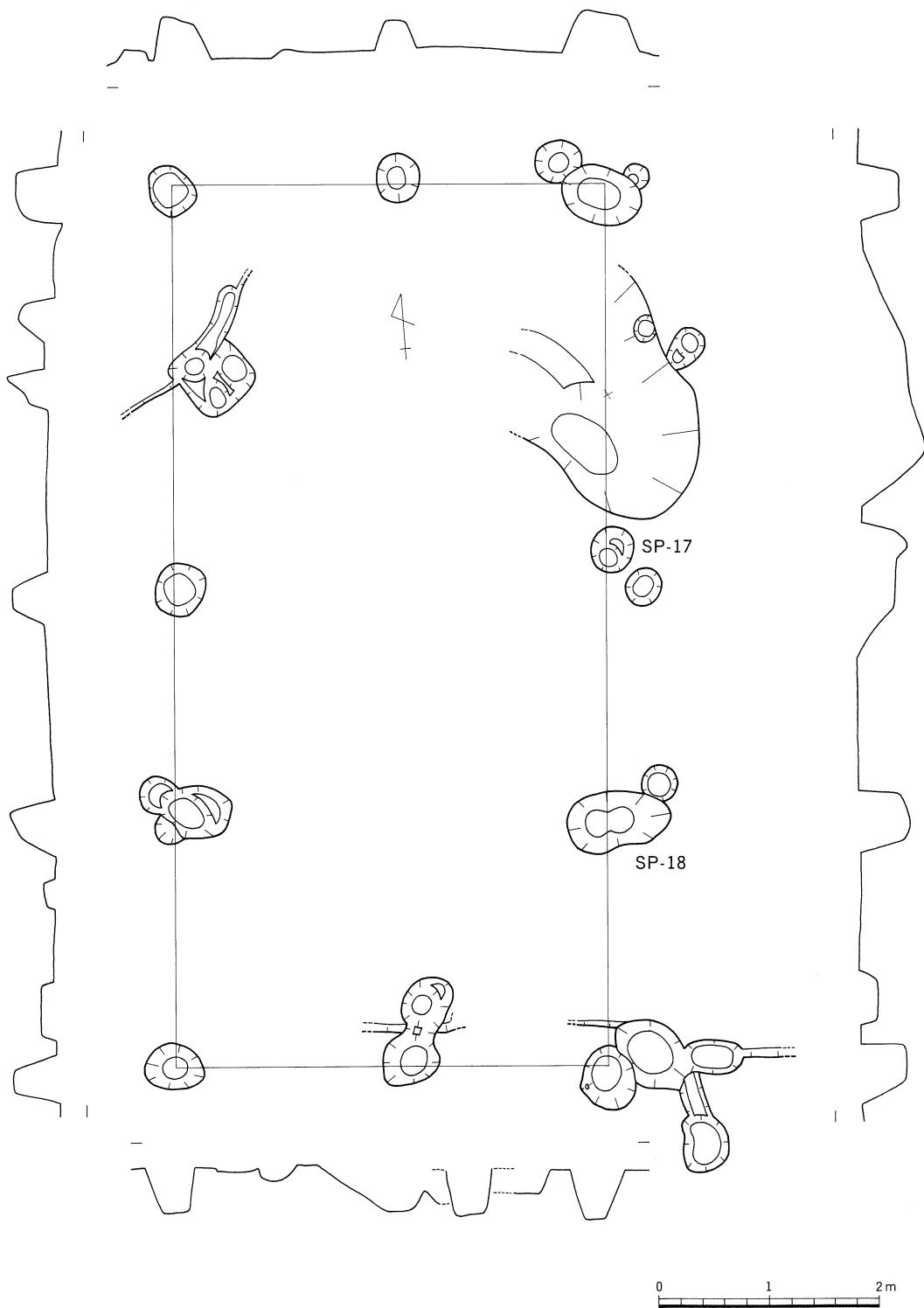


第21図 4号住居跡出土土器

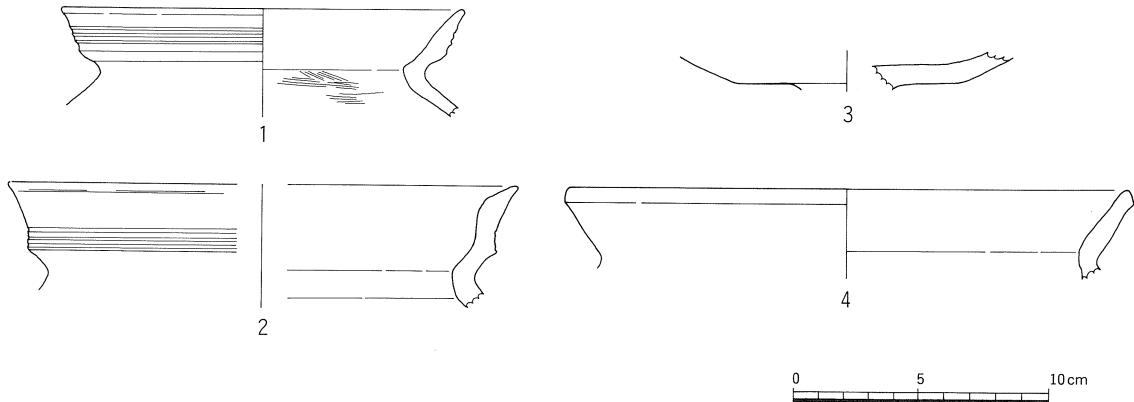
4号竪穴住居（第20図） C区北西隅に位置し、平面プランはいびつな隅丸長方形を呈し、特に南東コーナー部の歪みが大きい。壁はあたかも浅い椀状を呈するかのごとく丸く湾曲して立ち上がり、壁溝も見られない。検出面より床面までの深さ27cm、長軸最大で5.2m、短軸同じく4.0m、床面積17.5m²、軸方位N 8° Eを測る。主柱は4本柱であり、前述の3棟に比べてやや壁際に位置する。主柱間距離は心間で275cm、柱穴径最大で45cm、深さ35cmを測る。床面は貼床等の整地された痕跡は認められず、起伏のある所謂掘りっぱなしの状態であり、他に目立った遺構も見られない。遺物も少なく、図示できたものは僅かに6点（第21図）のみである。1は浅い擬凹線を施す有段口縁の甕である。端部への立ち上がりが深く、段部外面は丸みを帯びてあり、内面に僅かに面が残る。2も同じく有段口縁の甕であるが、無紋である。段部内外面の弛緩は一層顕著で、形骸化をたどる。体部の器壁に比べて口縁部の厚みが著しく重苦しい印象を受ける。3は頸部より強く外反するくの字口縁の甕であり、端部を面取りした際の粘土が小さい垂下帯のように残る。その他4は内外面共に非常に丁寧なミガキで仕上た赤彩土師器であり、5は土師質土器、6は須恵器壺蓋の端部であり、混入品である。

2. 掘立柱建物

1号掘立（第22図） 調査区ほぼ中央西寄りに位置する3間×2間の建物である。桁行き8.1m、柱間225cm、梁行き3.95m、柱間195cmを測り、軸方位N 3° E、床面積32.1m²である。柱穴の形状は略円形又は橢円形を呈し、径45～72cm、深さ27～44cmを測る。梁間北面の中柱が柱穴ラインよ



第22図 1号掘立柱建物実測図



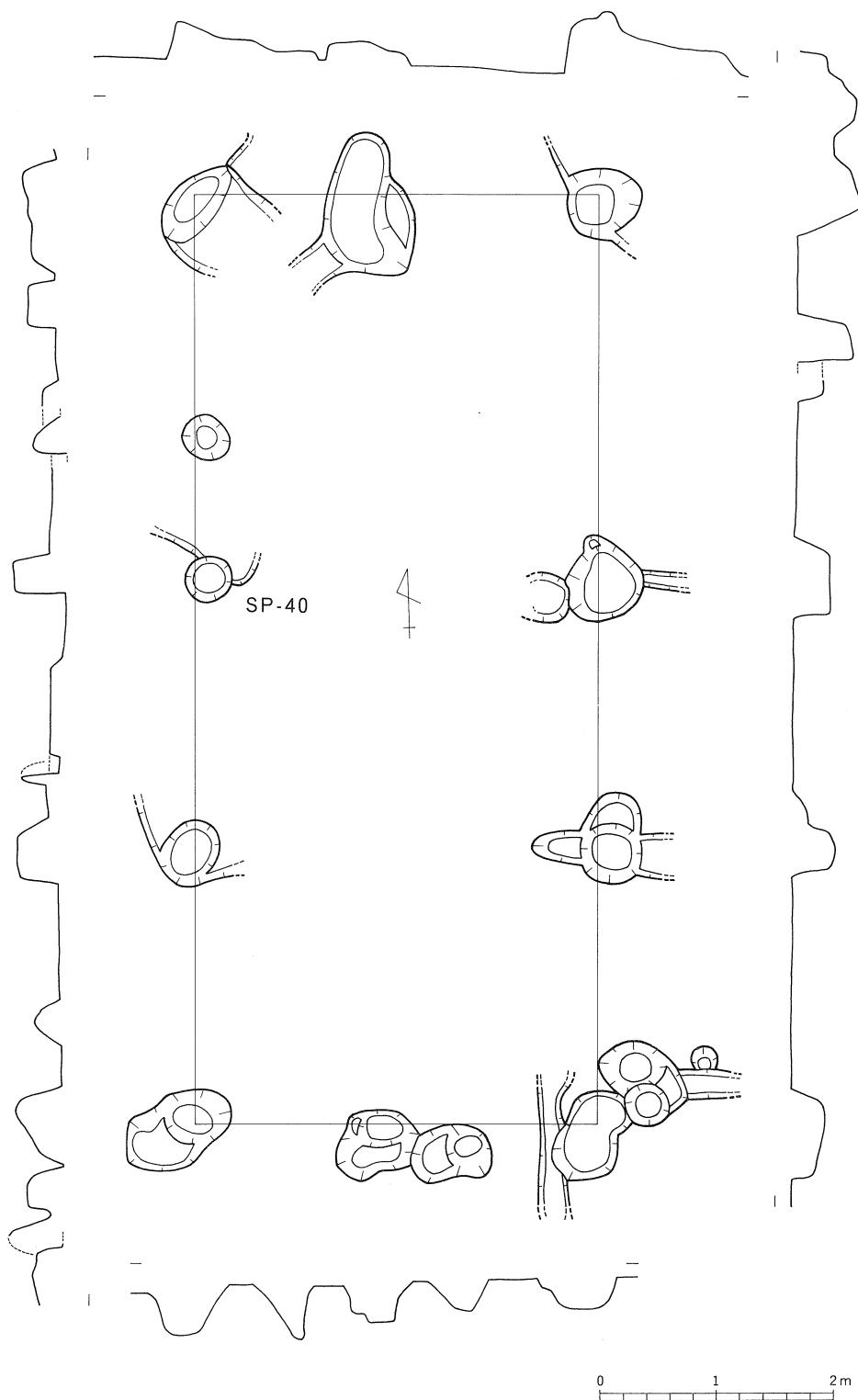
第23図 1号掘立柱建物柱穴出土土器 SP-18(1~3)、SP-17(4)

り外側へ若干突出し、棟持柱になると思われる。遺物は建物を構成する2つのピットより出土している。(第23図) 1~3はSP-18より出土しており、1は短い口縁帯が外傾して立ち上がる有段口縁の甕であり、口縁外面に浅く雑な擬凹線を施す。2はやや直立ぎみに立ち上がり強く外反する口縁端部を先細りに仕上げ、外面下半に不鮮明な擬凹線を施す。4はSP-17より出土した土師器長胴甕の口縁部である。端部外面を摘まみ上げることなく内傾ぎみに面取りを施す。出土遺物の組み合わせから建物の帰属する時期については大変苦慮したが、規模及び柱穴の掘り方形状より古墳時代以前とした。

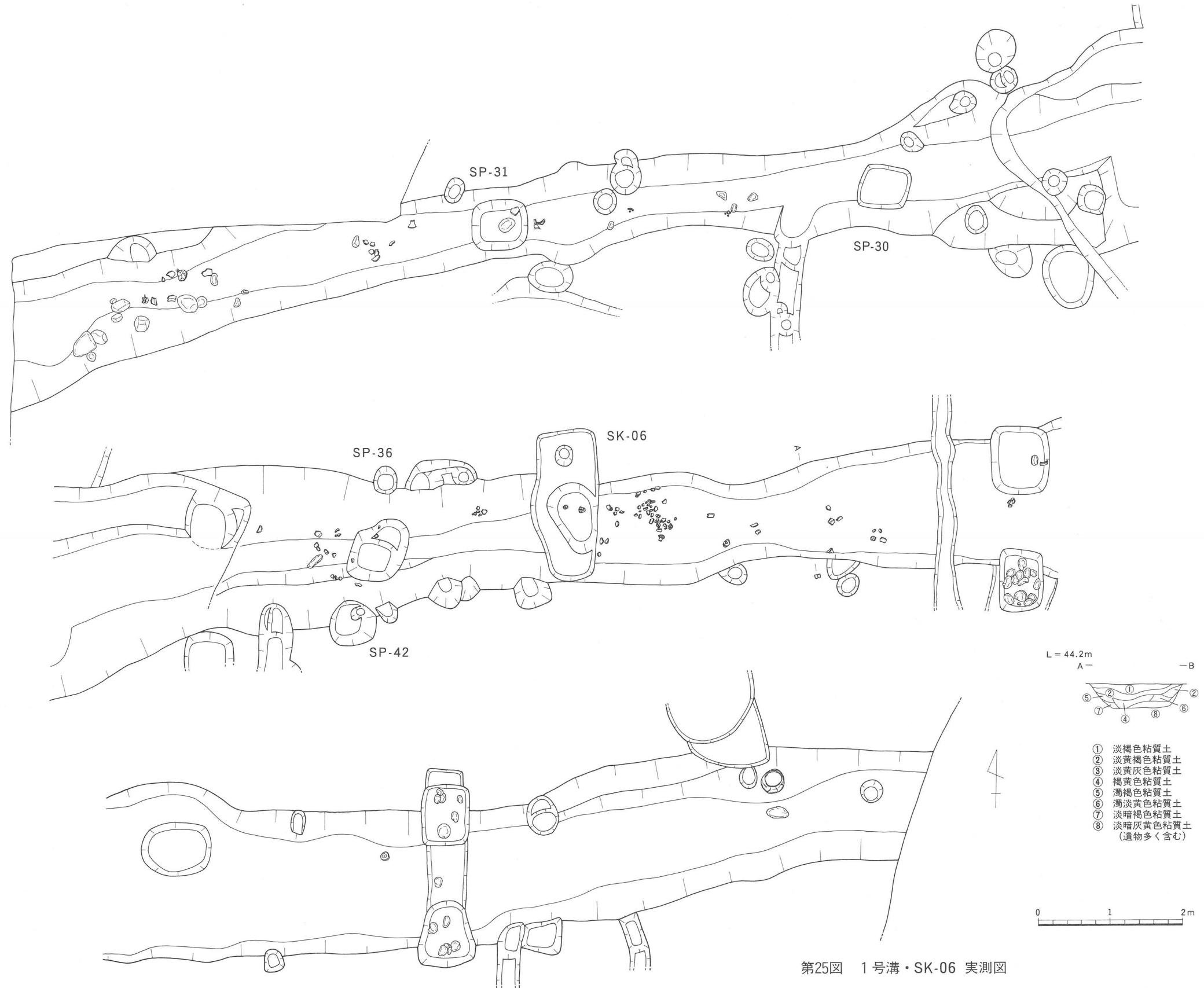
2号掘立 (第24図) 調査区のほぼ中央、1号掘立の約3m東側に位置する。3間×1間の建物で、桁行き8.0m、柱間245cm、梁行き3.35mを測り、軸方位N 2° E、床面積26.1m²である。柱穴の形状は略円形又は楕円形を呈し、径42~68cm、深さ27~52cmを測る。梁間南面に棟持柱となる可能性があるピットが存在しており、片側棟持柱の建物のようにも見える。遺物は極小片が僅かに出土しているが、図化に耐えるものはなく該期に付随する建物跡と判断し得るのみである。

3. 溝

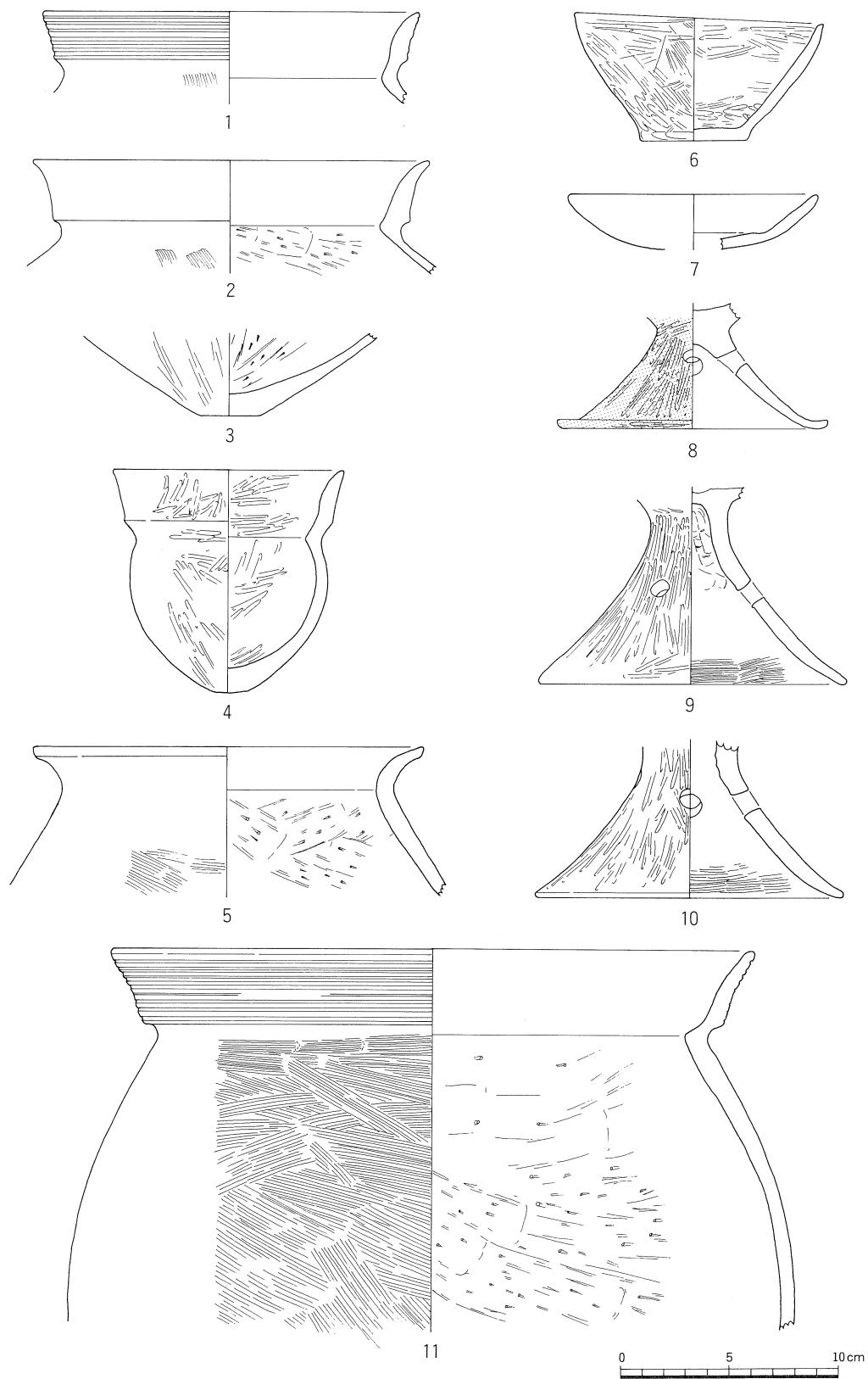
1号溝 (第25図) 調査区北端を東西に横切るようにして開削されている。幅員は最も狭い所で1m、広い所で2.3m、溝底のレベルは西端で43.7m、東端で43.5m、検出された総延長は41.3mを測り緩やかに東へ向けて流下していたものと思われる。上層覆土は淡黄褐色を呈し、地山の色調及び土質と非常に類似しているため当初はその存在に気が付かなかったが、後世の柱穴を掘り進むうちに底面より該期の土器が多量に出土したために検出できたという経緯がある。平成5年度に加賀産業道路を挟んで北側で実施した上林新庄遺跡の調査では、距離にして約150mの隔たりがあったものの該期の遺構及び遺物は全く検出されておらず、おそらくこの溝がニシウラに所在した弥生集落の北限を示すものであろう。遺物は当遺跡の中にはあっては最もまとまった量



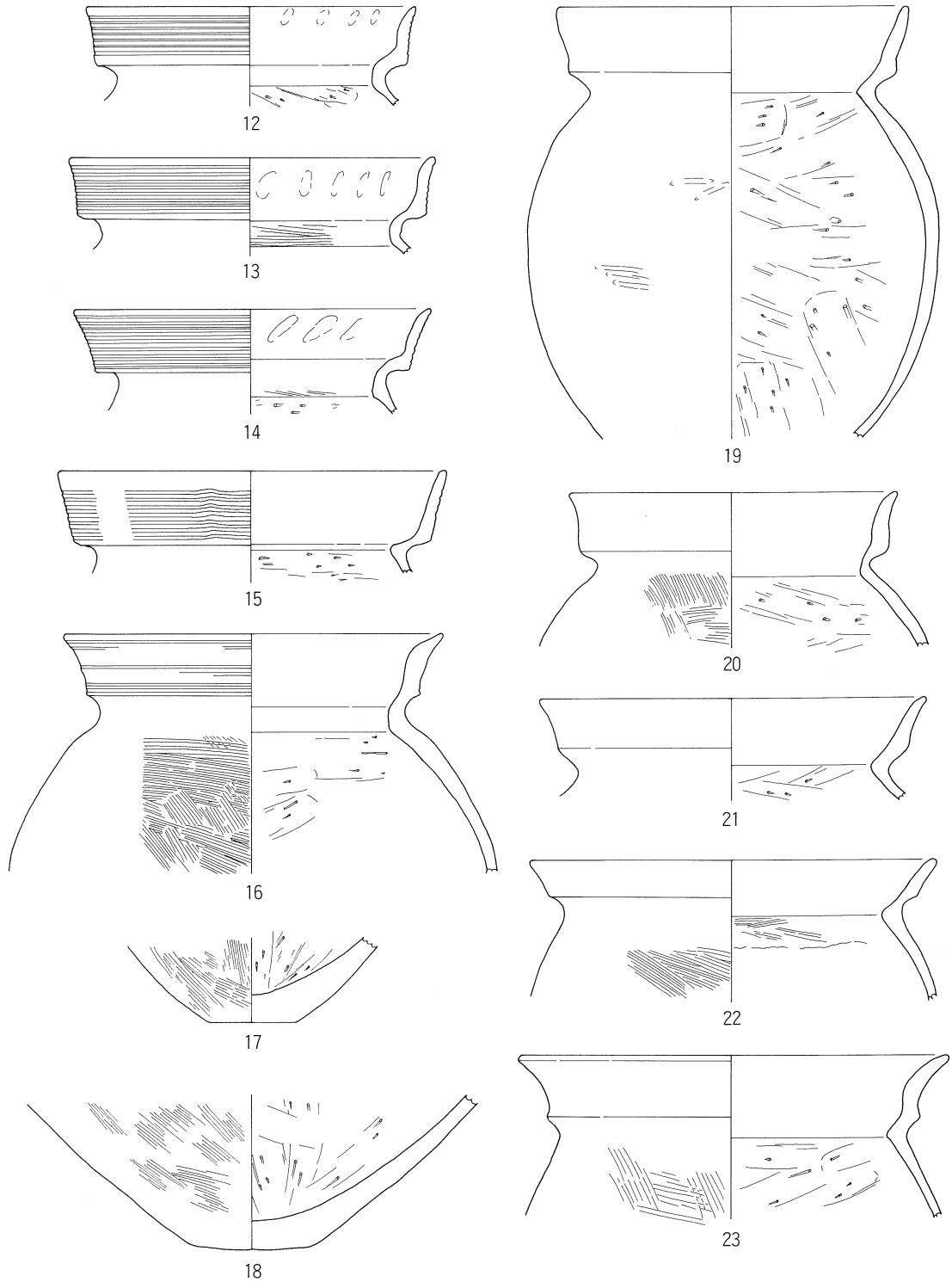
第24図 2号掘立柱建物実測図



第25図 1号溝・SK-06 実測図

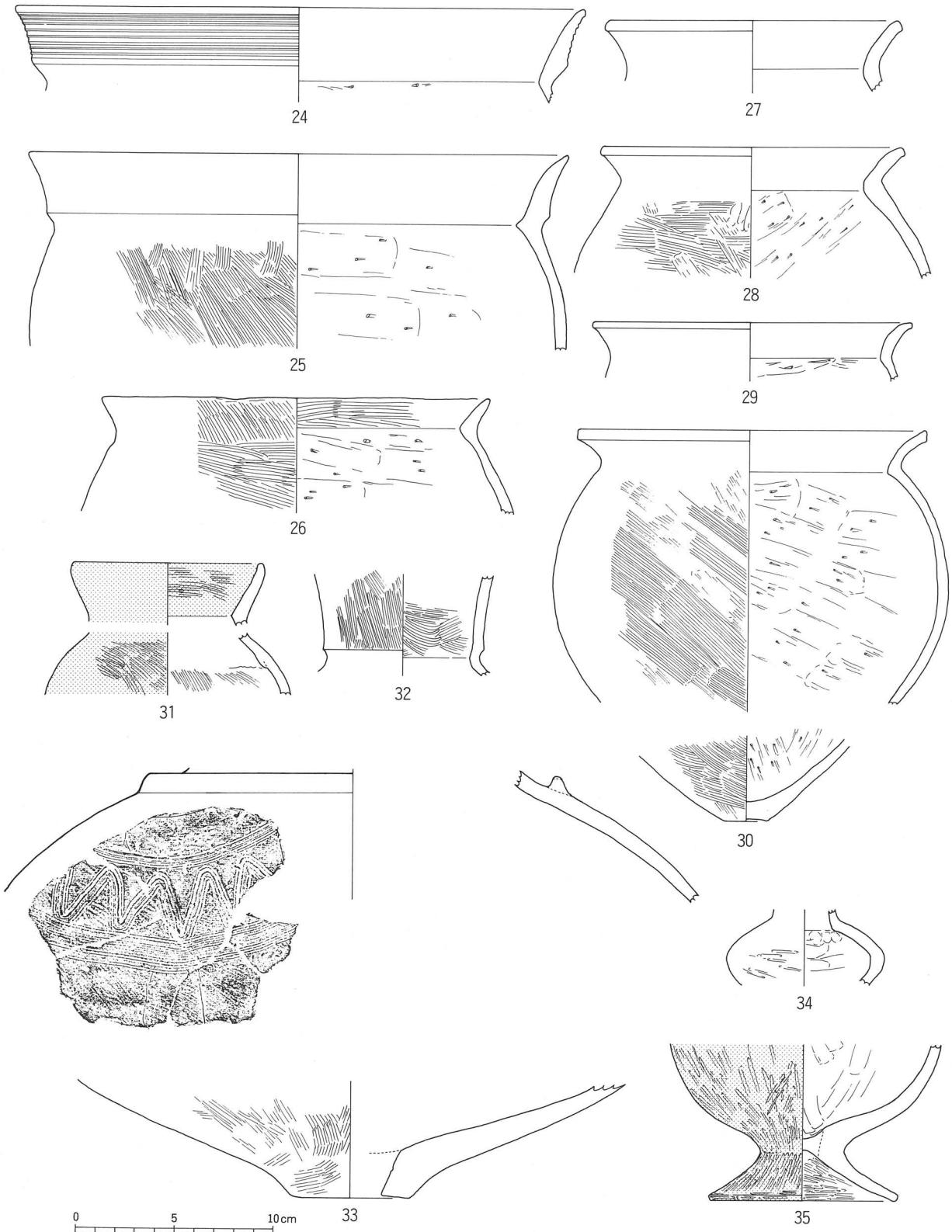


第26図 1号溝出土土器（下層）

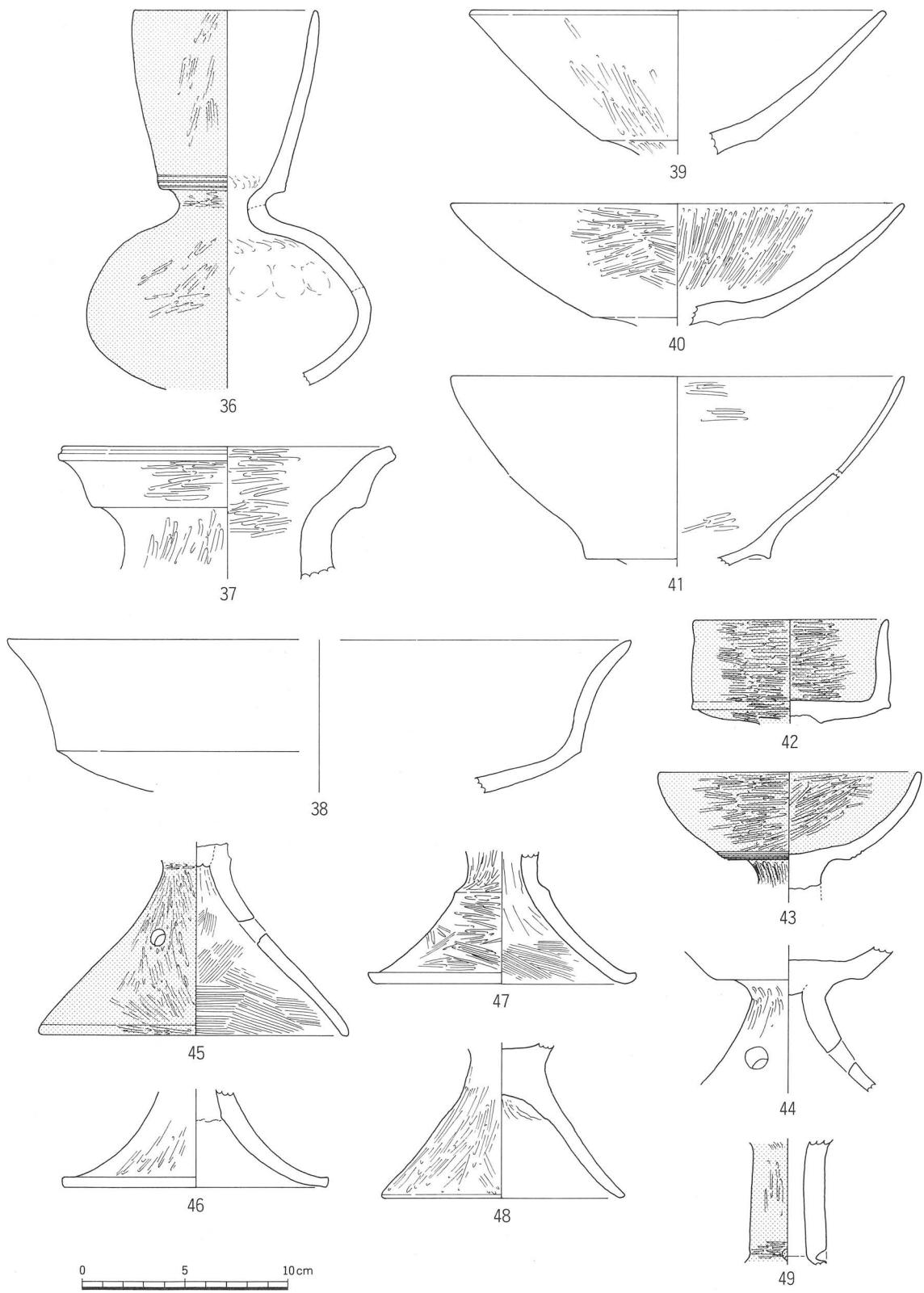


0 5 10cm

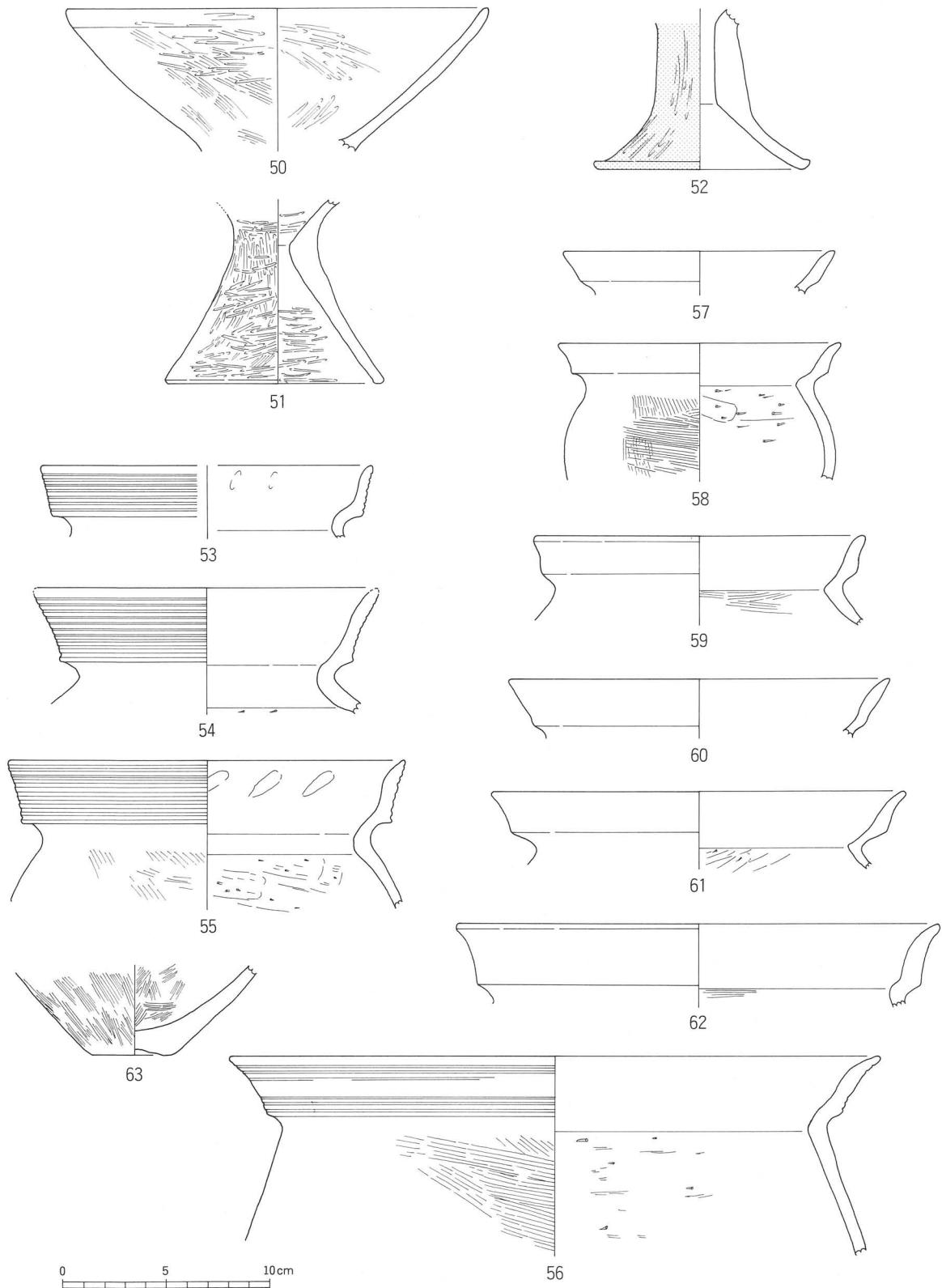
第27図 1号溝出土土器（下層）



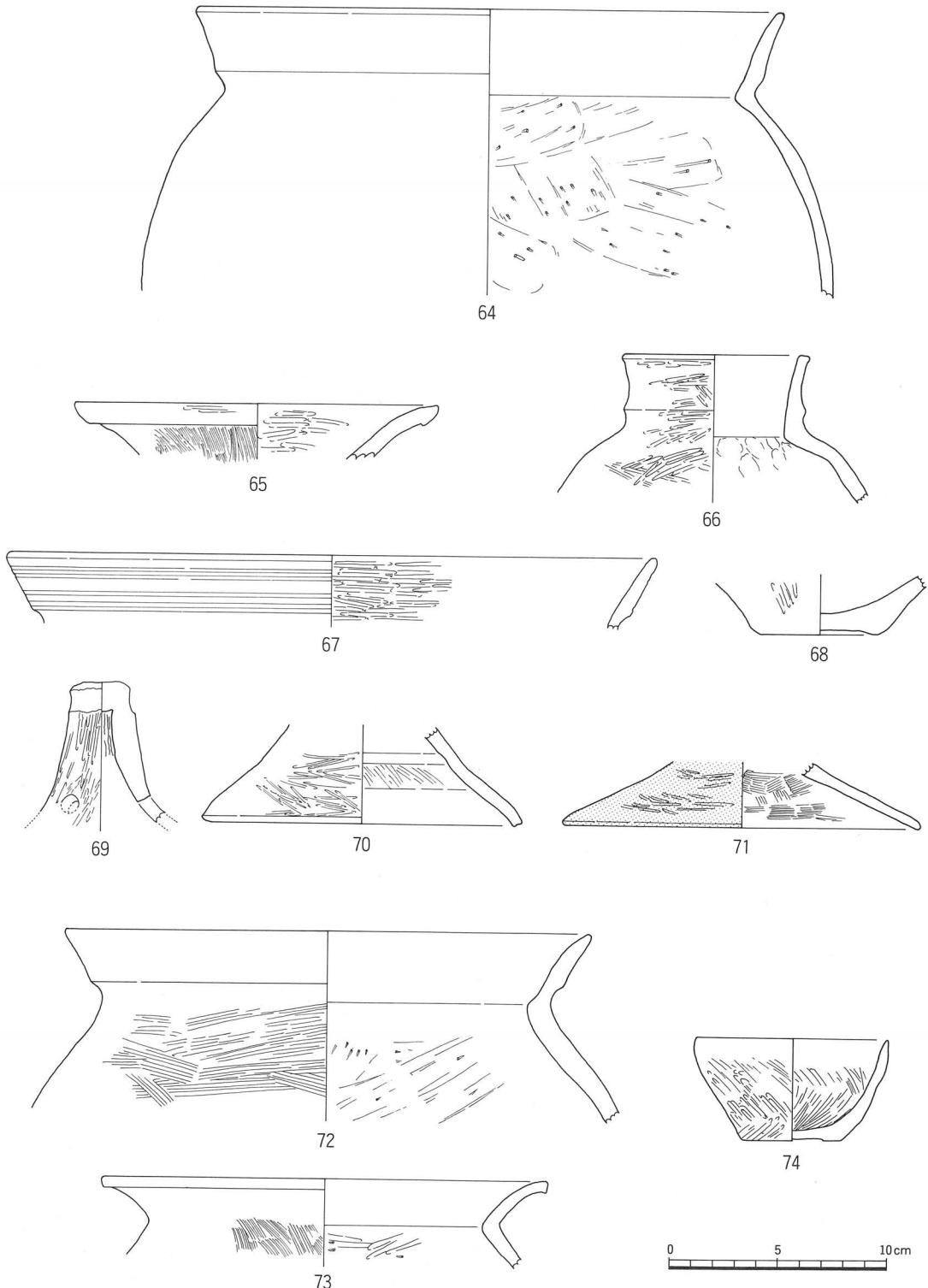
第28図 1号溝出土土器（下層）



第29図 1号溝出土土器（下層）



第30図 1号溝出土土器（下・中層）下層(50~52)、中層(53~63)



第31図 1号溝出土土器（中・上層）中層(64~71)、上層(72~74)



第32図 1号溝出土土器（上層）

の土器が出土しており（第26～32図）、破断面の観察からは流されて堆積したような印象は受けず、投棄された可能性が高い。実測できた土器の総数は75点に及び、大まかに1～11が溝底、12～52が下層、53～71が中層、72～75が上層よりの出土である。4は内外面ともに丁寧なミガキを施した小型土器である。5は短い口縁が強く外反するくの字口縁の甕である。胴部が口径を越えて強く張り出し、端部には垂直に弱い面取りを施す。6は小型の鉢型土器である。全体に丁寧なミガキを施し、底部外面をもミガキで仕上げる。7は土師質土器であり混入品である。8～10は高壺の脚部である。8は器高が低く、大きく開く裾端部を強く外展させ軽く面取りを施す。11は溝の肩部分より口縁を下にして地山に刺さるようにして検出された。擬凹線8条を施す大型の甕である。19～23は無紋有段口縁の甕である。いずれも内外面の屈曲部が形骸化し、頸部内面の面は消失している。26は短い口縁が外傾し、胴部が大きく張り出すくの字口縁の甕である。端部の仕上げは歪んでおり、口縁部内外面ともにハケ調整を施す。27～30はくの字口縁の甕である。29は強く外反する口縁端部の上面に軽く面取りを施し、他は垂直もしくは内屈ぎみに面取りを施す。31は内外面ともに基本的にハケ調整を施すが、外面頸部上及び内面頸部下から肩部にかけてナデ仕上げ、外面及び胴部内面にまで赤彩を施す。33は大型の壺である。頸部から上及び胴部中程を欠くが、肩部に貼付突帯が巡り以下に太細2条のハケ状具による平行線紋に挟まれた波状紋を巡らせる。38は大型の高壺受け部である。当遺跡では希少なものであり、47・49と共に古相を示す。法仏期に特徴的なものであり、残念ながら他に帰属すべき遺構は確認されていない。41は深い椀型の高壺である。下端を断面三角形状に垂下させ、鋭い稜を形作る。内外面ともに摩耗が激しい。

が、実用に耐え得るとは思えないほどの器壁の薄さである。42は非常に精緻な作りの小型高坏である。受け部下端を摘まみだし、隆起帯を巡らせる。43は椀型の受け部を持つ高坏である。受け部外面の下端に3条の細い凹線を巡らす。丁寧な作りのものである。50・51は共にX型を呈する器台であるが、同一個体ではない。65は壺口縁として実測したが、高坏の類の脚裾部かも知れない。端部内面にまで丁寧なミガキを施す。66は丸い胴部に直立する口縁部を持つ壺である。端部外面を若干外へ摘まみ出し、頸部に隆帶を巡らせて一見有段口縁風に見える。

4. その他の遺構・遺物

当遺跡からは上記のほかにも、現場作業を進めるにおいて一輪車で排土の運搬を行うにも困難をきたすほどのおびただしい数の遺構が検出されている。しかし、それに反して個体として認識できる遺物の出土は非常に乏しく、図化に耐え得るものはおろか時期の決定にすら迷いを覚える小片が多くあった。以下、特徴的な遺構及び図化可能な遺物を出土した遺構・遺物の説明を加えるに止め、それ以外は割愛させて頂くことでご容赦願いたい。

(1). 土坑（第33図）

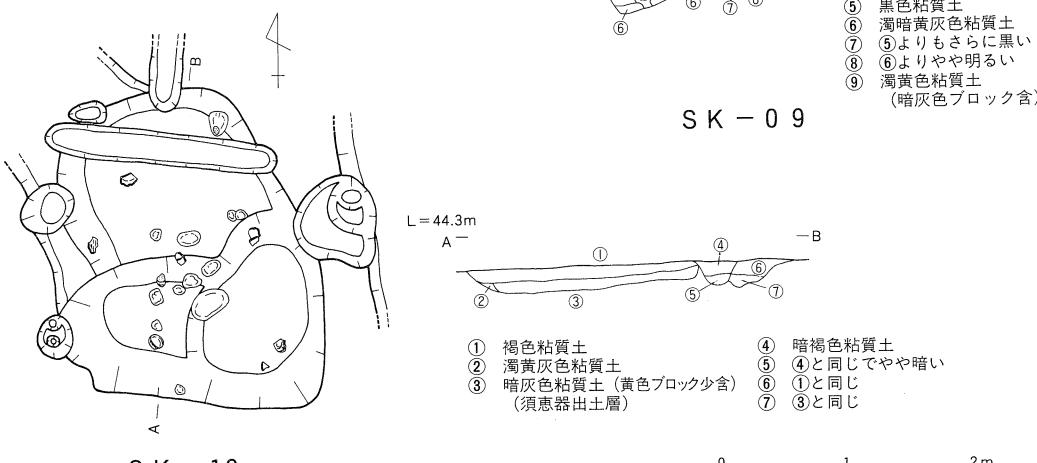
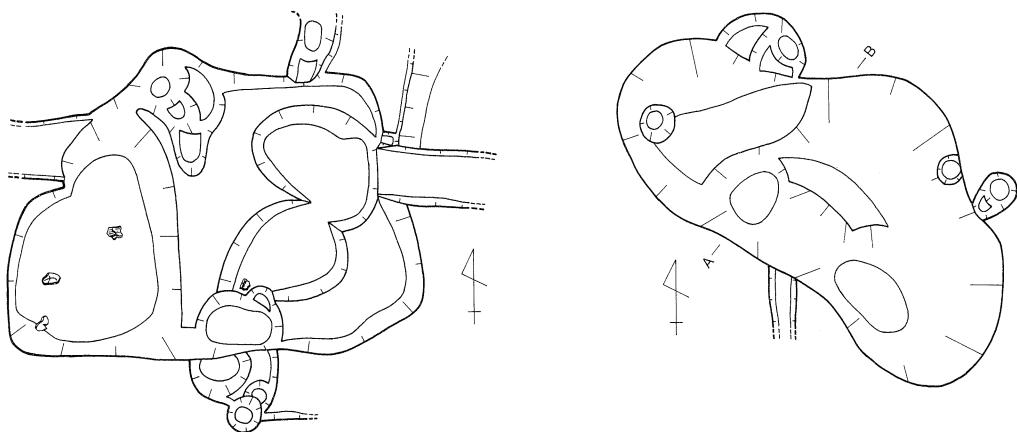
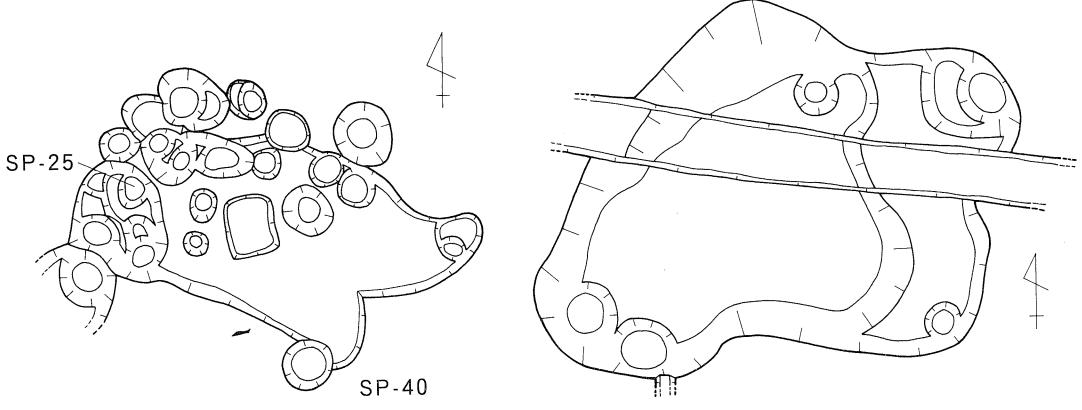
SK-04 調査区中程やや北よりに位置する。プラン、掘り方ともにはっきりとしない不定形を呈し、長軸推定で280cm、短軸141cm、深さ16cmを測る。多くのピットと混在しており、明確な切り合いを確認できるものは少ない。遺物は1点が実測し得た（第62図7）。先細りする口縁が頸部より強く屈曲し外傾する甕である。端部の仕上げは鋭く、胎土に若干赤色粒を含む。

SK-06 調査区中程の北側に位置し、1号溝の上に被さるようにして掘られている。長軸206cm、短軸94cm、深さ14cmを測る略長方形を呈する。検出時の切り合いの様子では確実に1号溝に後続するものと思われる。この土坑も遺物は1点のみの実測である（第62図8）。無紋有段口縁の甕であり、段部の屈曲は弛緩して形骸化しており、緩やかに頸部へ伸びる。

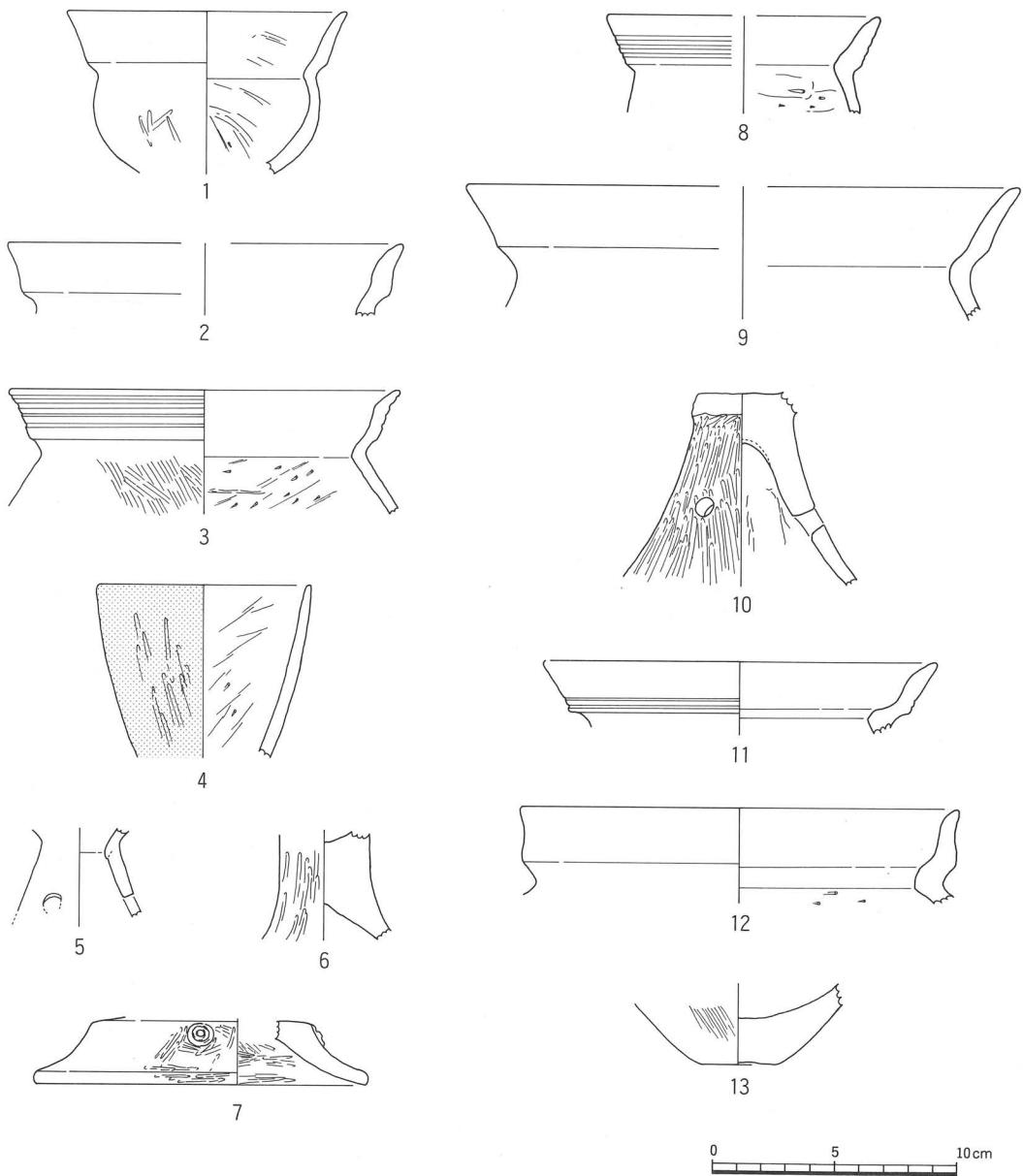
SK-07 調査区中央西寄りに位置する。長軸361cm、短軸256cm、深さ34cmを測り不定形に近い略台形を呈する。中央を近代の旧用水跡が横切り、内部に掘り込まれたピットはほとんどが後世のものであるが、プランとして確認できたものは少ない。遺物も僅かで、当該期に属すると判断し得るのみである。

SK-08 SK-07のすぐ西に隣接するように位置する。規模はやや小さく長軸358cm、短軸244cm、深さ35cmを測り、やはり不定形に近い略台形を呈する。内部に掘り込まれたピットや瓢箪のような形態の2連土坑については上面より確認はされておらず、西側の一段低い部分については本体と同一のものと思われる。遺物はこの一段低い部分から出土しているが、体部片が多くて図化に耐えるものではなく、この時期に属すると判断し得るのみである。

SK-09 SK-07の北側約6m、SK-04のすぐ西隣に位置する。半馬蹄形を呈するプランは典型的な風倒木痕であり、長軸361cm、短軸182cmを測る。全てを掘り切ってはいないため全体での深さは不明であるが、中程にある後世のピットは深さ62cmで淡黄褐色土に達する。



第33図 各土坑実測図（古墳時代以前）



第34図 各ピット出土土器（古墳時代以前）
 SP-03(1)、SP-04(2~4)、SP-05(5)、SP-10(6)、SP-14(7)、SP-19(8)
 SP-20(9)、SP-21(10)、SP-30(11)、SP-34(12)、SP-36(13)

SK-10 調査区中程よりやや北寄りの西端に位置する。長軸208cm、短軸126cm、深さ26cmを測り不定形を呈する。前後関係については、わずかに土層断面の観察より南側に位置するテラスを持つ土坑の方が後続するかに見える。遺物は土器を中心に何点かの出土があるが、いずれも小片や体部片であり図化に耐えるものはなかったが、当該期に属するものである。

(2). ピット (出土土器 第34図)

S P - 0 3 調査区南側に位置し、直径89cm、深さ42cmをはかる円形を呈する。ピット自体は3号掘立を構成するため古代に属するが、後述のように遺物は弥生時代末のものが1点出土している。近隣遺構よりの混入品であろう。1は有段口縁の小型土器である。摩耗が激しいため判然としないが、最終調整はナデか。体部下半に一部ミガキ痕が残る。

S P - 0 4 S P - 0 3のすぐ北側に位置し、同じく3号掘立を構成する。長径72cm、短径62cm、深さ37cmを測る略方形を呈する。遺物は実測し得たものとしては弥生時代末のもののみであり、やはり混入品と思われる。2・3はともに有段口縁の甕である。2は無紋であり小片のため口径は定かでない。段部の屈曲は鈍く弛緩している。3は擬凹線を施す口縁部が端部で強く外反し、やはり段部の屈曲は弛緩している。4は細頸壺の口縁部であり、外面に赤彩を施す。

S P - 0 5 S P - 0 4の西側、4号掘立を構成するピットに壊されている。直径26cm、深さ16cmを測る円形を呈する。5は器台の脚部であるが、内外面ともに摩耗が激しい。胎土に海綿骨針を少量含む。

S P - 1 0 調査区東側に位置し、長径89cm、短径45cm、深さ15cmを測る不定形に近い略楕円形を呈する。6は高坏くびれ部である。裾部を欠くが緩やかに外へ伸びて行くものと思われる。全体にざんぐりとした作りである。

S P - 1 4 調査区西側に位置し、後世の土坑に先行して掘られている。長径26cm、短径19cm、深さ18cmを測る小さな楕円形を呈する。7は高脚器種の脚裾部として実測したが、反転して二重口縁の壺口縁部である可能性が高い。内外面ともに精緻な仕上げであり、外面屈曲部直下に同心円状の円形浮文を推定で4ヶ所添付する。

S P - 1 9 調査区中程に位置する非常に小さなピット。長径25cm、短径19cm、深さ24cmを測る楕円形を呈する。8は小型有段口縁の甕である。口縁部下半に3条の擬凹線が巡る。屈曲部の段は形骸化し、内面頸部に稜を持つ。

S P - 2 0 調査区中程やや東寄りに位置する。長径58cm、短径44cm、深さは最も深い所で26cmを測る楕円形を呈し、内部はさらに小さなピットに3分割される。時期的な差異は不明。9はやや大型の有段口縁甕であるが、小片のため口径には若干不安が残る。外反度合いが強く、屈曲部は弛緩している。

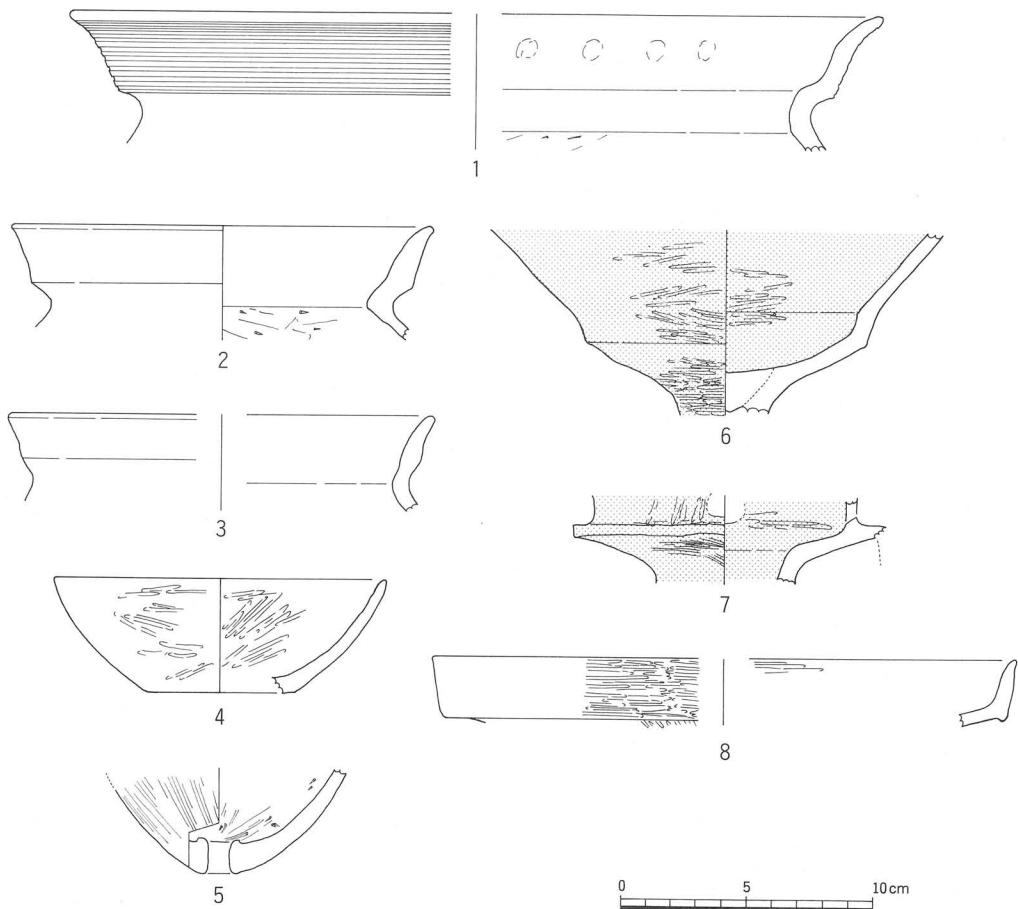
S P - 2 1 調査区中程東端に位置する。長径38cm、短径推定で32cm、深さ11cmを測る楕円形を呈する。接合するピットは別個のものである。10は裾部が大きく開く高坏の脚部である。丁寧な作りで焼成も良い。

S P - 3 0 調査区北西寄りに位置し、15号掘立を構成するピットである。長径71cm、短径61cm、深さ53cmを測る長方形を呈する。出土土器は恐らく下の1号溝まで掘り抜いた上での出土であろう。11は大きく外反する有段口縁の甕口縁部である。下端に2条の擬凹線が巡る。

S P - 3 4 S P - 3 0の北側に位置し、同じく15号掘立を構成するピットである。長径45cm、短径35cm、深さ56cmを測る略楕円形を呈する。遺物は複合する他のピットからの混入品と思われ

る。12は直立ぎみに立ち上がる有段口縁の甕であり、器壁も厚くすんぐりとした作りである。段部の稜も鋭さを欠く。

S P - 3 6 1号溝の中程北岸に接して位置する。長径38cm、短径33cm、深さ36cmを測る略楕円形を呈する。13は通有の甕底部である。底径は3.1cmを測る。



第35図 包含層出土土器（古墳時代以前）

(3). 包含層（第35図）

古墳時代以前のものとして図化し得たものは僅かに8点である。1は大型の有段口縁擬凹線の甕である。口縁部は大きく外反し、端部を先細りで仕上げる。頸部内面には広い面を持ち、口縁部内面に指頭圧痕が認められる。2・3はともに中型の有段口縁無紋の甕である。2は内面頸部に鋭い稜を持ち、3は段部屈曲が内外面ともに著しく弛緩している。4は底部を欠くが非常に精緻な作りの椀型土器である。5は底部に焼成前穿孔を施す。孔径は10mmを測る。6は丁寧な作りで内外面に赤彩を施す高坏である。外面屈曲部に鋭い稜を持つ。7は内外面に赤彩を施した装飾

器台である。小片のため判然としないが、受け部の大きさに比べて筒部の径が太く、赤彩は筒部内面にまで伸びるようである。透かし穴の形状は涙滴状をなすものと思われる。8は高坏若しくは器台の口縁端部である。緩やかに伸びる体部からほぼ直立ぎみに立ち上がる口縁部の端部を先細りに仕上げ、外面下端を若干垂下ぎみに見せる。

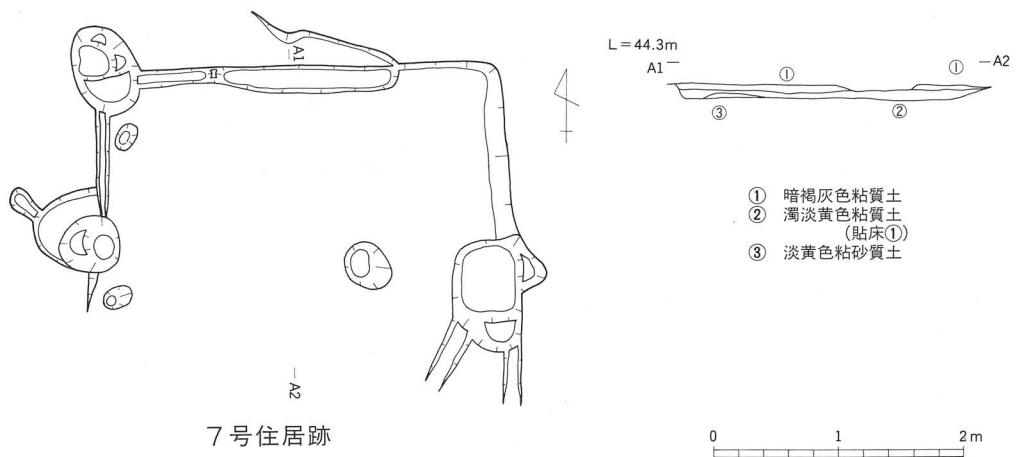
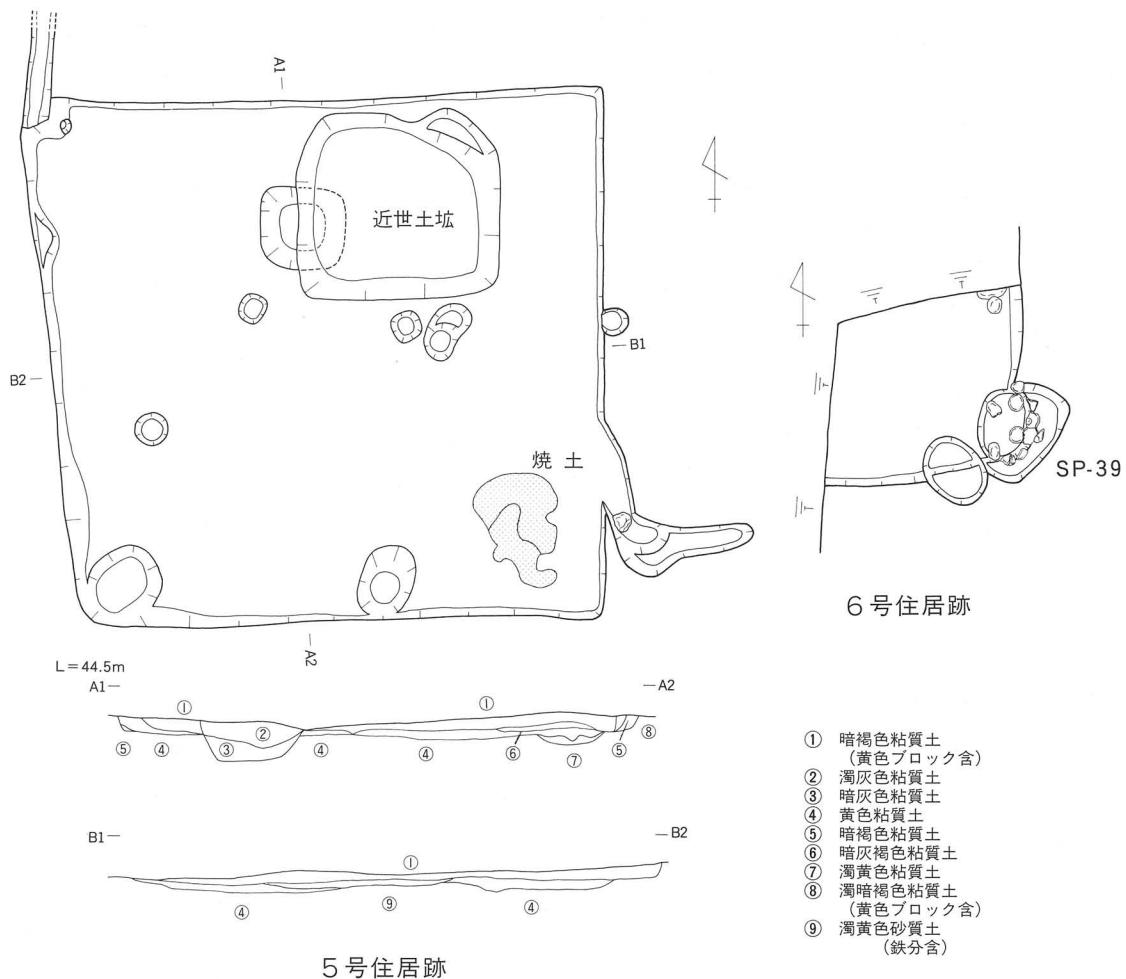
第3節 古代の遺構と遺物

1. 竪穴住居

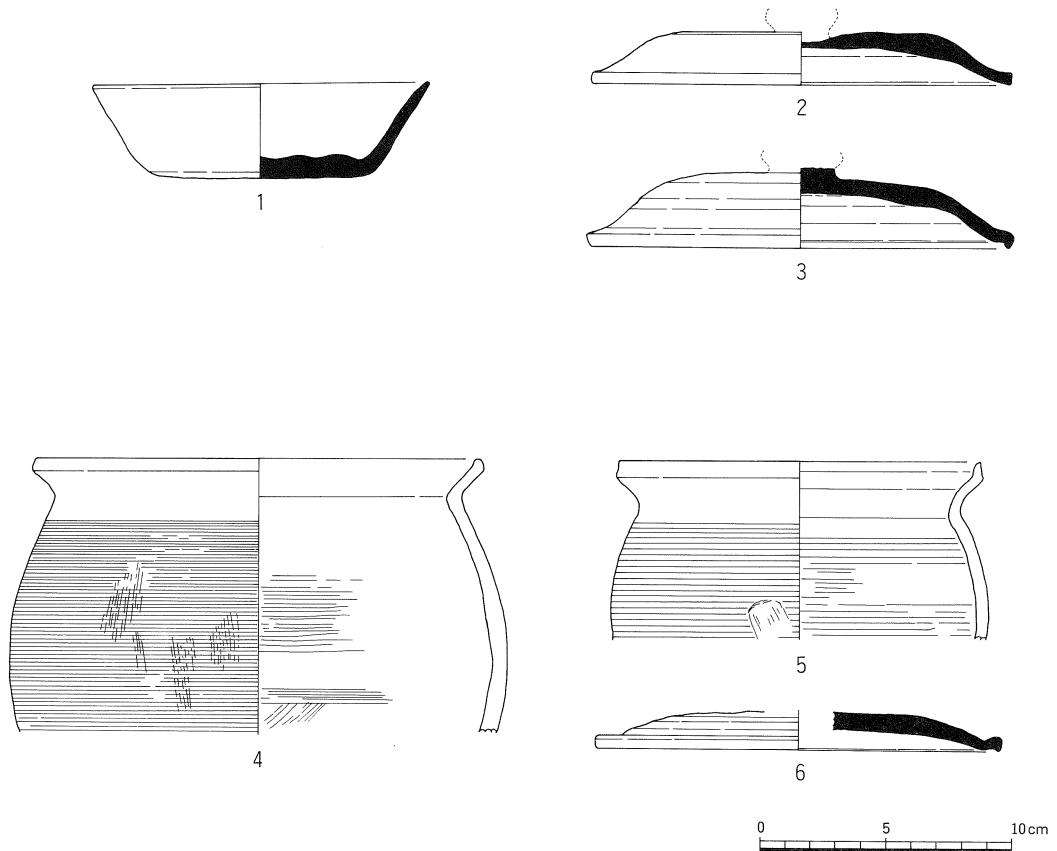
5号竪穴住居（第36図） B区南端に位置し、平面プランは方形を呈する。長軸462cm、短軸419cmであり、床面積18.3m²、軸方位N2°W、検出面からの深さは約17cmを測る。床面はほぼ平らであるが、明確な主柱穴は確認されていない。東南隅にカマドの痕跡と思われる焼土塊が広がり、東側に排煙口と思われる溝が伸びる。北半に見られる方形の大きな土坑は近世になって掘り込まれたものであり、直接の関係はない。また、3号掘立を構成するピットと重複するが、土層断面の観察では掘立に先行するものである。遺物は全く出土しなかった。

6号竪穴住居（第36図） C区南西端に位置し、全体の1/4程度の検出である。これより西側は近代の旧用水により破壊されている。深さは31cmを測り、非常に残りが良いため残念である。コーナーの状況から方形を呈するものと思われるが詳細は不明である。また、重複する2つのピットは明確に建物を構成するものとは言えないが、付近で見られる柱穴と同意匠で掘られたものであり、プランからの確認ではいずれも竪穴に後続する。遺物は3点図化されている（第37図1～3）。1は無台の坏完形品である。直線的に外展する体部が口縁部で僅かに外反し、端部を先細りに仕上げる。焼成が甘く淡黄灰色を呈する軟質の器肌である。2・3はいずれもつまみ部を欠くが、天井部に回転ケズリの後ナデで仕上げる坏蓋である。2は内面に黒褐色の付着物が見られ、端部はなだらかに伸びて屈折せず、外面に垂直な面を持つ。3は端部が嘴状に屈折し、重ね焼きの痕跡を残す。

7号竪穴住居（第36図） 1号竪穴住居のすぐ南に隣接する。検出面より床面までが非常に浅く、南側では削られて壁が消失している。東西328cm、深さは最も残りの良い北側で11cmを測り軸方位はN3°Wである。南北は不明であるがほぼ正方形を呈すると思われ、床面積は推定で10.2m²ほどであろう。一部に壁溝の痕跡が伺われるが、幅15cm、深さ4cmを測る非常に弛緩したものであり、落ち込みとして扱った方が適切かも知れない。壁溝内及び床面には主柱穴は検出されていない。西側で壁と5号掘立の柱穴が重複するが、やはり先行するものである。遺物は3点が図化されている（第37図4～6）。4・5はともに土師器の甕であり、口縁部、体部とともに丁寧な調整を施す。端部の仕上げは共に上へつまみ上げるが、4はややぼったりとした丸縁であり、5はやや長めにつまみ上げて先細りに仕上げる。3は須恵器の坏蓋である。天井部中央及びつまみを欠き、



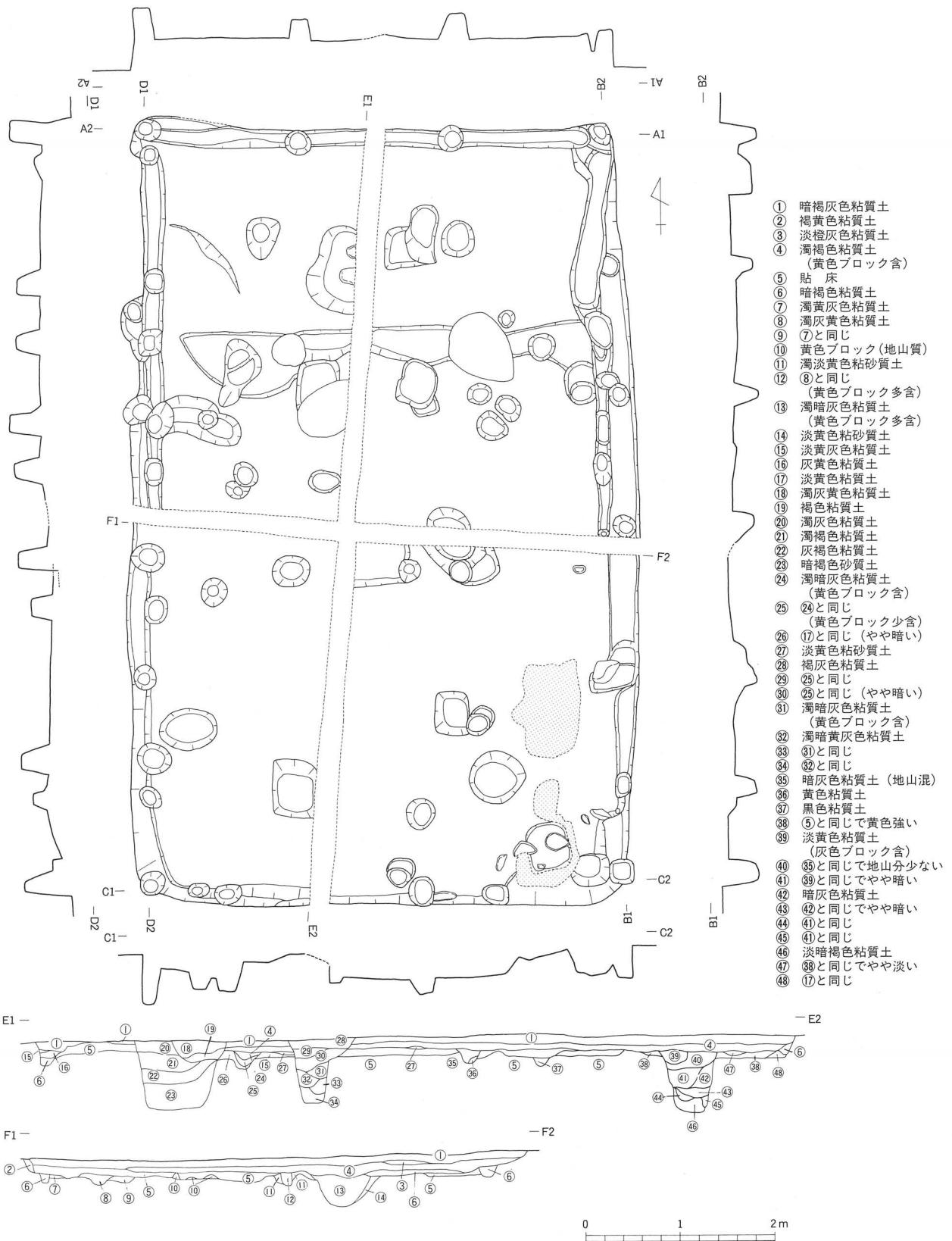
第36図 5・6・7号住居跡実測図



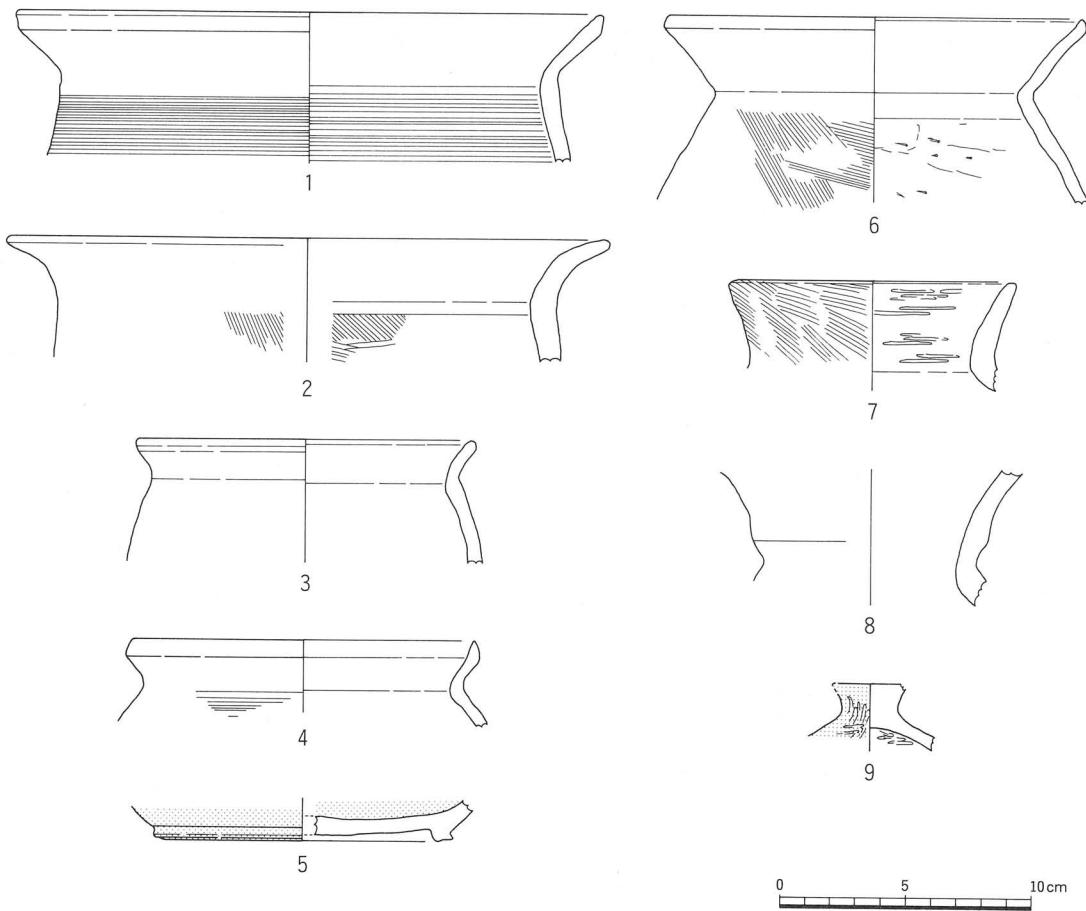
第37図 6・7号住居跡出土土器 6号住(1~3)、7号住(4~6)

器高の低い偏平な形態を呈し、端部は強く屈曲し嘴状に屈折させる。

8号竪穴住居（第38図） 調査区中程やや南寄りの西側に位置し、平面プランは長方形を呈する。長軸843cm、短軸532cm、床面積42.0m²、深さ24cmを測り、主軸はほぼ磁北を向く。東南隅にカマドの痕跡が認められ、前面50cmの位置に焼土が広がっている。壁に沿ってほぼ全面に幅最大で22cm、深さ9cmを測る壁溝が巡り、内部に主柱穴が存在する。壁柱穴は5×3間の規模で巡り、最大で直径36cm、深さ40cm、心間距離160cmを測る。当時は担当者の意識の低さもあって、壁溝内に壁の痕跡は確認されなかった。床面の約1/3で10号掘立と重複しているが、丁度カマドの部分で切り合う柱穴は確実にカマドの焼土を切って掘り込まれており、掘立に間違いなく先行することがわかる。遺物は9点が図化されている（第39図）。1・2はやや大型の土師器甕である。1は肩部以下を欠くが非常に丁寧な作りであり、直線的に外展する口縁部は端部にすっきりとした面取りを施す。2は口縁部がほぼ水平近くにまで強く外反し、端部を丸く収める。内外面ともに頸部直下にまで縦ハケが残り、やや古相を示す。3・4は小型の土師器甕である。3は短い口縁部が外展して端部は丸縁で仕上げる。口縁端部内面に炭化物が付着する。4はやや肩が張るタイプで



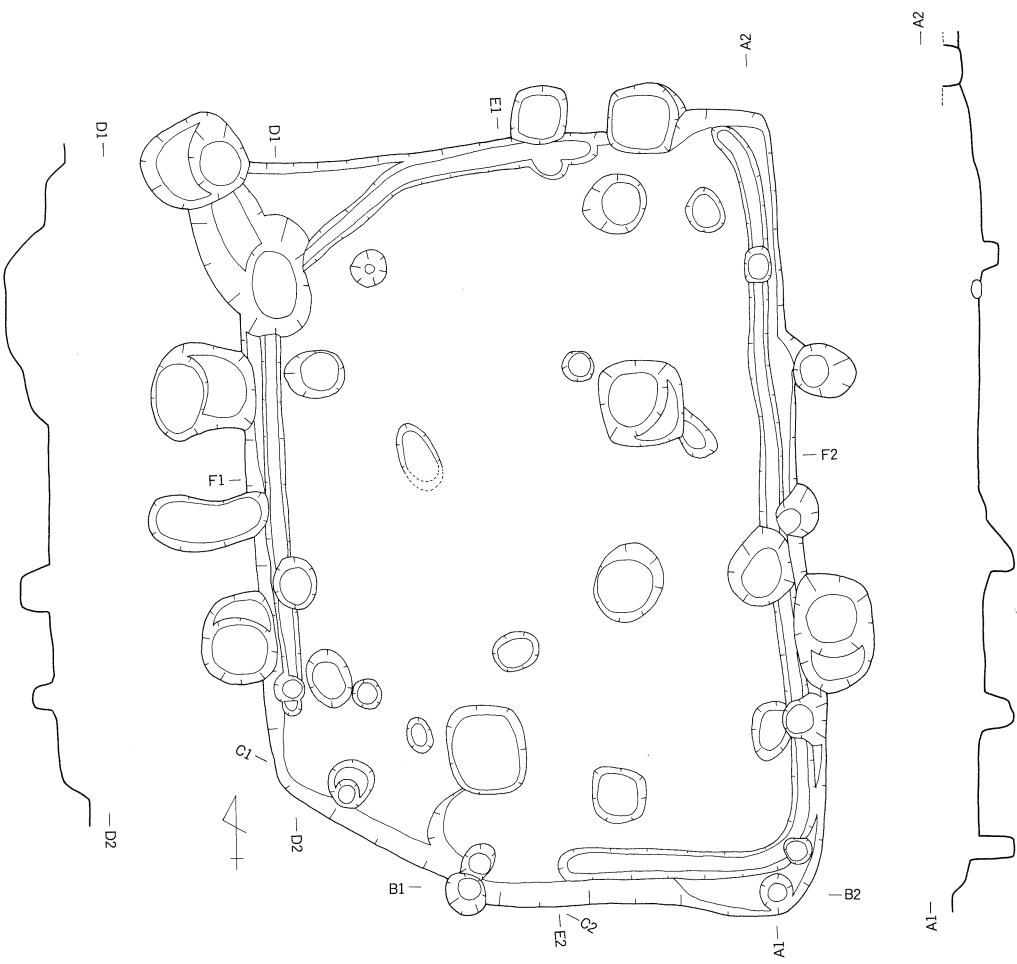
第38図 8号住居跡実測図



第39図 8号住居跡出土土器

あり、短い口縁部をつまみ上げて面取りを施し先細りに仕上げる。5は赤彩土師器の高台付き底部である。胎土は精選され、高台も非常にしっかりとした作りである。6～9は弥生時代末～古墳時代初頭の遺物である。床下に残る土坑や隣接する遺構からの混入品であろう。

9号竪穴住居（第40図） 調査区南半ほぼ中央に位置し、南西角をカットしたような長方形を呈する。長軸649cm、短軸442cm、床面積 23.7m^2 、深さ26cmを測り、軸方位はN 2°W である。南西角を除きほぼ全面に幅19cm、深さ5cmの壁溝が巡り、桁に相当する東西壁に沿って主柱穴が確認される。一部不明な部分もあるが、おそらく4間規模となろう。柱穴は最大で径36cm、深さ37cm、心間距離168cmを測り、梁相当部分については明確な柱穴は確認されていない。また、カットされたような南西角を跨ぐようにして柱穴が2基検出されている。この部分については壁溝も途切れていることから、入り口のような機能を想定できるのではあるまいか。掘立柱建物との関係は、13・14号掘立がそれぞれ干渉するものの柱穴はすべて9号竪穴住居の覆土を切っており、当住居

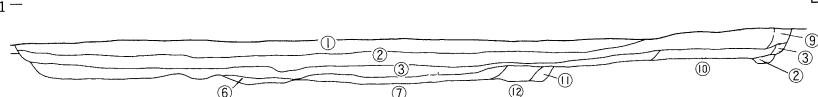


$L = 44.4m$

F1 —

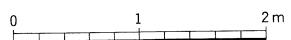
— F2

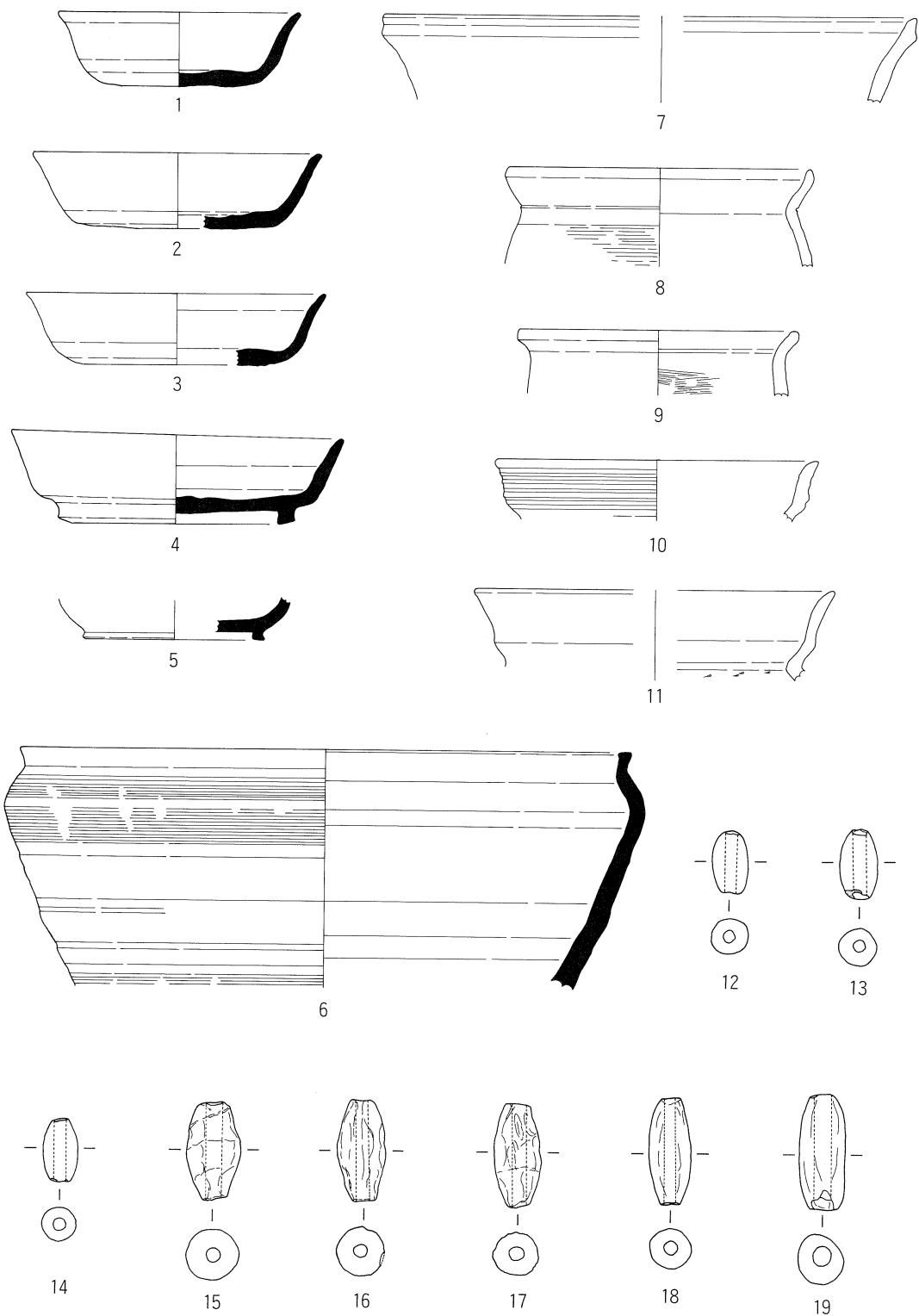
— E2



- | |
|---|
| ① 暗褐色粘質土
② 暗灰褐色粘質土
③ 淡黄色ブロック
④ 淡灰黄色粘砂質土
⑤ 貼床
⑥ 濁暗灰黄色粘砂質土
⑦ 濁灰色粘質土
⑧ ②に同じ (黄色ブロック多含)
⑨ 淡黄灰色粘質土
⑩ // (やや暗く濁る)
⑪ ⑩に同じ
⑫ 淡暗灰色粘質土 |
|---|

第40図 9号住居跡実測図



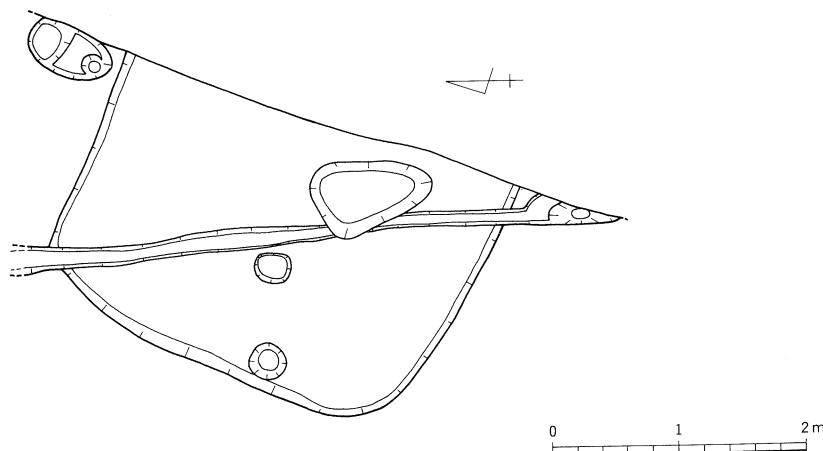


第41図 9号住居跡出土土器・土錘

0 5 10m

はそれらに先行するものである。遺物は19点が図化されている（第41図）。1～3は須恵器の無台壺、4・5は有台壺である。1はやや口径が小さいが、共に底部より立ち上がる体部が緩やかに外反して口縁部へ続き、端部を先細りで仕上げる。2は端部の作りがややシャープさに欠ける。2・3については床面よりの出土である。4は外展する稜角的なしっかりとした高台を持つ。5は底部中央及び体部上半を欠き、底径からやや小振りのものである。6は口径28.0cmを測る鉢である。肩部より短く直立ぎみに立ち上がる口縁部の端部を広く面取りして収める。7は小片であり口径にやや不安を残すが、口縁部の伸び及び頸部に続くカーブより長胴甕と思われる。直線的な口縁部の端部をつまみ上げ、面取りして先細りに仕上げる。8・9は小型の甕である。8は口縁端部を垂直につまみ上げ、面取りして先細りに仕上げる。9は短く外反する口縁部をすんぐりとした丸縁に仕上げる。10・11については弥生期の有段口縁甕であり、混入品である。12～19はいずれも土錐である。当遺跡からは9号住居以外では包含層から若干の出土を見るが（第64図）、すべて至近距離よりの出土であり、当住居に帰属するものと考えられる。12～14はやや小振りのものであり、外面は丁寧なナデで仕上げる。15～19は長さ5cm前後を測り、胎土・焼成ともに良好なものであるが、いずれも外面に布目状の痕跡または指頭圧痕を残している。

10号竪穴住居（第42図） A区中程やや南寄りに位置する。西側半分の検出であり、検出部分で南北313cm、床面までの深さ13cm、軸方位N22°Eを測る。床面積は推定で9.2m²程度であろう。平面プランと規模から該期の竪穴住居としたが、他の一群と軸方位が著しく異なっているため弥生～古墳時代の竪穴住居の可能性が強いかもしれない。遺物は全く出土しておらず、主柱穴や周溝といった内部構造も見られない。覆土の状況からも当初は住居跡としての意識を持たないまま単なる落ち込みとして完掘してしまったものである。A区は遺構検出面のレベルも若干低く、以前の鞍部が堆積作用によって埋まった後に遺構が掘り込まれており、地山は暗褐色を呈しており土質も湿度が高い。



第42図 10号住居跡実測図

2. 掘立柱建物

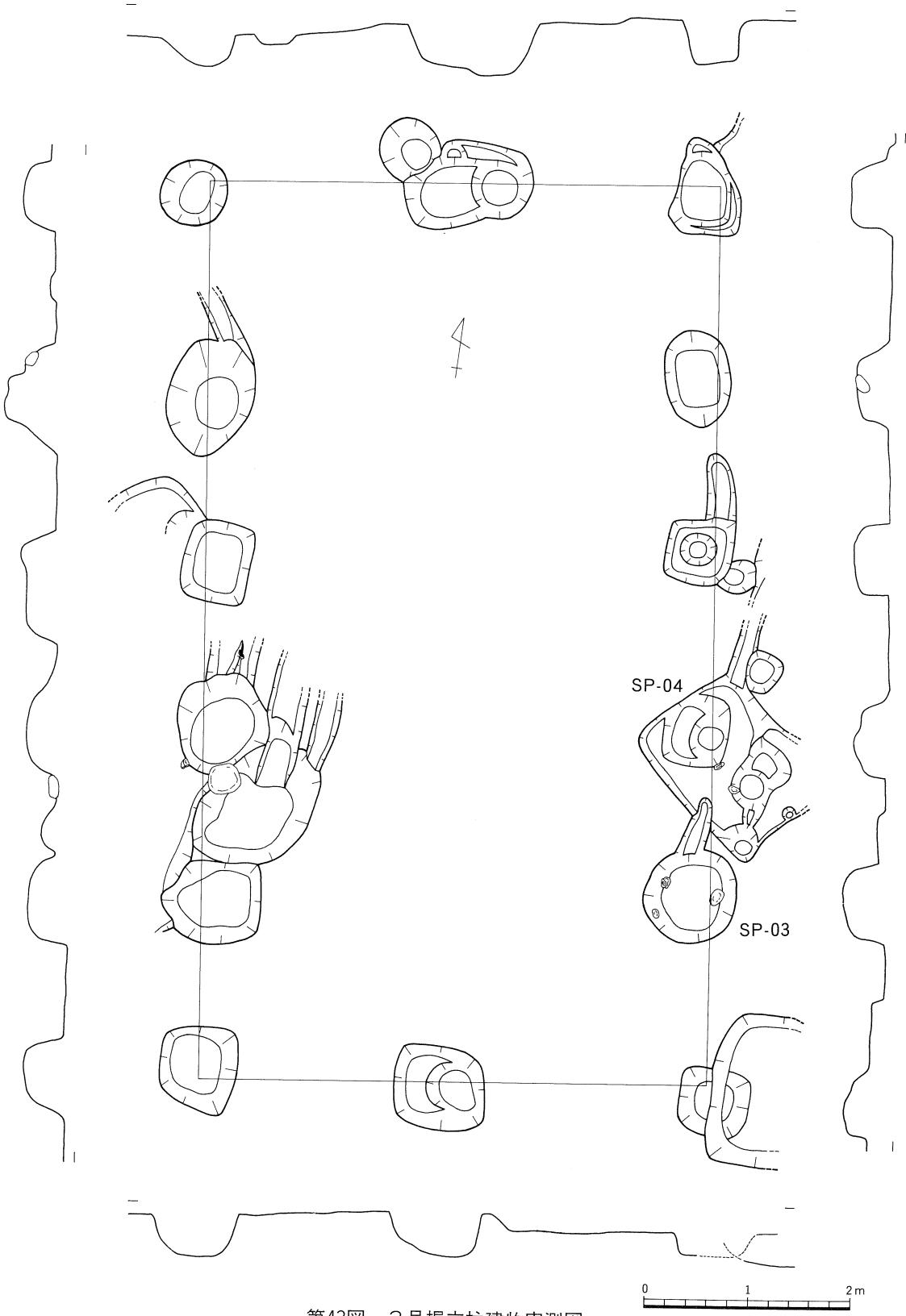
3号掘立（第43図） 調査区南側に位置する 5×2 間の建物である。桁行き884cm、柱間172cm、梁行き498cm、柱間258cmを測り軸方位N8°W、床面積44.0m²である。柱穴の形状は略方形もしくは橢円形を呈し、径66～88cm、深さ34～52cmを測る。南東角の柱穴が5号竪穴住居と重複しているが、プランの確認から当掘立柱建物の方が新しい。時期を決定できる遺物は出土しておらず、図化可能なものとして僅かにSP-03より1点、SP-04より3点（第34図）弥生土器が底面よりかなり浮いた状態で見られるに過ぎないが、いずれもピット自体の時期を決定するものではなく混入品と思われる。

4号掘立（第44図） 大半を3号掘立、5号掘立に重複し、僅かに北西へずれた地点に位置する 3×2 間のやや小さい建物である。桁行き572cm、柱間173cm、梁行き458cm、柱間247cmを測り、軸方位N6°W、床面積26.2m²である。柱穴の形状は東西で明確に異なり、東側がやや大きい略方形、1号竪穴住居と重複する西側が小さい略円形を呈する。作業に従事した集落構成員の個性の差であろうか。径は41～76cm、深さ32～46cmを測る。各ピットより遺物の出土は皆無であり、3号掘立との直接の切り合いも見られないと、建物単体では時期及び前後関係を決定することはできない。

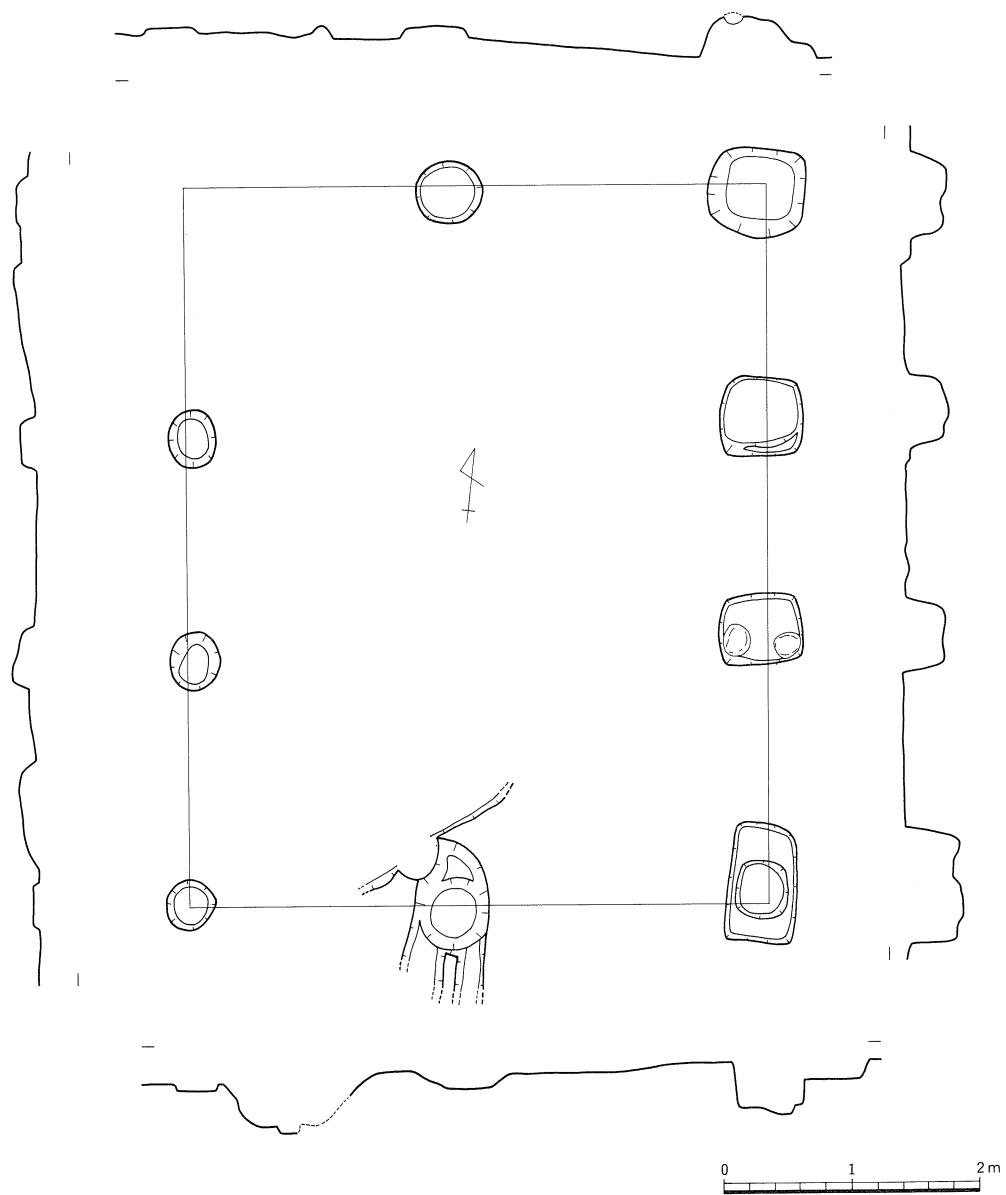
5号掘立（第45図） 4号掘立のやや北に位置する 4×2 間の建物である。桁行き1,016cm、柱間245cm、梁行き472cm、柱間232cmを測り、軸方位N2°W、床面積48.0m²である。柱間が広く、桁行きでは5間の3号掘立を凌ぐ。柱穴の形状は一部1号竪穴住居と重複する部分については先行する土坑等で判別が困難であったが、大方は略方形を主とするものと思われ、径41～102cm、深さ41～63cmを測る。各ピットより遺物の出土はやはり見られないが、7号竪穴住居との切り合いで竪穴に後続することが確認されている。

6号掘立（第46図） 調査区南西隅に位置し、北西部が旧用水で破壊された調査区外へ伸びている。南北ともに梁行きの中柱が確認されていないが、 4×2 間の建物規模になると思われる。桁行き804cm、柱間213cm、梁行き503cm、柱間推定で251cm程度と思われる。床面積は推定で40.4m²程度と思われ、軸方位はN10°Wと他の建物群と比べて一際大きく西へ振れる。柱穴の形状は略方形を主とし、径54～67cm、深さ37～47cmを測る。遺物はSP-06より土師器の甕が1点出土している（第59図1）。

7号掘立（第47図） 調査区南寄りの東側に位置する 5×2 間の建物である。桁行き796cm、柱間158cm、梁行き506cm、柱間252cmであり桁行きの柱間距離が特に短い。軸方位はほぼ磁北を向き、床面積は40.3m²である。柱穴の形状は橢円形を呈し、径54～96cm、深さ21～52cmを測る。各ピットより遺物の出土は確認されていない。

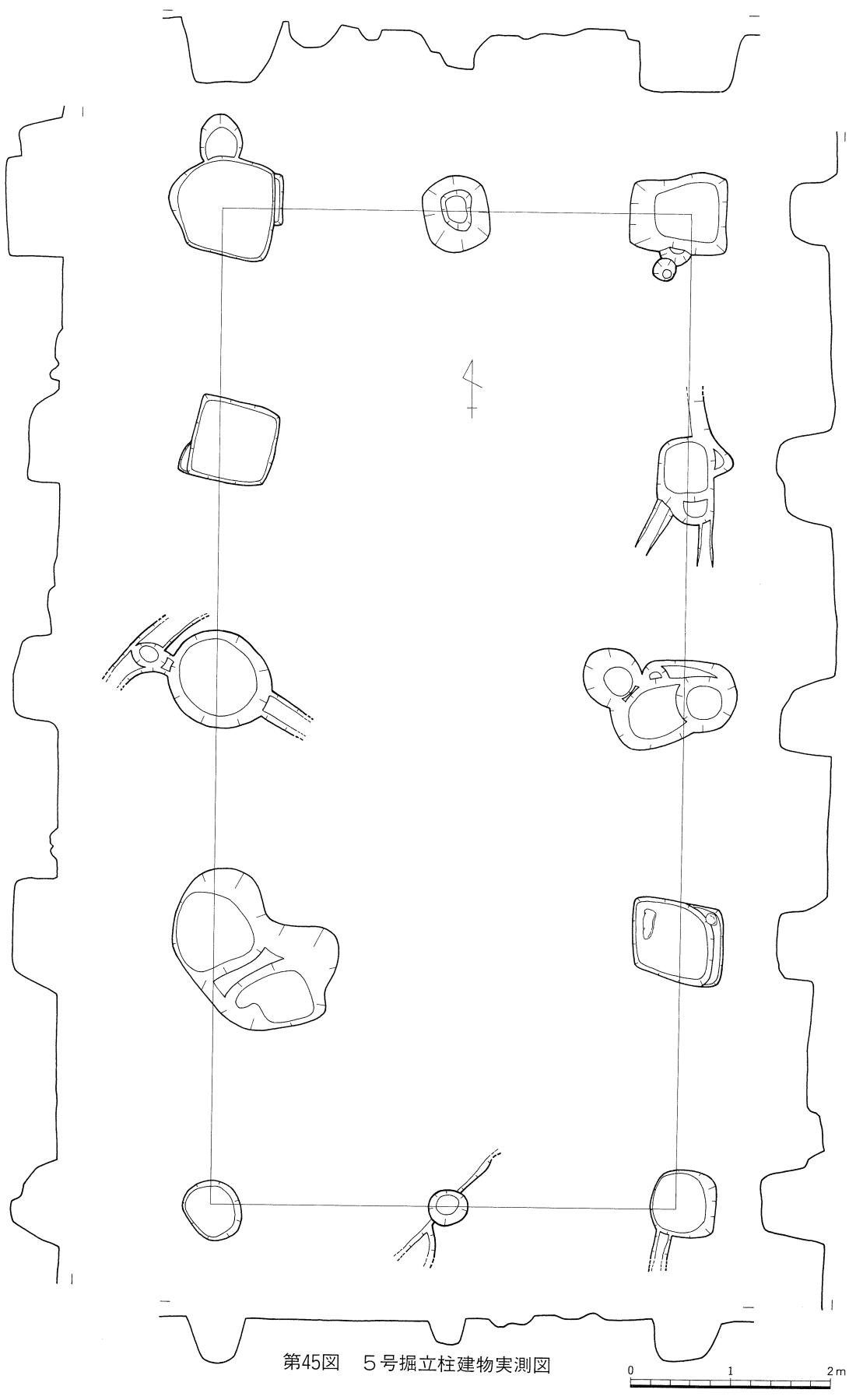


第43図 3号掘立柱建物実測図



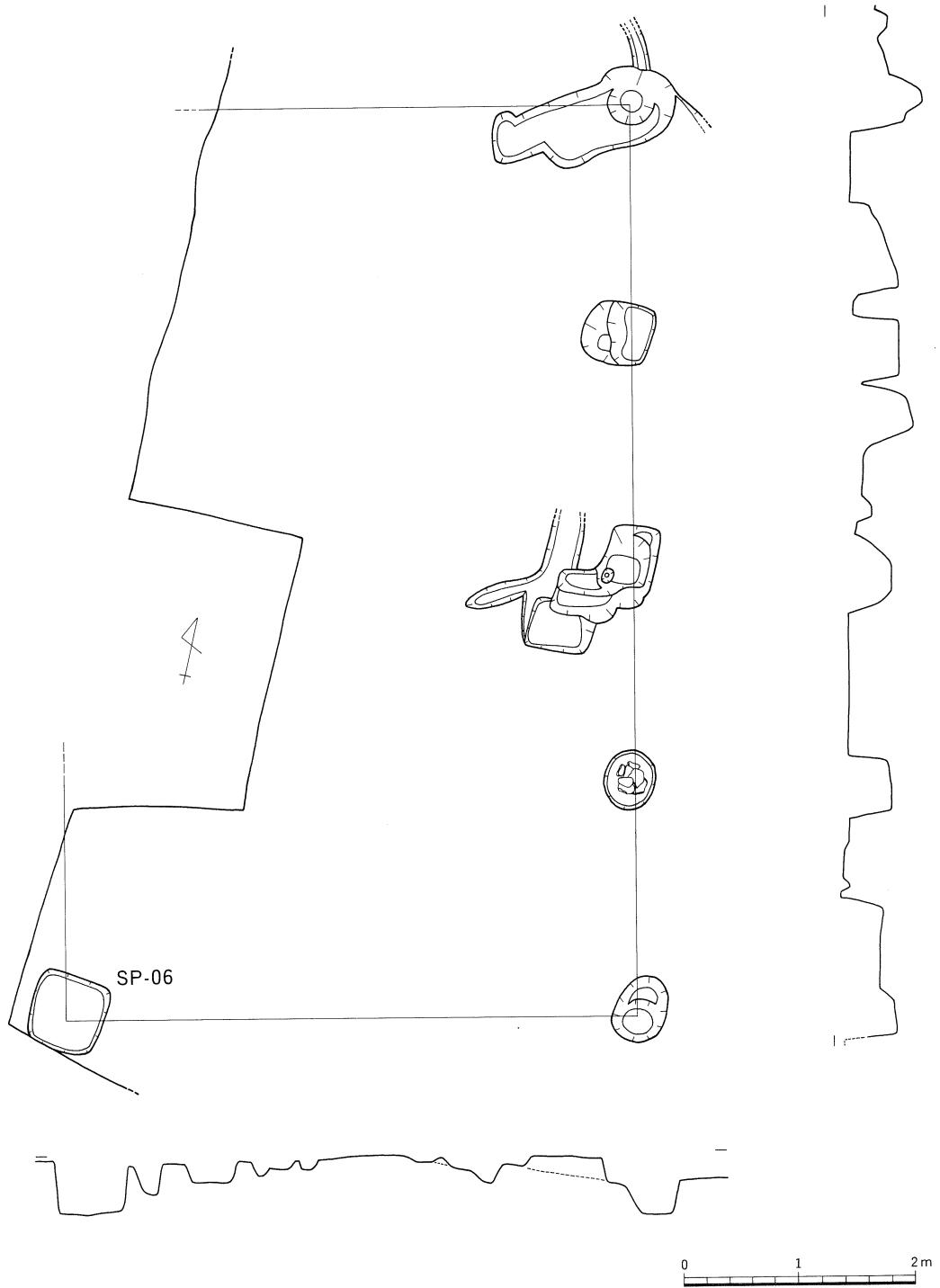
第44図 4号掘立柱建物実測図

8号掘立(第48図) 7号掘立よりやや北東にずれて存在する 5×2 間の大型の建物である。桁行きは1,096cmと当遺跡で最も大きく、柱間226cm、梁行き528cm、柱間302cmと226cmを測り北側では東に、南側では西にややオフセットしている。軸方位はN3°E、床面積57.9m²である。柱穴の形状は略方形であり、径85~112cm、深さ32~57cmとやはり大型である。他の建物との干渉は見られないが、東桁柱列のSP-46より赤彩土師器の椀が1点出土している(第60図9)。

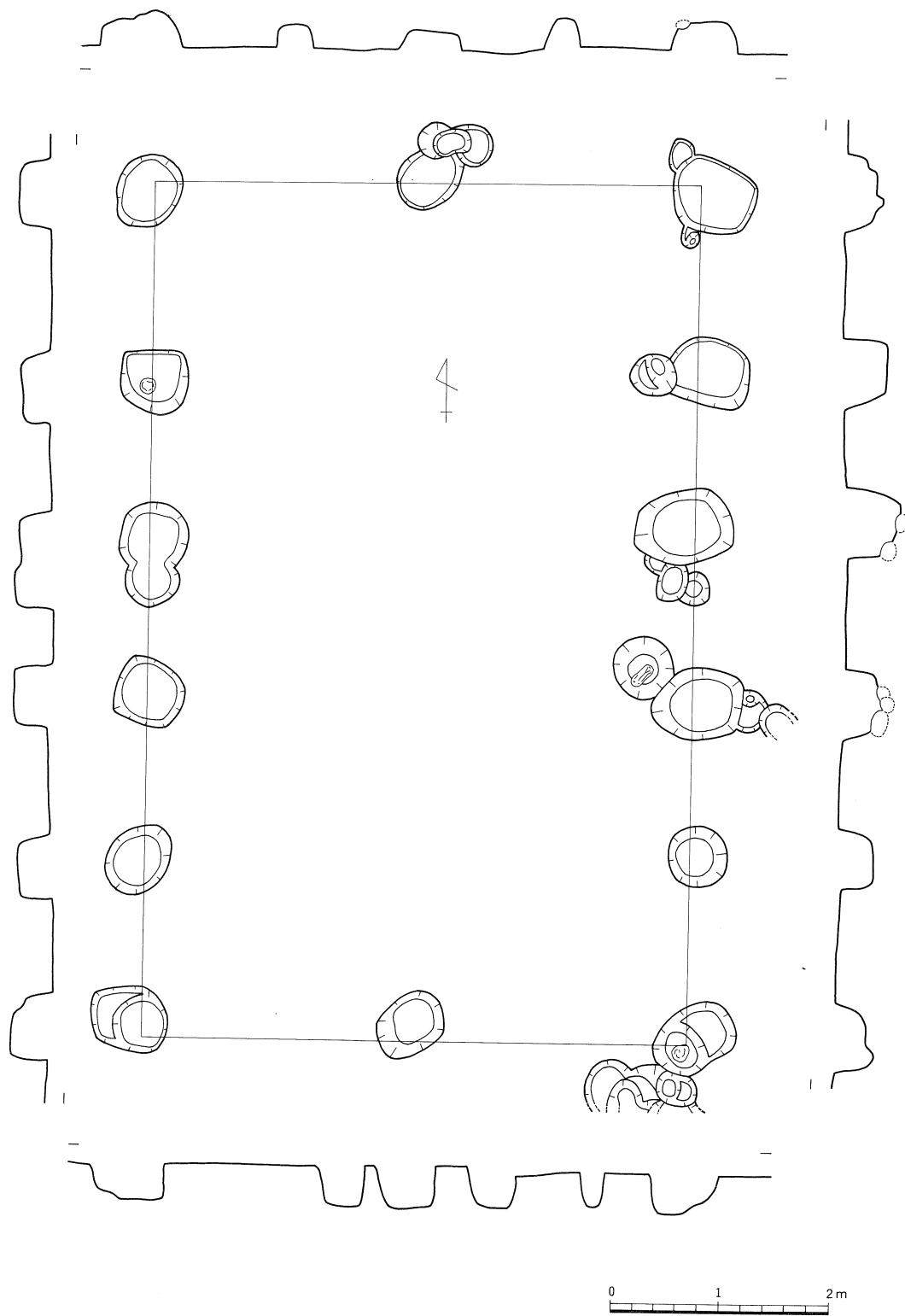


第45図 5号掘立柱建物実測図

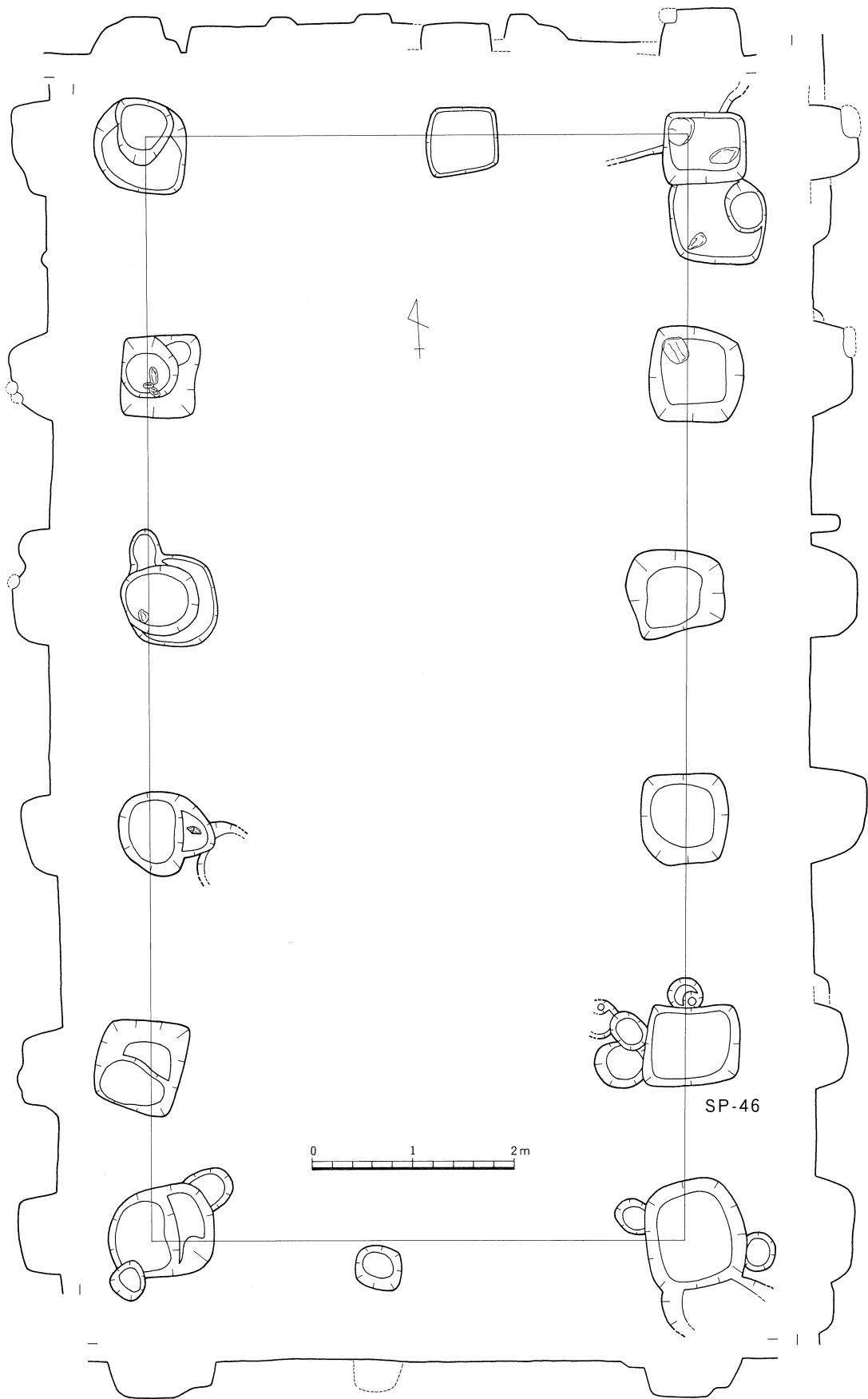
0 1 2m

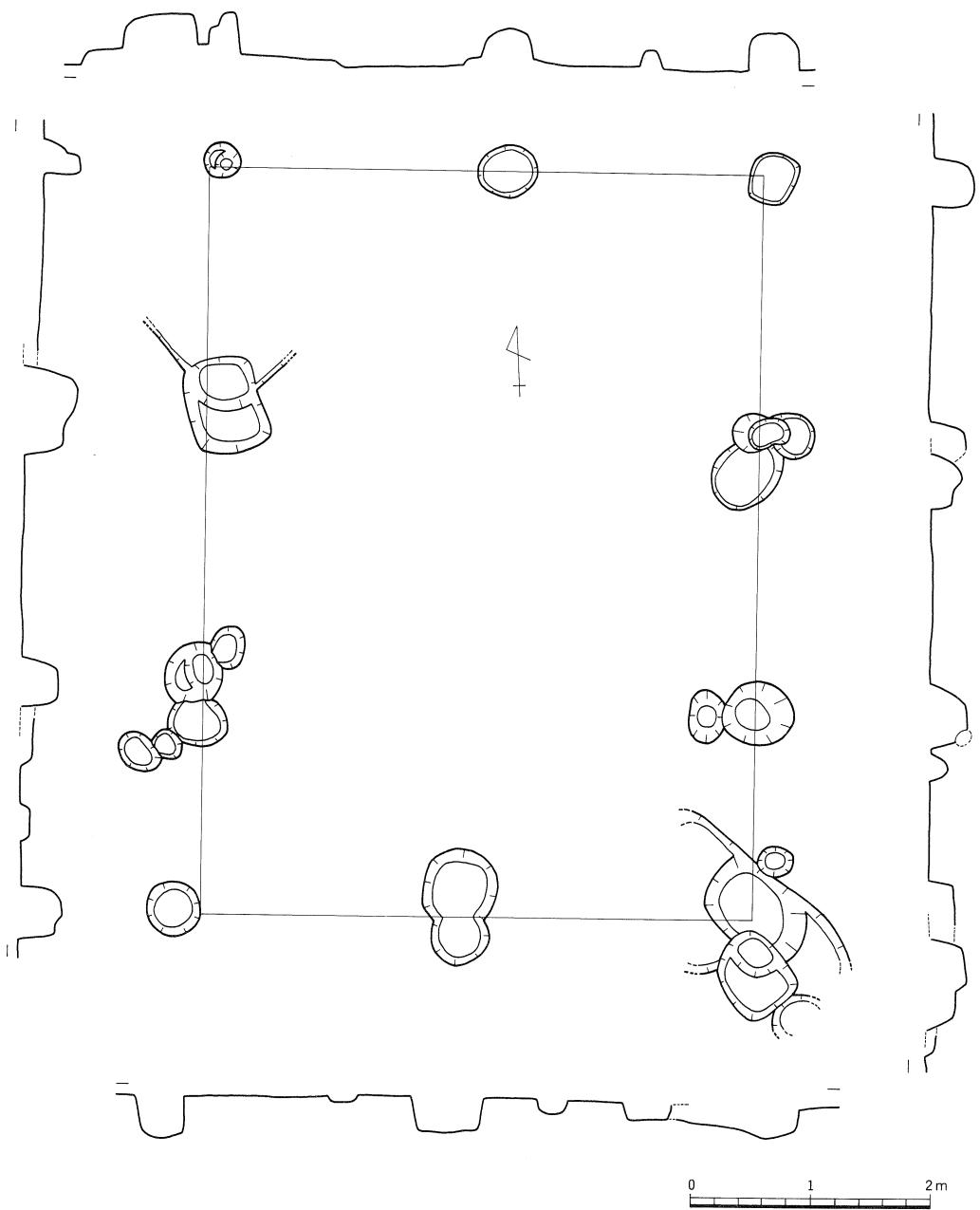


第46図 6号掘立柱建物実測図



第47図 7号掘立柱建物実測図





第49図 9号掘立柱建物実測図

9号掘立（第49図） 8号掘立の西側に位置し、東桁を一部重複する3×2間の建物である。桁行き624cm、柱間206cm、梁行き460cm、柱間219cmを測り、軸方位N5°E、床面積は28.7m²である。柱穴の形状は略円形であり、径32～68cm、深さ31～47cmである。一部、西側桁部分で後述する

10号掘立と柱穴で干渉するが、プランから前後関係を特定することはできなかった。その他、建物を構成するピットよりの遺物出土は見られない。

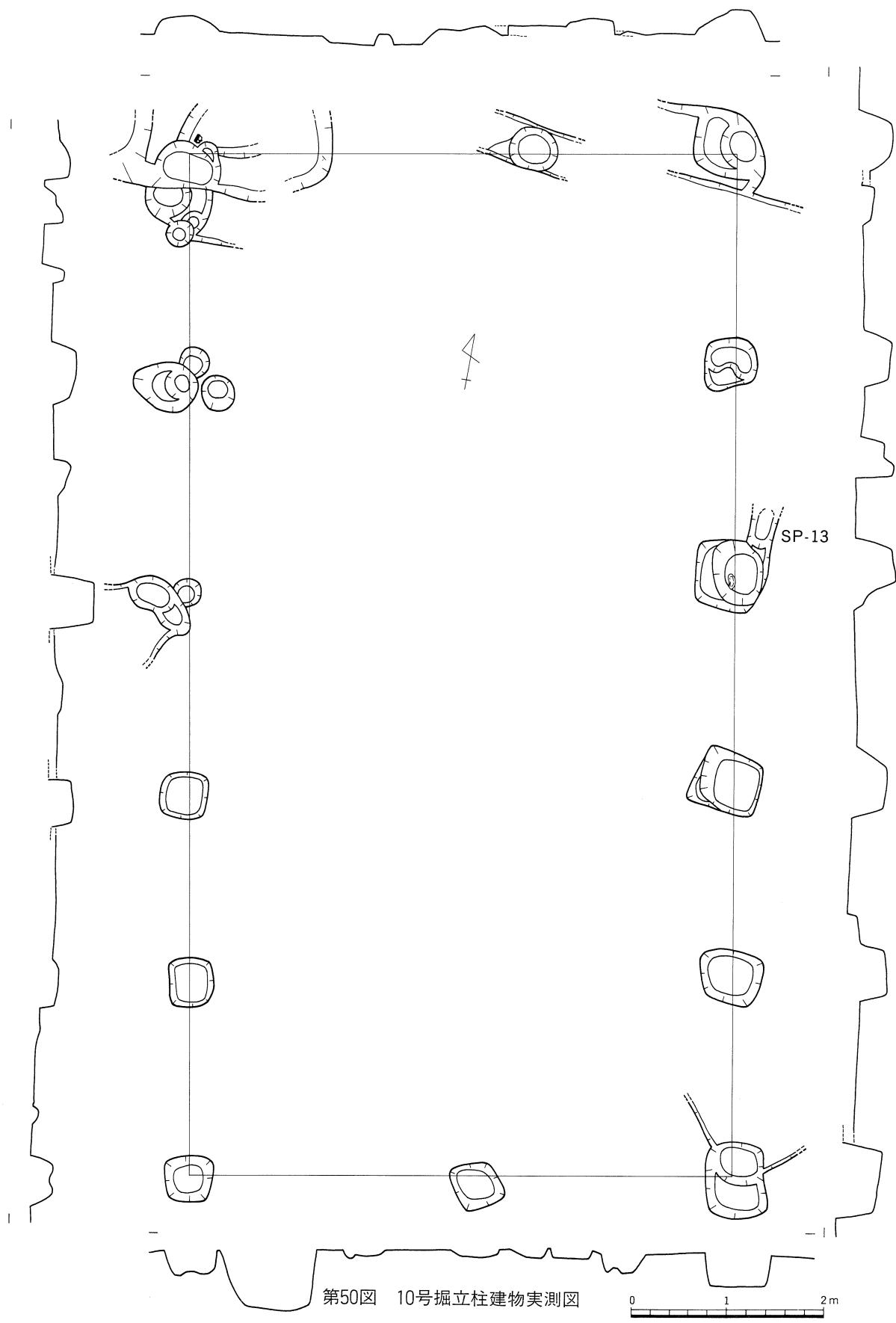
10号掘立（第50図） 調査区の中央やや南寄りに位置し、8号竪穴住居と一部重複する 5×2 間の建物である。桁行き1,088cm、柱間201cm、梁行き576cm、柱間273cmを測る。軸方位はN10°Wと6号掘立と並び大きく西に振れ、床面積は62.7m²と当遺跡の建物群では最大である。柱穴の形状は略方形を呈し、径44～65cm、深さ22～46cmである。東南隅の柱穴を9号掘立と共有しているが、その前後関係は前述のごとく不明であるが、柱穴の一つが8号竪穴住居のカマド跡を掘り抜いており、竪穴よりは確実に降るものである。その他、建物を構成するピットからは遺物の出土は確認されていない。

11号掘立（第51図） 10号掘立のやや西、8号竪穴住居を覆うようにして存在する 5×3 間の建物である。桁行き920cm、柱間183cm、梁行き 602cm、柱間212cmを測り、軸方位はN3°Wとやや西へ振る。床面積は55.4m²であり、柱穴の形状はいびつな楕円形を呈する。径36～62cm、深さ30～48cmと建物規模に比べて掘り方、大きさとともに稚拙で貧弱な印象を受ける。桁東側で細長い雨落ち溝の痕跡を窺わせる溝が検出されている。遺物はまったく見られず、8号竪穴住居との直接の切り合いがないため積極的に判断することは難しいが、その在り方から同一場所での竪穴から掘立への建て替えとして捉えることができよう。平成8年度調査の下新庄アラチ遺跡でも同様の在り方が確認されている。

12号掘立（第52図） 調査区中央のやや南寄り、11号掘立の東に隣接して存在し一部10号掘立と重複する。 3×2 間の建物であり、桁行き600cm、柱間211cm、梁行き438cm、柱間220cmを測る。軸方位はほぼ磁北を向き、床面積26.3m²である。柱穴の形状は略楕円形を呈し、径35～48cm、深さ28～50cmを測る。遺物はS P - 0 9より須恵器の壊が1点（第58図2）出土している。また北東隅の柱穴がS K - 1～3の土坑群と干渉しており、土層断面の観察より掘立の方が土坑群に後続することがわかる。

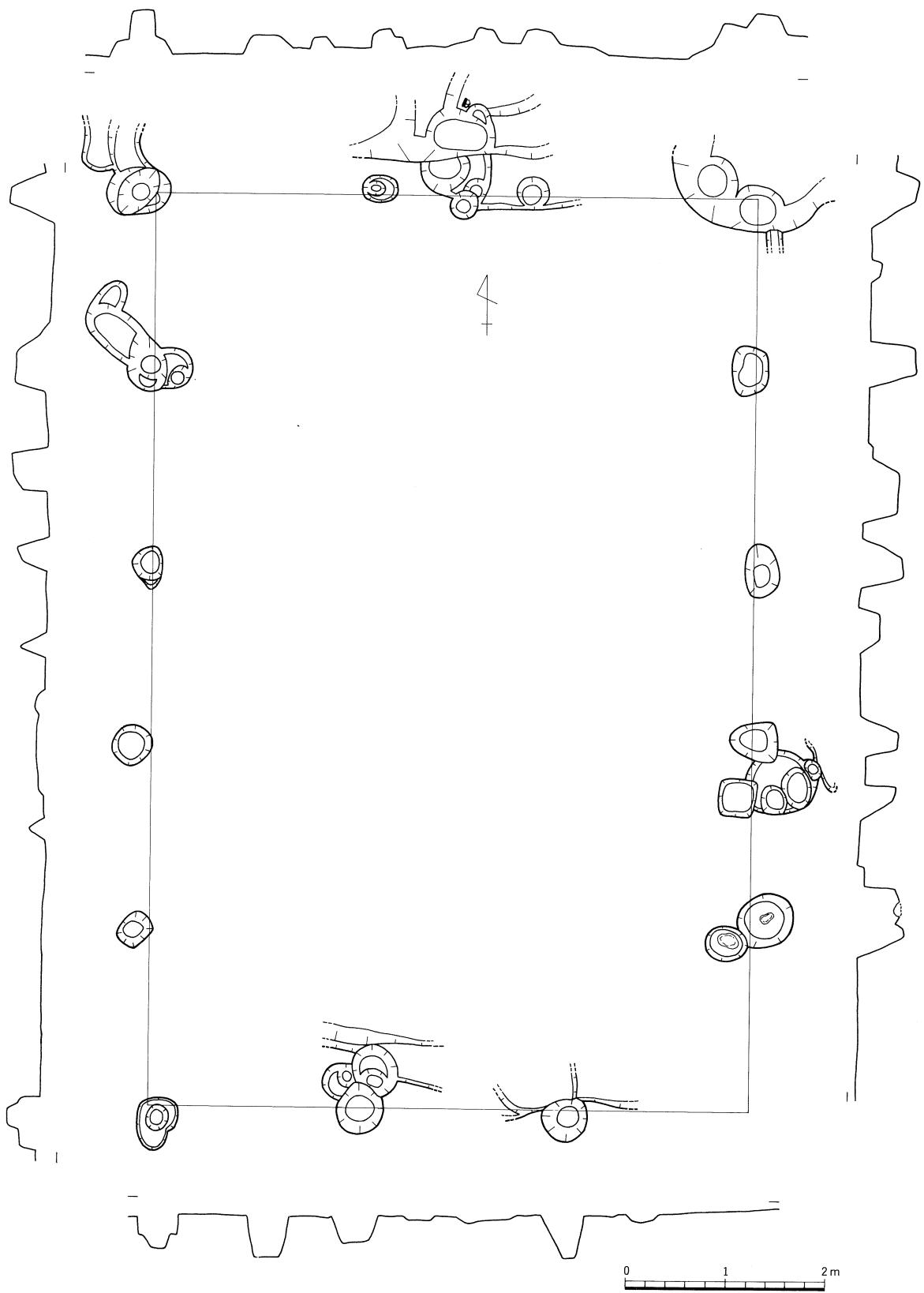
13号掘立（第53図） 調査区北半のほぼ中央、9号竪穴住居に重複して存在する 4×2 間の建物である。桁行き772cm、柱間184cm、梁行き464cm、柱間222cmを測り、軸方位N2°W、床面積35.8m²である。柱穴の形状は略方形を呈し、径38～63cm、深さ27～48cmである。柱穴よりの遺物の確認はないが、竪穴住居の項で説明したとおり東西の柱列が9号竪穴住居の壁を壊して掘られているため、竪穴よりは新しいものであることがわかる。

14号掘立（第54図） 13号掘立のやや北西側へずれて存在する 5×2 間の建物である。桁行き924cm、柱間156cm、梁行き452cm、柱間212cmを測り、軸方位N3°E、床面積41.8m²である。柱穴

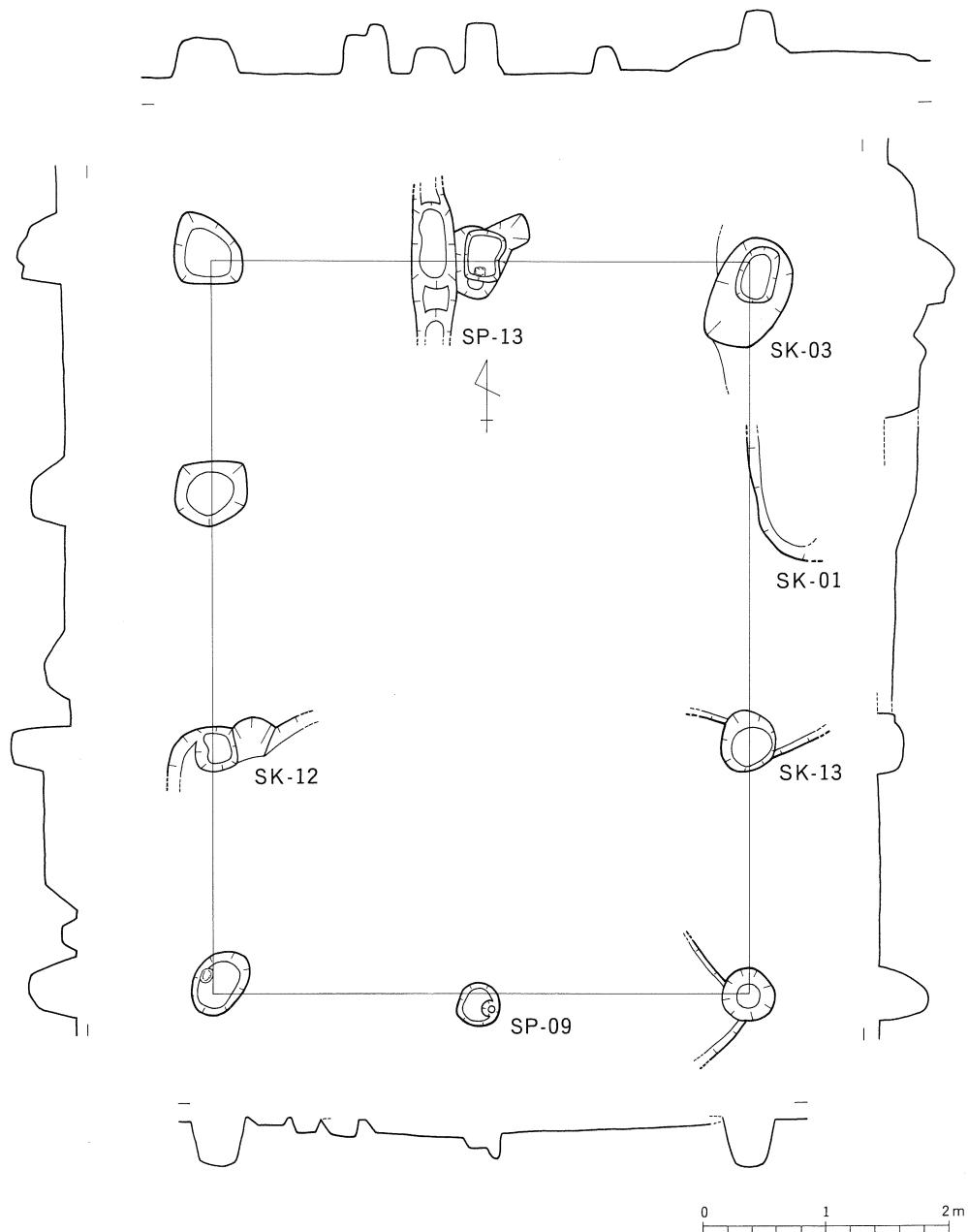


第50図 10号掘立柱建物実測図

0 1 2m

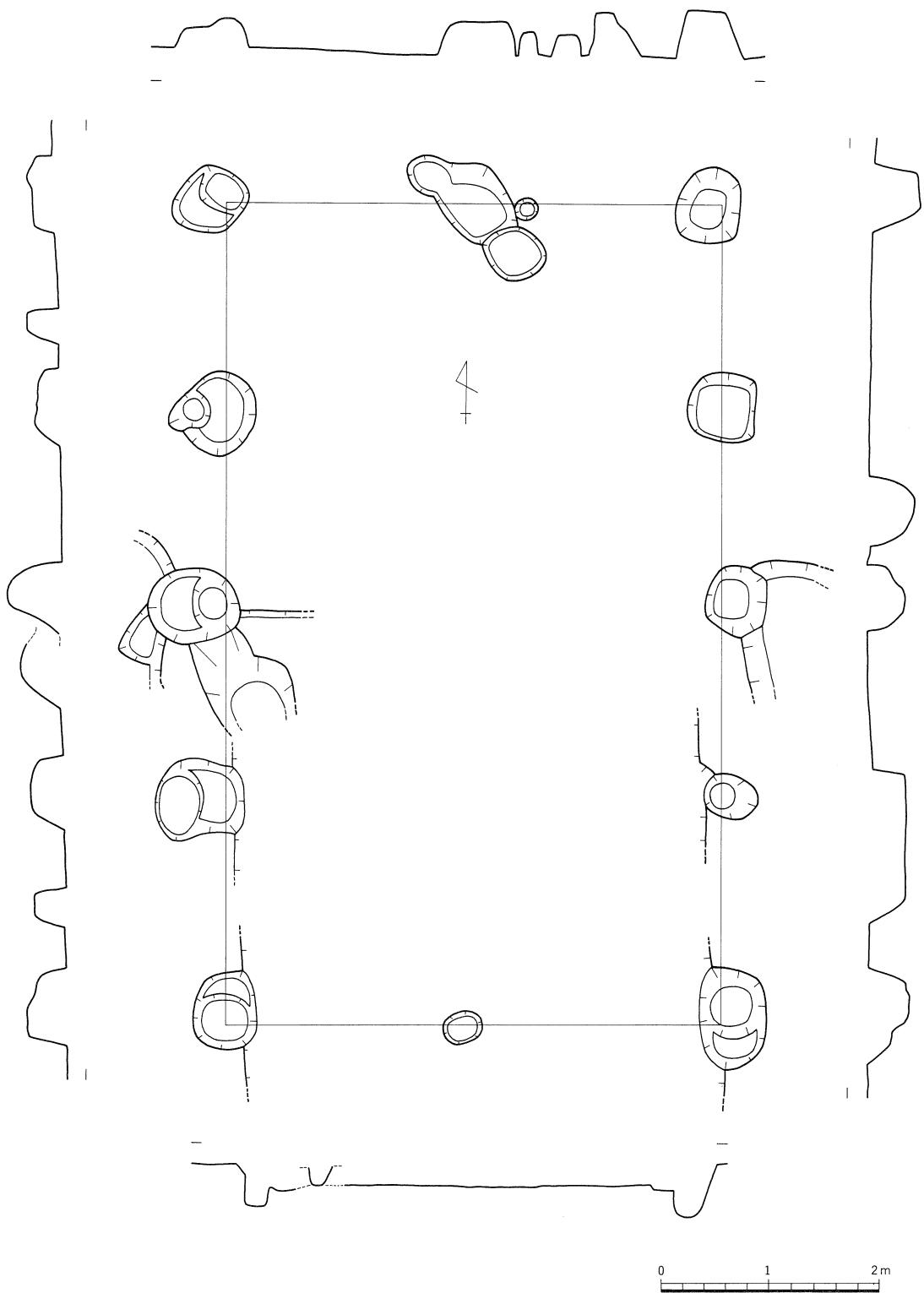


第51図 11号掘立柱建物実測図

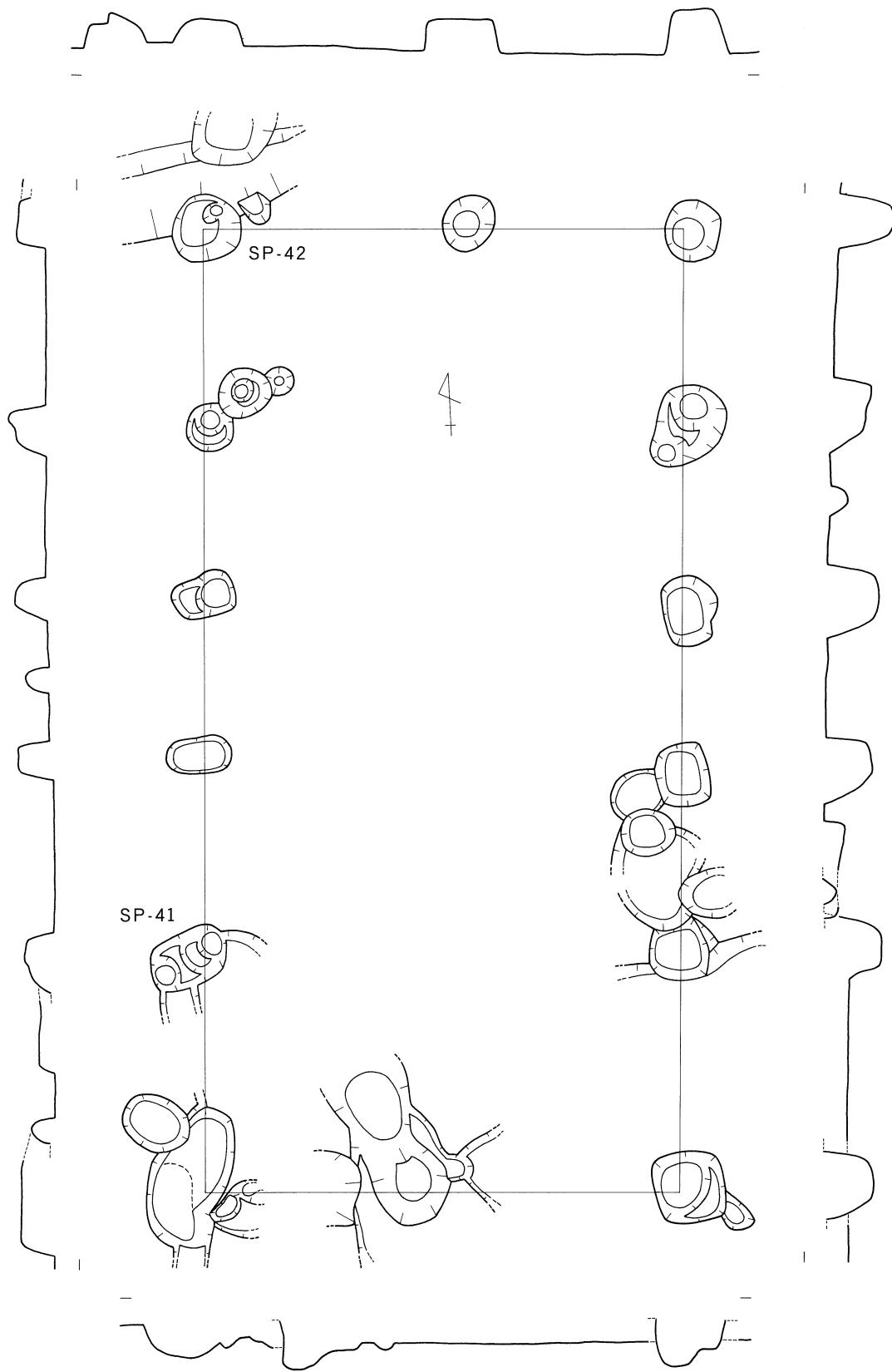


第52図 12号掘立柱建物実測図

の形状は略方形及び楕円形を呈し、径58~71cm、深さ30~52cmである。前述の13号掘立同様、南東隅で9号竪穴住居と重複する柱穴については切り合いかから確実に後続するものであることがわかるが、13号掘立との直接的な干渉が見られないためここでは時期的差異について判断することはできない。建物を構成するピットからは、西桁柱列のSP-41より須恵器坏の完形品が1点

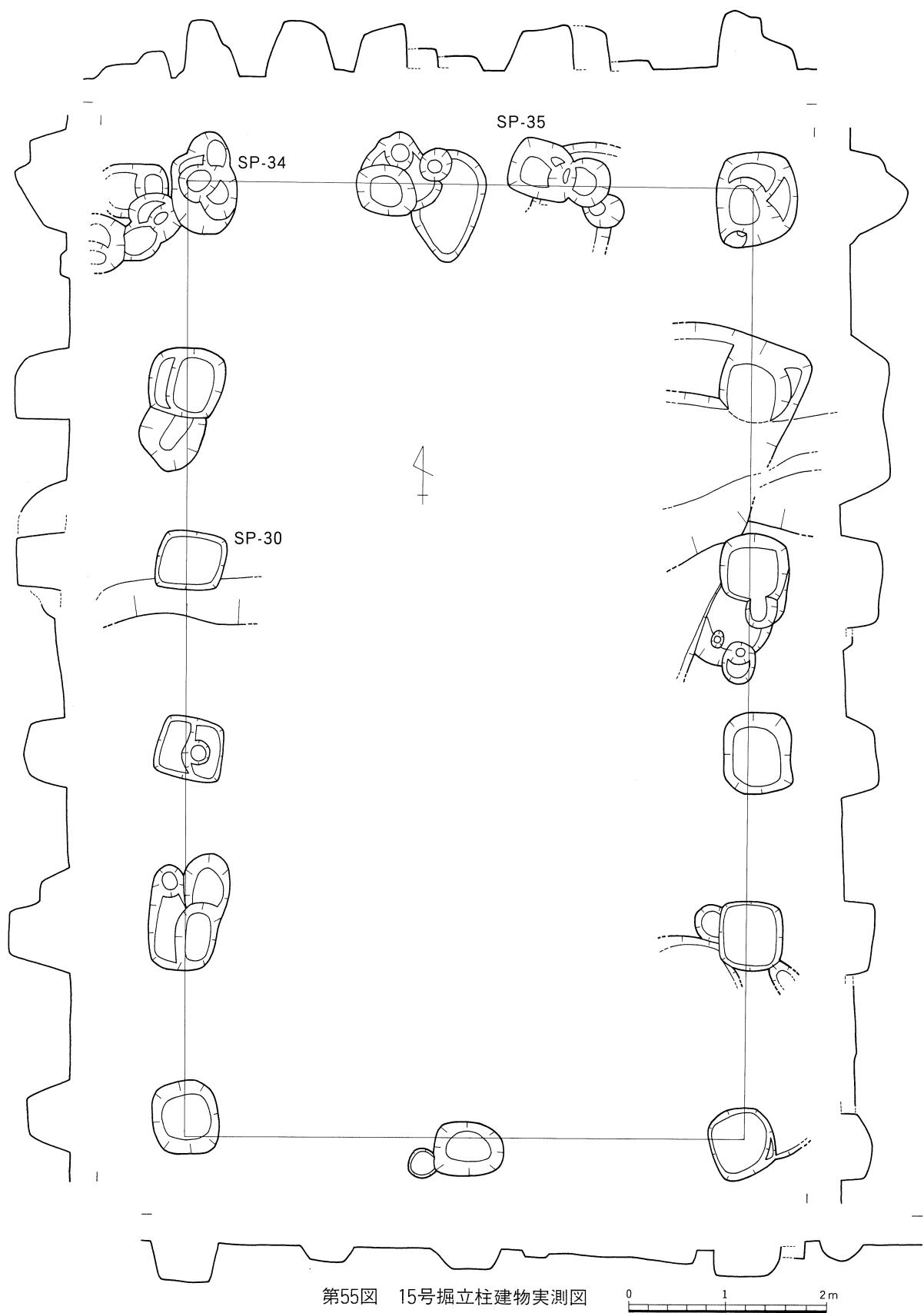


第53図 13号掘立柱建物実測図



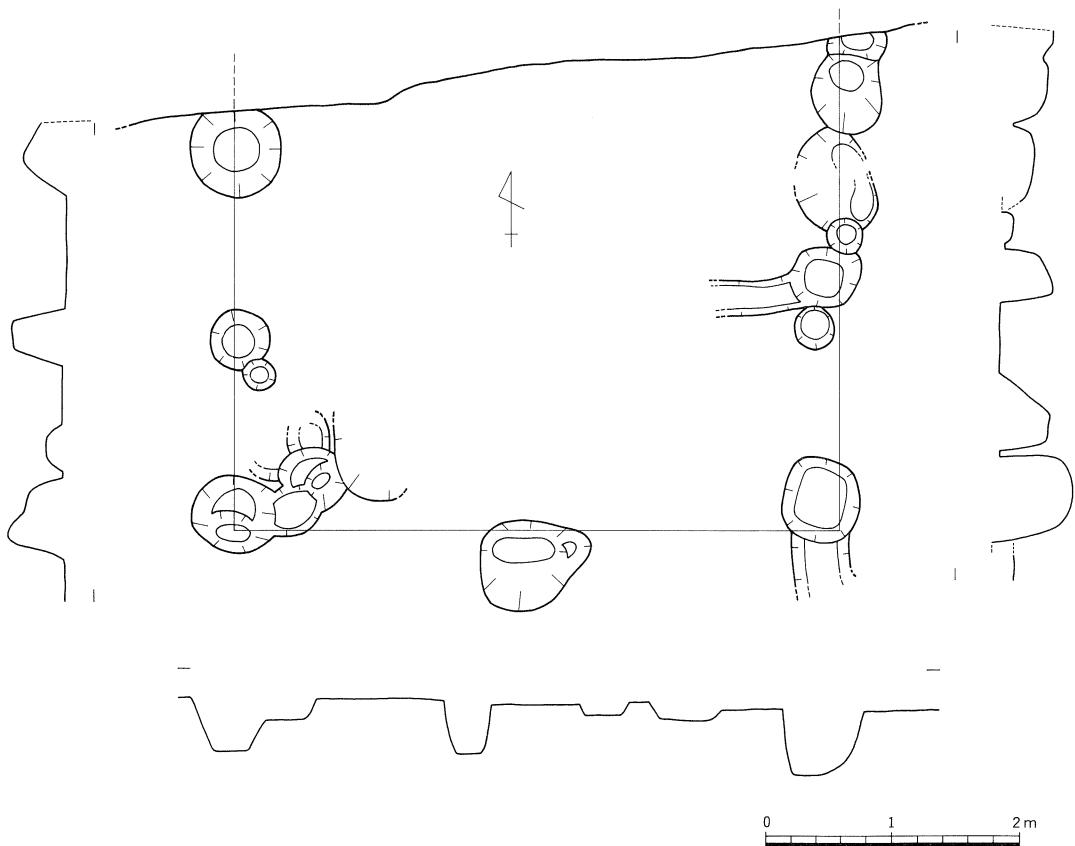
第54図 14号掘立柱建物実測図

0 1 2m



第55図 15号据立柱建物実測図

0 1 2m

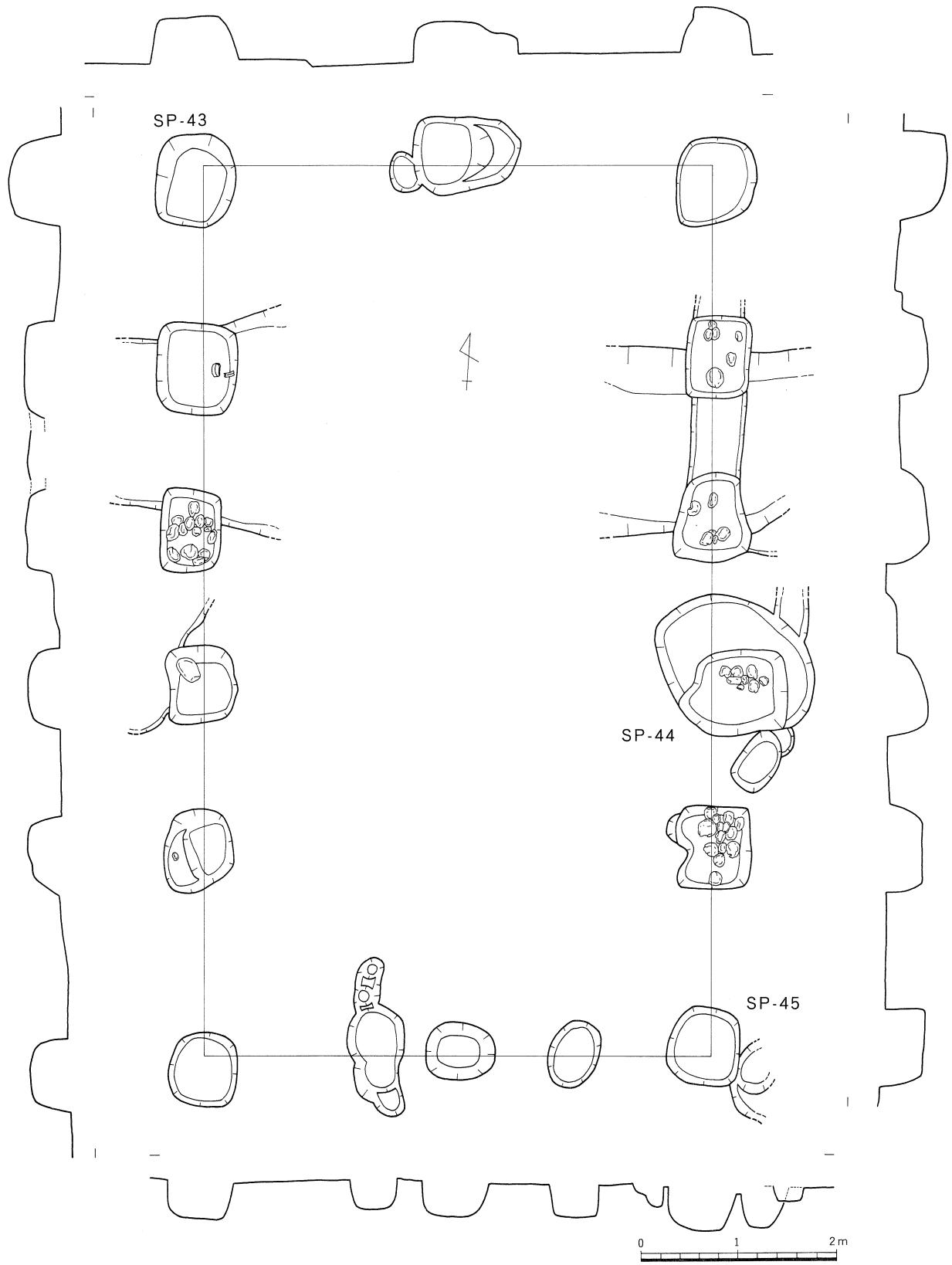


第56図 16号掘立柱建物実測図

(第59図19)、SP-42より有台坏の底部が1点(同20)出土している。

15号掘立 (第55図) 調査区北西側、14号掘立に隣接し弥生期の1号溝を跨ぐようにして存在する北梁 5×3 間、南梁 5×2 間の大型の建物である。桁行き984cm、柱間192cm、梁行き598cm、柱間北側で201cm、南側で285cm、床面積58.8m²を測る。主軸はN1°Eとやや東に振れ、桁西側及び梁北側に一部雨落溝の痕跡のような溝が確認される。柱穴の形状は略方形を呈し、径69~86cm、深さ22~57cmである。遺物は3ヶ所より出土しているが、この内SP-30及びSP-34から出土した2点(第34図11・12)は1号溝に帰属するもの及び弥生期からの混入品であり参考とはならない。またSP-35から出土した須恵器の坏(第58図14)は建物の時期を決定するための数少ない傍証であるが、小方のため判断に苦慮する。

16号掘立 (第56図) 調査区西半の北端に位置し、一部15号掘立と重複する建物である。過半が調査区外の加賀産業道路下へ伸びているため全体は不明であるが、梁行きは478cm、柱間232cm



第57図 17号掘立柱建物実測図

を測る。桁行きの柱間は検出された部分で176cmであり、軸方位はほぼ磁北を向く。柱穴の形状は略方形または楕円形を呈し、径46~65cm、深さ34~53cmを測る。南側梁の中柱が棟持ち柱のように若干外へ出ている。遺物の出土はなく、15号掘立との直接的な切り合いも見られないため、単純に前後関係を検証することはできない。

17号掘立（第57図） 調査区の北東隅、弥生期の1号溝を跨ぐようにして存在する変則的な5×3間の建物である。桁行き918cm、柱間168cmを測る。梁行きについては520cmであるが、北側は通常の2間（柱間253cm）であるのに対して南側は3間、更に中央にもう一本東柱のような柱を持つが（柱間は西より184cm-85cm-118cm-133cm）、軸に対して外へ出ているようなことはない。同様な建物は平成8年度に調査された下新庄アラチ遺跡や金沢市藤江B遺跡⁽¹⁾でも見られる。柱穴の形状は略方形もしくは楕円形を呈し、径71~94cm、深さ37~46cmを測り、軸方位N4°W、床面積47.7m²である。また、この掘立も15号掘立と同様に東西両桁及び北梁に沿って雨落溝状の痕跡が確認されている。遺物は建物を構成するSP-43より須恵器の有台坏と蓋天井部が1点ずつとSP-44より小振りの蓋が1点、SP-45より内黒の土師器底部が1点出土しているが、後者は他との比較から同時性に不安を残す。

3. その他の遺構・遺物

（1）ピット（遺物 第58・59・60図）

各ピットより出土した遺物についてはやはり全体数が少なく、1ピット1点程度であったために図版上での便宜を図るために須恵器、土師器という区分で整理した。したがって以下の記述は必ずしも遺構Noの順によっておらず、図版掲載順としたことをご了解願いたい。

SP-01 調査区の南東側に位置する。長径54cm、短径37cm、深さ29cmを測り平面プランは略長方形を呈する。58図1は外面に自然釉が付着した壺の頸部及び肩部である。頸部の径より広口壺になるものと思われる。

SP-09 調査区南半のほぼ中央、竪穴状遺構の中に存在する。12号掘立を構成するピットであり、長径36cm、短径33cm、深さ24cmを測るほぼ円形のプランを呈する。58図2は底部中央を欠く須恵器の盤である。大きく外傾して伸びる体部に続く口縁部はあまり外反せず、先細りの端部に至る。

SP-11 調査区中程やや南寄りの東壁際に位置する。長径46cm、短径44cm、深さ28cmを測り平面プランはほぼ円形を呈し、内部は二段掘りになっている。58図3は須恵器の坏蓋端部である。端部の屈曲が強く、天井部に向けて高く盛り上がる。小片のため径に不安を残すがやや小振りのものである。

SP-13 調査区中央のやや南寄りに位置し、12号掘立を構成するピットと短い溝状遺構を介して干渉するが、プランからの前後関係は不明である。長径52cm、短径27cm、深さ20cmを測る長楕円形を呈し、南に接する10号掘立を構成するピットに先行する。58図4は外面に僅かに

自然釉が付着した有台坏の底部である。高台は厚みのあるいわゆるぼったりとした作りであり、外展するがさほど稜角的な作りではない。

S P - 1 5 調査区中央の西寄りに位置し、近代の旧用水跡に隣接する。長径75cm、短径31cm、深さ最も深い所で20cmを測る不定形を呈し、内部に一段テラスを有する。58図5は天井部中央からつまみ部を欠く坏蓋である。均整のとれた体部から口縁先端が嘴状に屈折する。

S P - 1 6 調査区中央のやや西、S K - 0 9の南側に位置する。長径37cm、短径66cm、深さは見かけの地山まで42cmである。ピットとしてはやや大型の不定形を呈し、該期の遺構というよりもとはS K - 0 9と対をなす風倒木痕と思われる。58図6は須恵器の有台坏である。底部から直線的に立ち上がり、口縁部は緩く外反して端部を先細りで仕上げる。帰属すべき遺構の本来の形は不明であるが、後世に掘り込まれた遺構からの混入品であろう。南部地区では他年度の調査でもいくつか風倒木痕が検出されているが、その多くはそこで確認される遺構すべてに先行するものであり、存在の希薄な縄文時代の遺構にすら切られているものも検出されている。生い茂る大木が北国の猛烈な季節風になぎ倒されたのは、この地区に人間の足跡が記されるずっと以前の出来事であった。

S P - 2 2 調査区の中央東側に位置する複合ピット群の一つであり、後述するS P - 3 8にプランからの確認では後続する。長径は推定で49cm、短径36cm、深さ33cmを測り、略長方形を呈する。58図7は口径12.0cmを測る坏の口縁部であり、体部下半及び底部を欠いている。直線的に伸びる口縁部上端を先細りで仕上げる。

S P - 2 3 S P - 2 2の北東1.3mに位置し、長径49cm、短径27cm、深さ15cmを測る浅い略橢円形のピットである。58図8は須恵器の有台坏であり、底部中央を欠いている。口径に対して身の深いタイプのものであり、鋭角的に作った高台付け根に沈刻を巡らす。口縁部上端を先細りで仕上げる。

S P - 2 4 調査区中央やや北寄りの東側、北流する旧用水の西隣に位置する。直径30cm、深さ36cmの円形を呈する小振りのピットである。58図9は体部上半及び底部中央を欠く須恵器の有台坏底部である。外面に一部自然釉が沸いた状態で付着している。残存部より底部のうねりが大きく、器壁も厚いことがわかる。高台は稜角的に仕上げ外展する。

S P - 2 5 調査区の中央やや北側、S K - 0 4を切って存在するピット群の一つであるが、隣接するピットとの先後関係は不明である。推定で長径32cm、短径26cm、深さ49cmを測る略円形を呈する。58図10は須恵器の無台坏である。底部中央を欠くがやや上げ底とし、口縁部に向けて直線的に立ち上がった体部は外反することなく伸び、ややぼったりとした端部へ続く。

S P - 2 7 調査区西側に位置し、周辺は当遺跡の中でも遺構密度の低い地点に当たる。長径39cm、短径32cm、深さ17cmを測る浅い橢円形を呈する。58図11は坏蓋の口縁端部である。上半を欠き、口縁部は嘴状に屈折するが鋭さがなく、その度合いも深い。

S P - 2 9 調査区北側の東壁際に位置し、長軸73cm、短軸68cm、深さ23cmを測る略方形を呈する。遺構全体図の上では周囲にもう数棟建物が存在するような可能性を感じさせるが、個々の

ピットを見ると掘り方の意匠が異なりこれ以上組み合わせることはできないものと思われる。58図12は須恵器無台坏の底部である。やや大振りのものであり、口縁部及び底部中央を欠くが、残存部より口縁部に向けて緩やかに外反することがわかる。

S P - 3 3 調査区北西隅に位置し、S P - 3 1と対をなすかと思われる柱穴様のピットに切られているが、周囲にはこれ以上建物を構成すると思われる要素は認められない。長径45cm、短径33cm、深さ24cmを測り、プランは橢円形を呈する。58図13は坏蓋の口縁端部である。天井部へ向けて直線的に立ち上がって行くものの上半を欠く。端部は嘴状に強く屈折し、仕上げも鋭さを感じさせる。

S P - 3 5 調査区北端に位置し、15号掘立を構成するピットである。長軸69cm、短軸61cm、深さ38cmを測り、略長方形を呈する。16号掘立の南東角の柱穴と非常に近接しているが、残念ながら直接の切り合いは認められない。58図14は底部中央及び体部上半を欠く有台坏の底部である。高台は丸みを帯びた作りで、外面の立ち上がりも高台より外へはあまり張り出さない。

S P - 3 7 調査区中央やや東寄りの北壁際に位置し、不定形な落ち込みの中に存在する。長径81cm、短径52cm、深さ27cmを測る略橢円形を呈する。58図15は須恵器の有台坏である。厚みのある底部から鋭く立ち上がる体部がやや外反して口縁部へ続き、端部は先細りで仕上げる。高台は稜角的な作りで外展するしっかりとしたものである。

S P - 3 8 調査区中程の東側に位置し、S P - 2 2に一部破壊されている複合ピットである。長径51cm、短径39cm、深さ最も深い所で36cmを測り、平面プランは不定形を呈する。58図16は天井部中央及びつまみを欠く坏蓋である。回転ケズリを施した平坦な天井部からなだらかに口縁部に続き、端部の屈折はさほど強くない。

S P - 3 9 調査区南西隅、6号竪穴住居コーナー部分に重複しており、検出時の確認より6号竪穴住居に後続するピットである。長径83cm、短径64cm、深さ45cmを測り、偏平な卵型を呈する。59図17は大型の須恵器甕である。口縁端部下外面に2条の波状文を施し、外面頸部以下には自然釉が全面に付着している。59図18は土師器の高台受け部である。丁寧なミガキ調整を行い、内外面ともに赤彩を施す。ゆるやかに内湾して伸びる口縁端部は軽く上方につまみ上げ、指頭状の丸縁に仕上げる。

S P - 4 1 調査区北側のほぼ中央に位置し、14号掘立を構成する複合ピットである。掘り上がりの状態で長径約69cm、短径57cm、深さ柱痕と推定される部分で36cmを測る。59図19は須恵器の無台坏である。外傾して立ち上がる口縁部を外反させて端部を纖細な先細りに仕上げる。外面に重ね焼痕が見られ、底部は中央に回転ヘラ起こし時の粘土が突起状に残り器としての安定感に欠ける。

S P - 4 2 S P - 4 1の北側に位置し、同じく14号掘立を構成するピットであり径約69cm、深さ28cmを測る略方形を呈する。59図20は高台部分のみ残存する有台坏底部である。低い高台が外展して取り付き、立ち上がりまでの張り出しあはや大きい。

S P - 4 3 調査区北東側の17号掘立を構成するピットである。長径98cm、短径81cm、深さ48

cmを測り略長方形を呈する。59図21はやや小振りで身の深い有台坏である。立ち上がりの張り出しあはやや大きく、非常に薄い器壁の体部がゆるやかに外反して伸び端部を洗練された先細りに仕上げる。58図22は端部及びつまみ部を欠く蓋である。天井部を回転ヘラケズリで仕上げる。

S P - 4 4 同じく17号掘立の東桁を構成するピットである。小土坑と重複しており、現状で長径104cm、短径87cm、深さ34cmを測る略長方形を呈する。59図23は小振りの蓋である。擬宝珠つまみを持ち、口縁端部は嘴状に強く屈曲する。

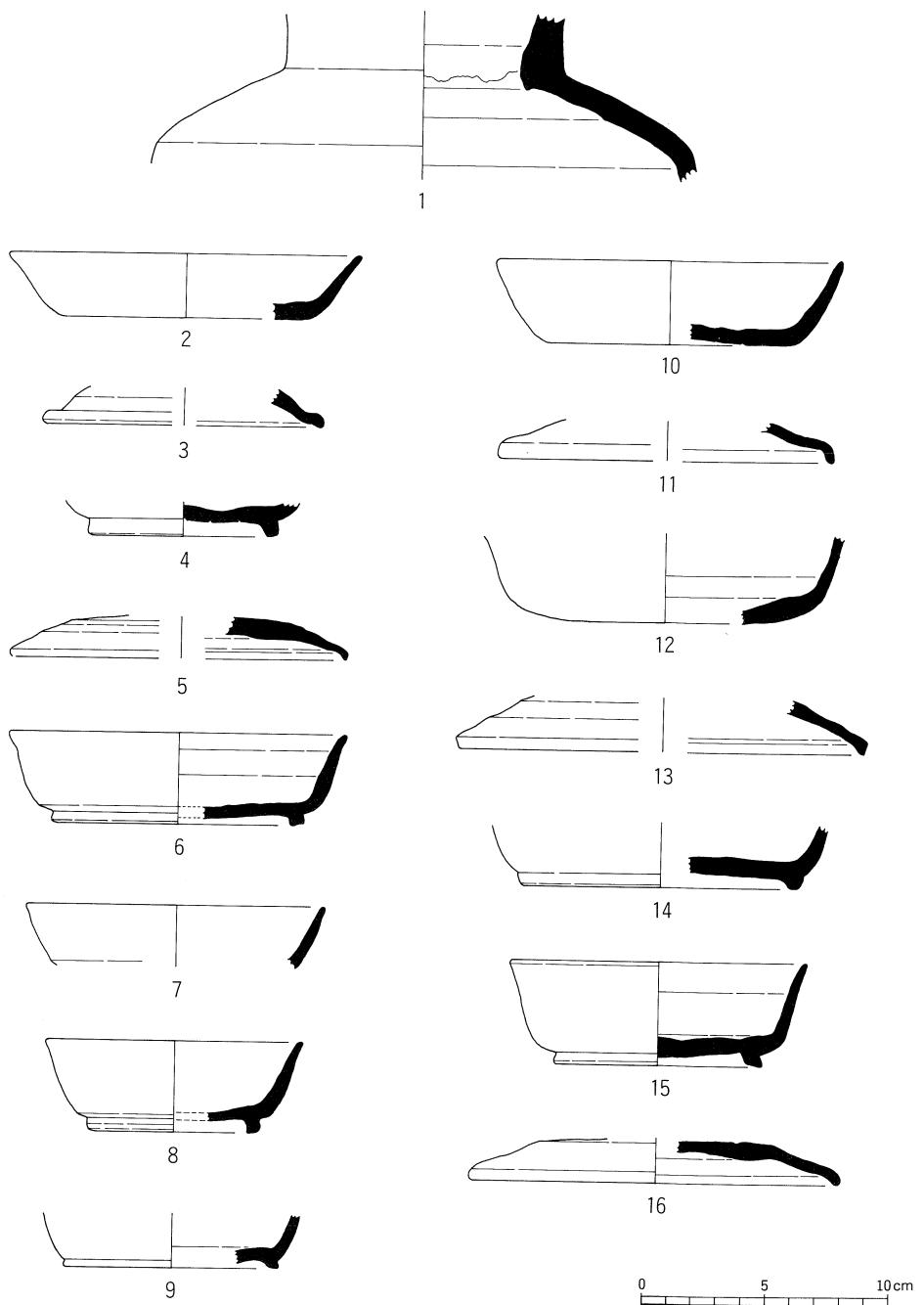
S P - 0 6 調査区南西隅の小拡張区、6号竪穴住居のすぐ南に位置し、6号掘立を構成するピットである。長軸推定で67cm、短軸65cm、深さ44cmを測り、平面プランはほぼ方形を呈する。59図1は土師器小型甕の口縁部である。頸部よりなだらかに外反する口縁端部を垂直につまみ上げ、面取りをして先端は先細りに仕上げる。

S P - 0 8 調査区中央の南寄り、7・8号竪穴住居の東側に位置する複合ピットであり、遺物が出土したのは内側の略楕円形を呈する方のピットである。長径42cm、短径28cm、深さ29cmを測る。59図2は土師器小型甕である。器壁が厚く、外反する口縁端部はずんぐりとした丸縁に仕上げる。頸部内面の屈曲は強い稜をなす。

S P - 2 6 調査区北半中程の西側に位置する。長軸38cm、短軸35cm、深さ43cmを測る略方形を呈し、内部にテラスを一段持つ。やや小振りであるものの柱穴として見ても端正な形をしているが、周囲で建物の存在は確認されていない。59図3は土師器長胴甕の口縁部である。小片のため口径は定かでないが、伸びやかに外反する口縁端部を軽く上方につまみ上げ、面取りを施す。口縁部内面にまでカキ目を残す。

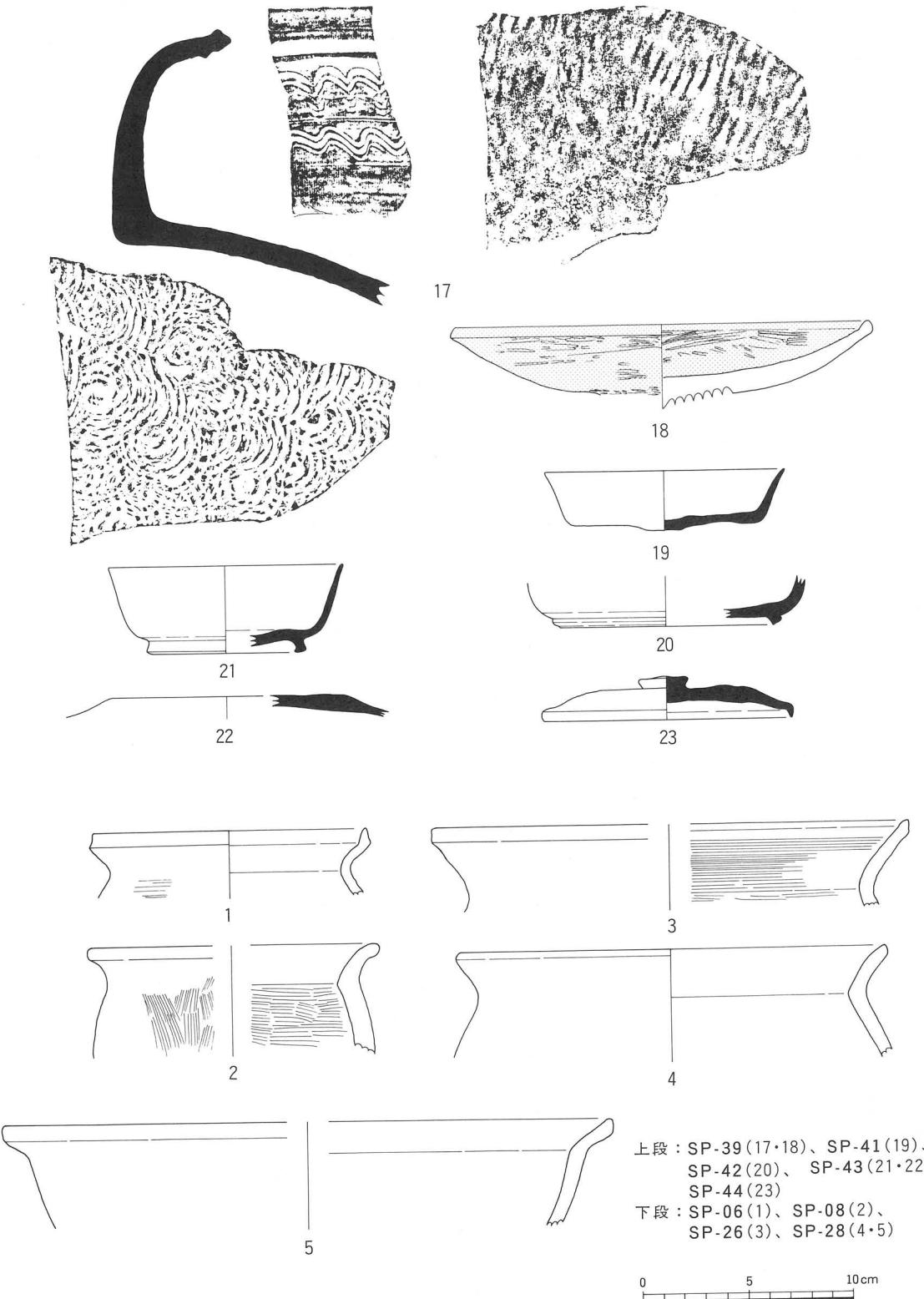
S P - 2 8 調査区北半のほぼ中央、9号竪穴住居の西に接して存在する。複合する土坑、ピット群の中央にあり、土坑自体は13号掘立を構成する柱穴に先行するが、S P - 2 8については前後関係は不明である。しかしながら土坑検出時においてS P - 2 8を別個のものとして先に検出して記憶はなく、更に先行するものか同時期のものである可能性が強い。長径は現状で58cm、短軸は同じく40cm、深さ36cmを測り、平面プランは略楕円形を呈する。遺物は2点出土している。59図4は土師器の壺型土器である。湾曲した体部から続く口縁部は強く外展し、端部に軽く面取りを施す。59図5は「くの字口縁」の甕である。胴部の張り出しあは口径を若干越えるものと思われ、外反する口縁端部を丸縁に仕上げる。頸部内面の屈曲部は鋭い稜をなす。

S P - 3 1 調査区の北西隅、弥生期の1号溝の上に掘り込まれたピットである。長軸71cm、短軸66cm、深さ38cmを測る端正な方形を呈し、東に存在する15号掘立の柱穴と同意匠の掘り方であるため建物を構成する柱穴の可能性が高いが、南及び東西に組み合わされるべき柱穴が確認されていない。唯一北側に通常の2間分の距離をおいて柱穴様のピットが存在するが、無関係のもののか門状の遺構の一部であるのか判然としない。他年度の調査においても柱穴状のピットが2基1対となって存在する状況がまま見られ、小さな門状の遺構と考えているが、いずれも間隔は本例の半分程度のものである。60図6は「くの字口縁」の甕である。胴部の張り出しあは口径を大きく越え、外反する口縁端部はやや甘い先細りに仕上げる。胴部外面及び口縁部内面に横位を基本

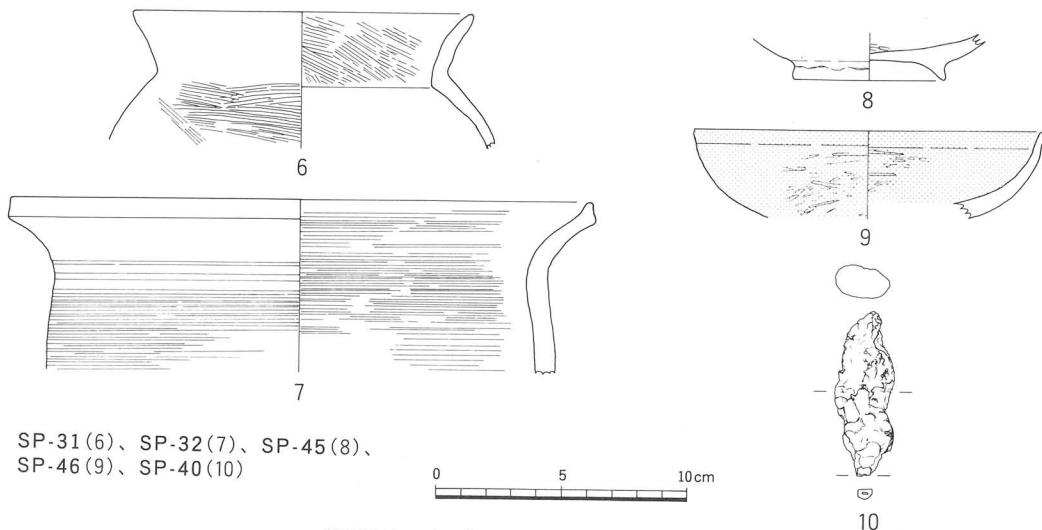


第58図 各ピット出土土器（須恵器）

SP-01(1)、SP-09(2)、SP-11(3)、SP-13(4)、SP-15(5)、SP-16(6)
 SP-22(7)、SP-23(8)、SP-24(9)、SP-25(10)、SP-27(11)、SP-29(12)
 SP-33(13)、SP-35(14)、SP-37(15)、SP-38(16)



第59図 各ピット出土土器（上段・須恵器、下段・土師器）



第60図 各ピット出土土器（土師器ほか）

とするハケ調整が見られ、内面屈曲部の稜は鋭い。下層遺構よりの混入品であろう。胎土に海綿骨針を僅かに含む。

SP-32 SP-31の北東1.8mに位置し、長径88cm、短径81cm、深さ14cmを測り円形を呈する浅いピットである。60図7は土師器の長胴甕である。大きく外反する口縁部の端部を垂直につまみ上げ、断面三角状に先細りさせ、外面に面取りを施す。口縁部内面にカキ目を残す。

SP-45 調査区北西隅の17号掘立を構成するピットである。長径81cm、短径79cm、深さ47cmを測るほぼ方形を呈する。60図8は内黒の土師器椀底部である。胎土には赤色粒を多く含む。

SP-46 調査区南半東寄りの8号掘立を構成するピットである。長径95cm、短径76cm、深さ35cmを測る略長方形を呈する。60図9は内外面に赤彩を施す土師器の椀である。内湾して立ち上がる口縁端部を外反させてシャープな先細りに仕上げる。内外面ともにミガキ調整が丁寧に行われており、非常に精緻な作りである。

SP-40 調査区ほぼ中央、SK-04を切って掘られている径約41cm、深さ49cmを測る円形のピットである。遺物は鉄製品が1点出土している。60図10は現状で長さ65mm、幅22mm、厚さ14mm、重さ17.9gを測る。保存処理が十分でなく、鑄びて大きく膨れているが、破断面の観察より5×4mmほどの釘状のものと思われる。

この他、第3章冒頭で述べたように当遺跡からは非常に多くの遺構が検出されており、全体図の上から一見建物の存在を窺わせるような在り方も珍しくない。特に調査区北西隅、4号竪穴住居の西に広がる環状のピット群は多角形住居を思わせるような配列を示すが、その構成は一見して近代以降とわかる灰色粘土を覆土とするものや、古代以前の暗灰色粘質土を覆土とするものな

どが混在しており、偶然の産物である。

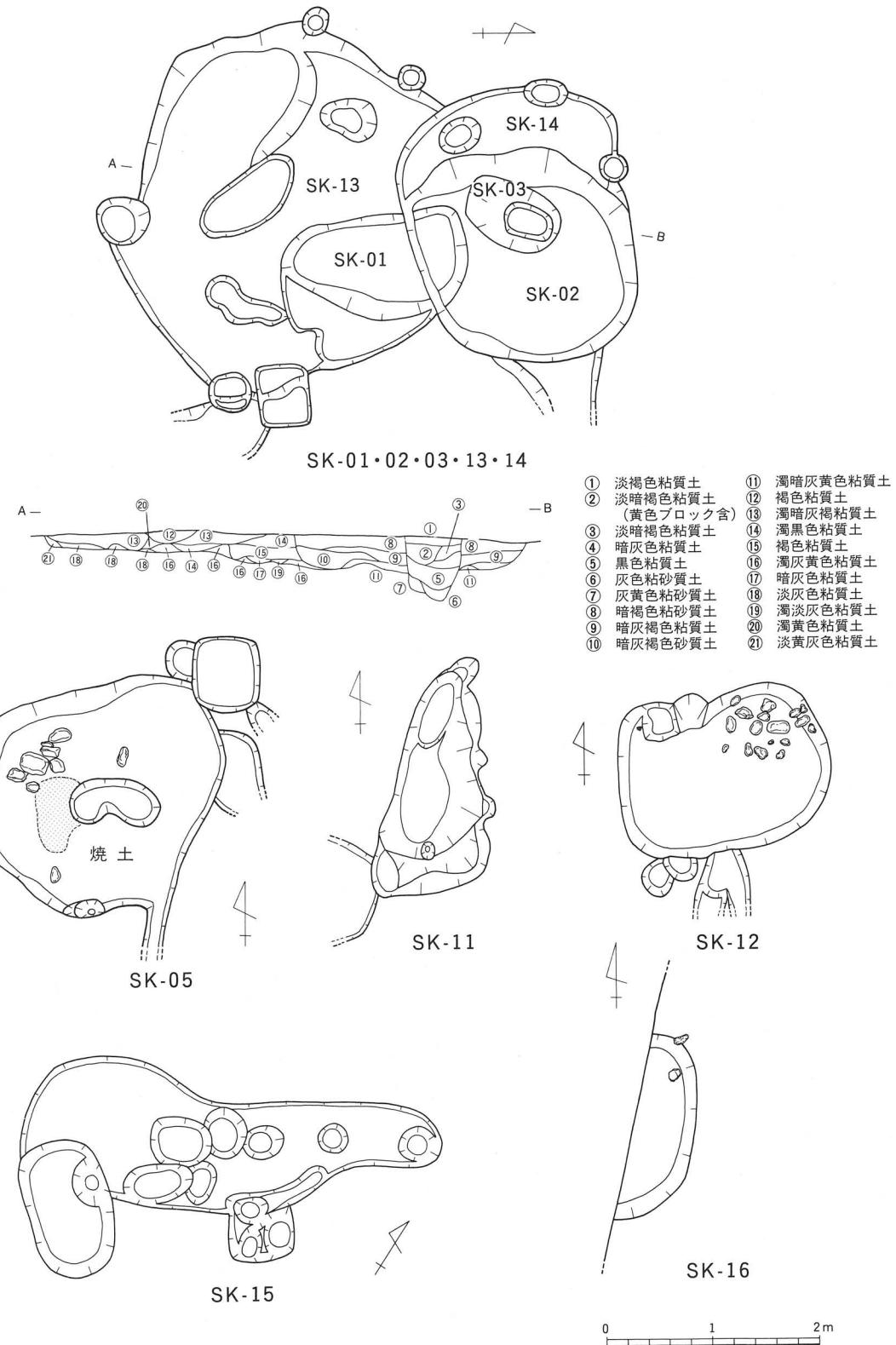
(2). 土坑（遺構 第61図、遺物 第62図）

S K - 0 1 調査区中程やや南寄りの3号竪穴住居に隣接する。長軸 176cm、短軸101cm、深さ25cmを測る略楕円形を呈する。複数の土坑とともに混在するが、検出時の確認では S K - 0 2 に先行するものと思われ、このことは土層断面の観察からも看取される。また、当土坑を内包するさらに大きな土坑（S K - 1 3）との関連については、検出面より別個のものとしては確認されおらず、全体に掘り下げて行った後に S K - 0 1 が一段下がるという経緯で完掘している。出土遺物は非常に少なく、図化できたものは1点のみである。1は須恵器の無台壺である。底部中央部を欠き、直線的に伸びる体部から口縁端部が僅かに外反し、先細りに仕上げる。

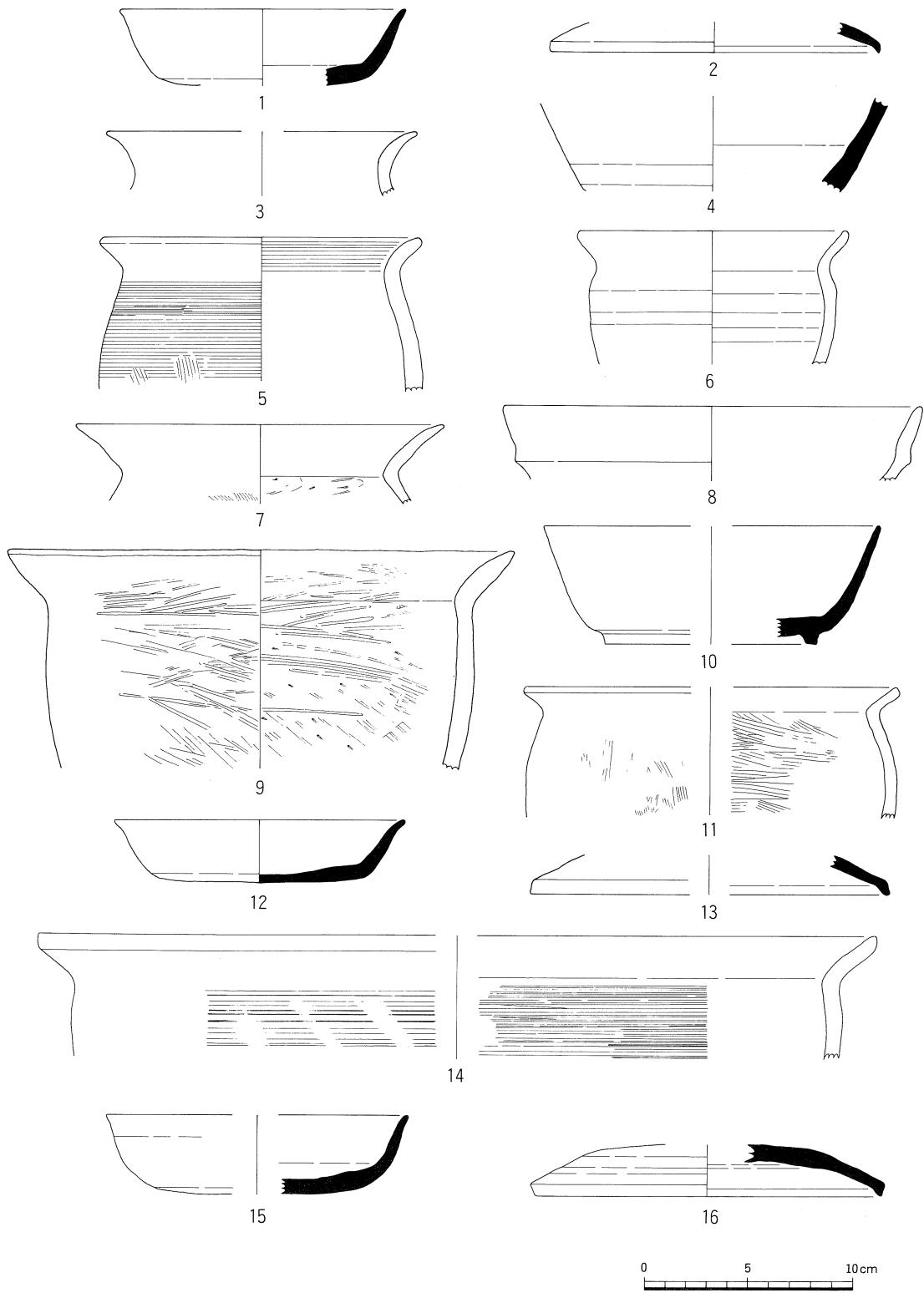
S K - 0 2 S K - 0 1 を含む S K - 1 3 を切ってすぐ北側に掘られている複合土坑である。長軸203cm、短軸198cm、深さ23cmを測る略方形を呈し、壁の立ち上がりは浅い椀型のようであり、プランの確認では西側に一段高いテラスのように存在する S K - 1 4 に後続する。土層断面の観察からは、後述の S K - 0 3 と積極的に別の遺構として認識することはできず、掘り方の上端も曖昧である。また、プランからも確認されていないため、同一の遺構内での緩い落ち込みとして捉える方が妥当かも知れない。遺物は1点のみ図化されている。2は器体の大半を欠く須恵器の壺蓋口縁部である。天井部より素直に伸びており、端部を軽く嘴状に屈折させる。

S K - 0 3 S K - 0 2 に内包されており、前述のごとく掘り方が曖昧であり S K - 0 2 と同一視する方が妥当かも知れないが、現状で長軸94cm、短軸61cm、深さ検出面より28cmを測る略長方形を呈し、S K - 0 2 とのレベル差は最大で 5 cm である。壁の立ち上がりは緩やかで、土層断面からも確認される通り12号掘立を構成する柱穴に壊されており下端は確認されていない。遺物は2点図化されている。3は「くの字口縁」の甕である。頸部より緩やかに外反する口縁部の端部を外展させ、先細りに仕上げる。4は須恵器瓶類の体部下半である。

S K - 0 5 調査区南側のほぼ中央、15号掘立の東南隅に囲まれるようにして存在する。長軸240cm、短軸212cmを測る台形に近い不定形を呈し、深さ14cmと非常に浅いものである。北東隅で15号掘立の柱穴と僅かに干渉し、図上では掘立に先行するように思われるが、掘立を優先させるという意識が働いたものか今となっては自信がない。床面西側中央に焼土の広がりが認められ、周囲にはカマドの石材を思わせる石が散乱しており、特に焼土北西側に集中する。竪穴住居として認めることはできないが、何らかの厨房的役割を担う施設と思われる。平成7年度に調査された上林新庄遺跡でも、同時性は確定できないがやはり掘立の東南に同様な焼土を持つ不定形の土坑を覆うように位置する建物が2棟検出されており、掘立の土間に残された遺構のような在り方を示している。なお、補足ではあるが、両者とも周辺より鉄滓や轍の羽口片といった製鉄関連の遺物は確認されていないことを付け加えておく。中央の不定形なピットは焼土を切っており、後に掘り込まれたものである。遺物は2点が図化されている。5は胴部下半を欠く土師器の長胴甕である。外反する口縁端部を丸縁で仕上げ、口縁部内面にカキ目を残す。6は同じく胴部下半を



第61図 各土塙実測図（古代）



SK-01(1)、SK-02(2)、SK-03(3・4)、
SK-04(7)、SK-05(5・6)、SK-06(8)、
SK-16(9)、SK-11(10)、SK-12(11)、
SK-13(12・13)、SK-14(14)、SK-16(15・16)

第63図 土塙出土土器

欠く土師器の小甕である。外展する口縁端部に軽く面取りを施し、内外面ともにナデ調整を施す。

S K - 1 1 調査区南西側の2号竪穴住居東コーナー部に隣接して存在する。長軸242cm、短軸最大で109cm、深さは最も深い所で34cmを測り、平面プランは略三角形を呈する。遺物は1点実測されている。10は身の深い須恵器有台坏である。底部の大半を欠き、小片のため口径に不安を残す。高台より僅かに外へ張り出して直線的に伸びる口縁端部を洗練された先細りに仕上げる。

S K - 1 2 調査区南半のほぼ中央、8号竪穴住居の東に位置する。長軸203cm、短軸142cm、深さ32cmを測る。平面プランは略長方形を呈し、北東隅に自然礫が数点意図的に埋められたような形で見られる。11は短い口縁部が強く外傾し、端部を面取りして仕上げる土師器の小型甕である。内外面ともにハケ調整を行うが、外面は摩耗が著しい。

S K - 1 3 調査区南半、3号竪穴住居に接しており、S K - 0 1 を内包するような形で掘られており、検出の経緯については前述のとおりである。推定で長軸338cm、短軸317cm、深さ22cmを測り、平面プランは略円形を呈する。12は須恵器の無台坏である。外傾して伸びる体部は口縁端部で強く外反し、先端を先細りに仕上げる。13は同じく須恵器の蓋口縁部である。体部のほとんどを欠き、小片のため口径に不安を残す。

S K - 1 4 S K - 1 3 に北接しており、検出時の確認より S K - 1 3 に後続する。前述 (S K - 0 2) のとおり S K - 0 2 とは一体の同一遺構のようにもみられるが、検出時は特に意識しておらず確認はできなかった。14は小片のため判然としないが、推定される口径から壙であろう。体部上半は垂直ぎみに垂下し、下半に至り傾斜を増して丸底をなすタイプであろう。調整は内外面ともにカキ目を施す。

S K - 1 5 調査区ほぼ中央の西側に位置する。長軸368cm、短軸最大で129cm、深さ15cmを測る不定形を呈し、土坑というよりは浅い落ち込みのようなものであろう。遺物は2点図化されている。15は小片のため口径は判然としないが、須恵器の無台坏である。雑な回転ヘラ起こし痕を残す底部と体部の境が不明瞭であり、緩く外傾して立ち上がる口縁端部を外反させて先細りに仕上げる。16はつまみ部を欠く須恵器の蓋である。口縁を屈曲させて嘴状に仕上げる。天井部は回転ケズリの後ナデを行い、内面には一部自然釉が付着している。

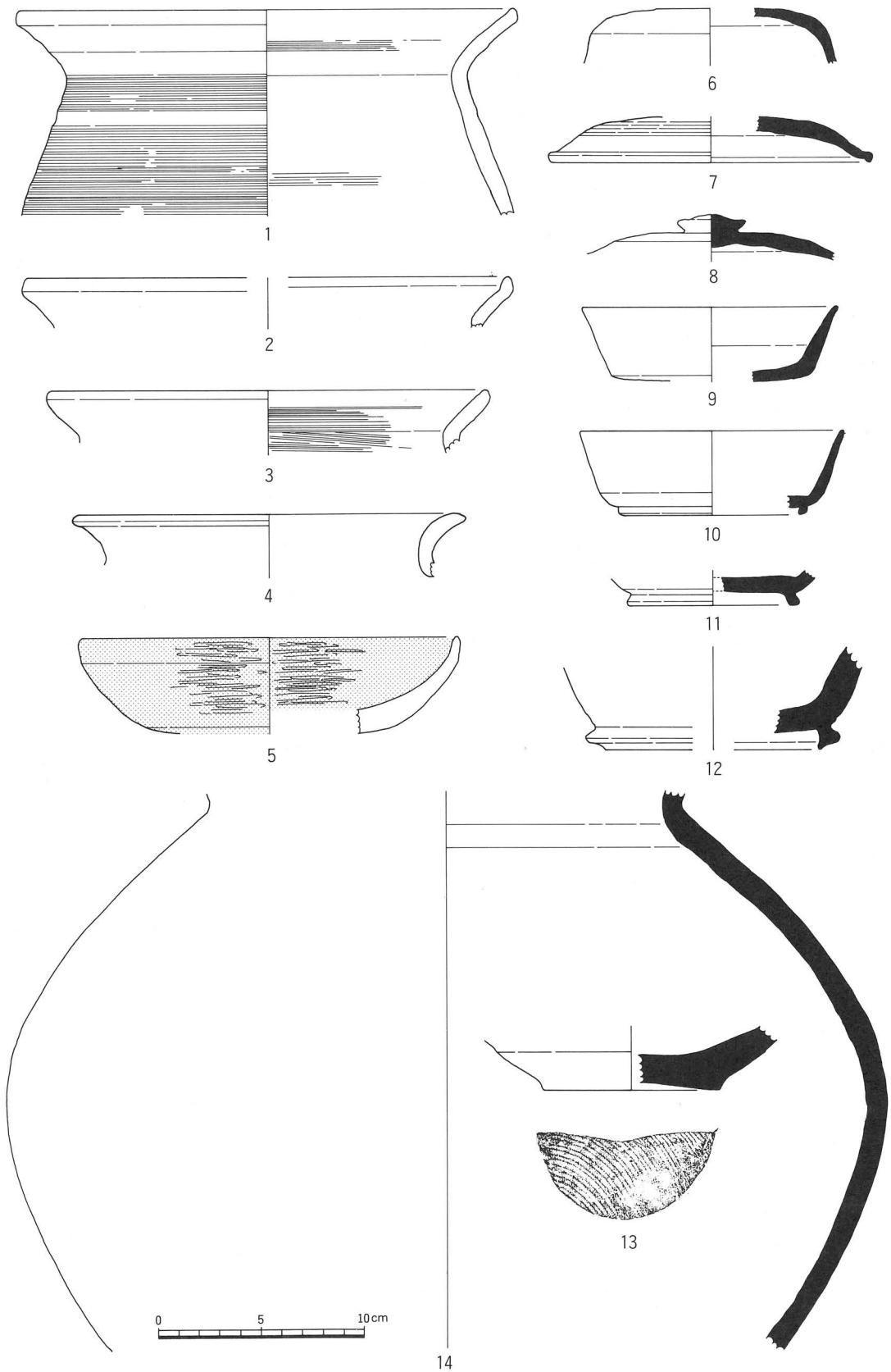
S K - 1 6 A区北側の西壁に接しており、東側ほぼ半分の検出である。現状で長軸178cm、深さ22cmを測り、短軸については不明であるが概ね橢円形を呈するものと思われる。遺物は1点図化されている。9は胴部下半分を欠く土師器の長胴甕である。胴部はあまり張らず、頸部から直線的に外展する口縁部は端部を先細りぎみに丸く仕上げる。外面はハケ調整の後上半から口縁部までに粗いナデを施し、内面は胴部下半をケズリ、上半をハケ調整の後やはり粗いナデで仕上げる。

(3). 包含層（土器類 第63図、土錘 第64図）

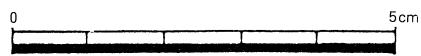
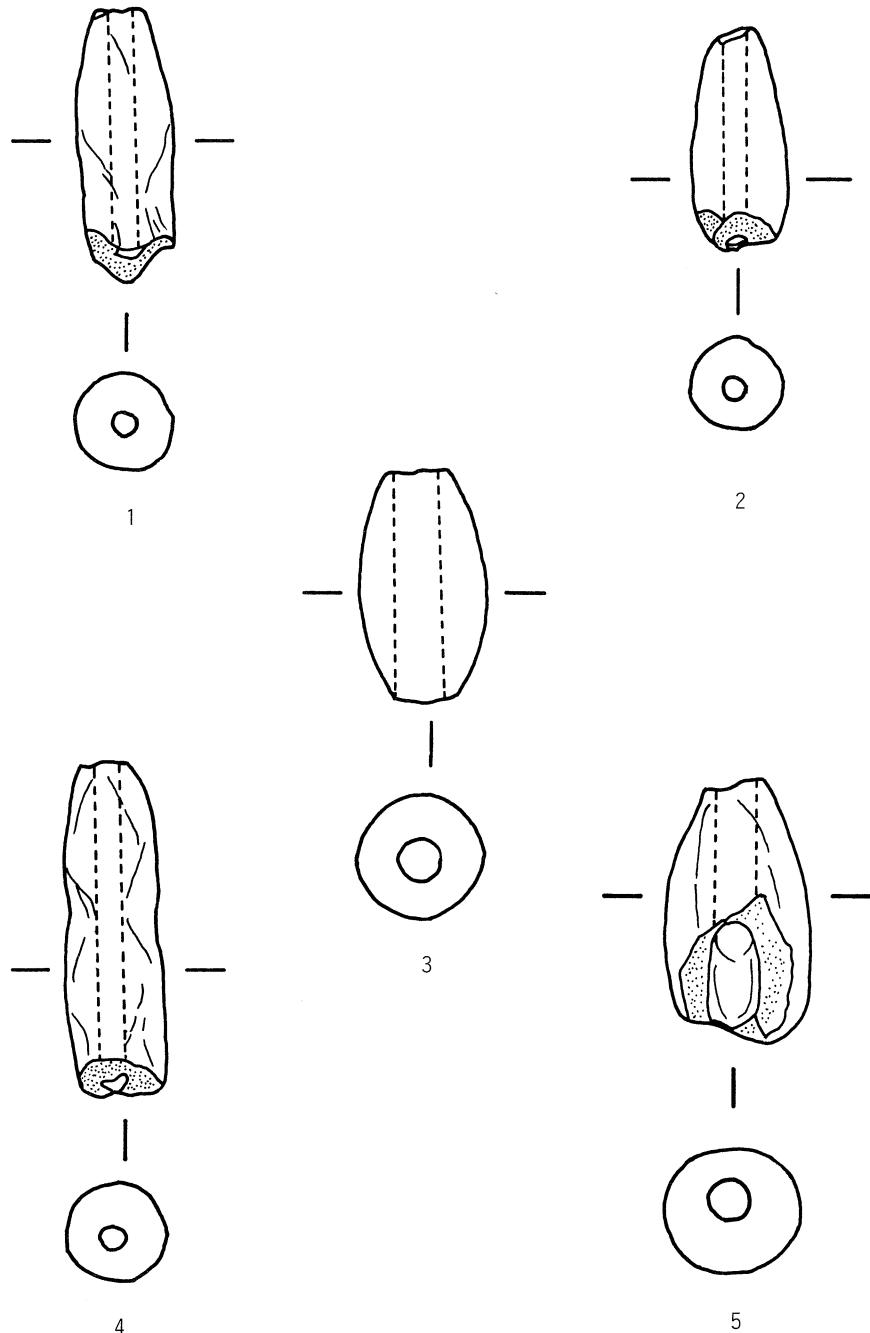
古代のものとして実測し得た遺物は土器類が14点、土錘が5点である。この内土錘についてはすべて9号竪穴住居の近隣より出土したものである。63図1は胴部下半を欠く土師器の長胴甕で

ある。頸部より直線的に外展する口縁部は端部を軽くつまみ上げぎみにして面取りを行う。胴部内面は摩耗が激しい。2～4は同じく長胴甕の口縁部である。2は小片のため口径に不安が残るが、短く外反する口縁部の端部を上方へつまみ上げ、ずんぐりとした断面指頭状の面取りを施す。3は短く外展する口縁部の端部をつまみ上げることなく軽く面取りを施す。4は強く外反する口縁部の端部を外に向かって先細りに仕上げ、上方に面取りを施す。5は赤彩土師器である。厚い底部から緩やかに内湾して立ち上がる口縁端部を垂直な先細りに仕上げる。6は古相を呈する須恵器の坏蓋である。天井部中央及び口縁端部を欠き、内外面ともに最終調整はナデで仕上げる。当遺跡からは6に明確に伴う時期の遺構は確認されていないが、遺物を検出したものは夥しい遺構群のほんの一部であり、全くの混入品とすることもできない。7・8は坏蓋である。7は天井部中央及びつまみ部を欠いており、端部を軽く嘴状に屈折させる。8は天井部及び擬宝珠つまみを残し口縁部を欠く。9は無台の坏である。底部中央を欠き、外傾して伸びる口縁部は端部を軽く外反させて先細りに仕上げる。10・11は有台坏である。10は高台以外の底部ほとんどを欠くが、直線的に外傾して伸びる口縁部は器壁が薄く、端部をすっきりとした先細りに仕上げる。内屈する高台は器体に対して小さく、貧弱である。11は高台部のみの残存である。器壁は厚くしっかりとしており、外展する高台は稜角的に仕上げる。12は長頸瓶もしくは広口瓶の底部である。外展する高台は断面嘴状を呈し、一旦大きく外へ張り出した後鋭く底端部へ続く。13は平底の壺底部であり、底部外面に静止糸切り痕を残す。14は胴部最大径42.8cmを測る壺の胴部である。頸部より上及び底部を欠いており、内外面共にやや摩耗しているが外面は縦方向の平行タタキの後ハケ状具による粗い回転ナデを施し、頸部近くは特に念入りにナデ消す。内面は頸部以下に同心円タタキの後胴部最大径付近より上に粗いナデを施し、やはり頸部近くは念入りにナデ消している。64図1～5は土錘である。いろいろなタイプがあるが、1・4・5は器表に整形時の痕跡をよく残し、2・3は丁寧にナデ消している。

註 (1) 石川県立埋蔵文化財センター 松山和彦氏御教示



第63図 包含層出土土器（古代）



第64図 包含層出土遺物(1/1)

第4章 出土遺物の検討

第1節 古墳時代以前の遺物

報文中でも再三述べていることであるが、当遺跡はその遺構密度に比べて遺物の出土が希薄であり、竪穴住居ですら数点を数えるのみである。したがってここでは古墳時代以前の土器を最も多く検出した1号溝を中心に、竪穴住居及び周辺の土器も加えて検討を加える。主体となる土器は溝出土資料ということであるが一見して層位的差異は認め難く、また看取される存続期間も極めて短いと予想されるため、全て一括のものとして以下の論を進めることとする。

1. 甕型土器

口縁形態により大別して有段口縁に擬凹線を施す既往のもの、同じく有段口縁で無紋のもの、所謂くの字口縁のもの、の3つに分類できる。資料の絶対数が少なく、また実測不能のものの中にも甕型土器が多く含まれるため図化されたものだけの比率を実数化して検証しようとは思わないが、北加賀月影期に特有の在り方に比べ、明らかに有段口縁無紋のものとくの字口縁のものが目に付く。加えて有段口縁を持つもののほとんどが内外面の段屈曲部の著しい弛緩もしくは消失という状況を見せることから月影期に若干後続するものと考えられ、このことは混入品として僅かに1点のみの出土であるが、9号竪穴住居より出土した庄内式の系譜にある甕の口縁部の存在（第39図6）や、2号竪穴住居（第16図16～19）、1号溝下層（第28図27～30）に見られる畿内系をはじめとした外来の系譜を引く土器群の一定量の出土からも肯定される。しかしながら御経塚ツカダ遺跡80-3住（1984吉田）に見られる所謂中型甕に齊一化し、他の法量が欠落した在り方はこの遺跡では看取されず、口径30cmを越えるような大型品も当然のごとく存在している。ツカダのような状況が他の数多連なる当該期の遺跡に見られないことと併せ、このような在り方は現状ではむしろツカダにのみ特有の状況と考えるのが自然であろう。

2. 壺型土器

出土した絶対量が少なく如何ともし難い。第29図36や第34図4に見られるような月影式の祭祀を象徴する細頸壺や、同時期の小型壺類（第16図25・第17図3等）も認められるが、第28図33に見られる肩部の波状文や第16図20・第29図37のごとく月影期以降外来系の影響のもと成立した在地種も存在する。混沌とした状況の中、在地種と外来種及びその影響を受けて成立する在地種との併存は上述の甕型土器と歩みをひとつにしている。

3. 高塙型土器 不不

やはり検証できる資料数は少ないものの、当遺跡の中にあっては最も良くその性格を表している。一部第29図38や47のように旧態を示すものも存在するが、月影式に一般的に見られるタイプがほとんど確認されておらず、小型高壙及び東海系（第29図39～41）や包含層資料であるが畿内と在地種の折衷形態（第35図6）で占められている。

4. 器台型土器

高坏以上に資料数が少なく、ここでは検討を控える。やや古相を示す第30図50・51や、包含層資料としてやや形骸化した装飾器台（第35図7）が見られる。

5. その他の土器

鉢類や小型土器類を一括する。既往の在地種として第12図3、第16図22・23、第26図4・6、第31図74、第34図1、第35図5などが見られる。これらはいずれも次の段階まで存続するものであり、新たに出現するものとして第16図26がある。

以上、簡単ではあるが古墳時代以前の遺物について器種別にまとめてみた。これらの様相は、一言で言うと「既往の在地種もしくはそれが形骸化した器種と、新たに出現またはその影響下に成立した器種との共存」として捉えられ、その要員は主に外来器種の流入と、それに伴う堅固な北陸（北加賀）型土器組成の崩壊と言うことができよう。ニシウラの地に最初に集落を営んだ人々は、非常に短い期間の内になんらかの理由で他へ移住することを余儀なくされた。それは古く見ても月影II式を上限とし、続く白江式古段階（5群）を中心とした時代、時間幅は竪穴住居1棟に立て替えの必要が生じる僅かの間であったと考えられる。

第2節 古代の遺物

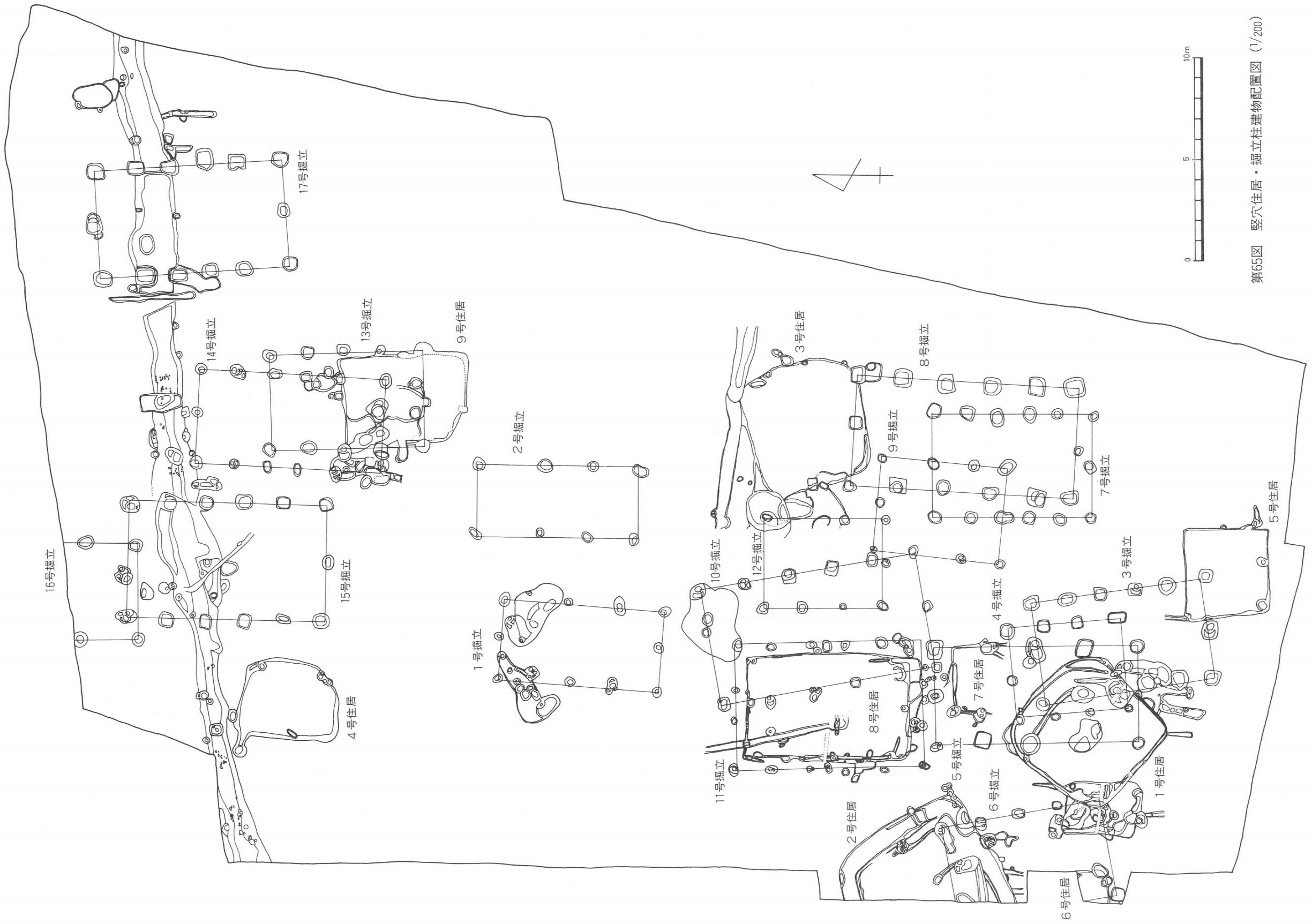
遺跡としての構成そのものでは明らかに中心的な時代であるが、前代にもまして資料数が少なく、検討には困難を極める。遺構単位はおろか全体でもセット関係（組成）を追えるものではなく、环1点同土、甕1点同土といった比較には限界があり、そもそも意味を持たないと思われる。ただ、第63図6を別にして比較的古相を見せる第39図2や第62図9を上限とし、田嶋編年⁽¹⁾II₃～V₁の時間幅で捉えておきたい。具体的には8世紀初頭から9世紀前半頃であろう。

註 (1) 田嶋 明人 「古代土器編年軸の設定」

シンポジウム『北陸の古代土器研究の現状と課題』 1988

石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

第65図 壁穴住居・掘立柱建物配置図 (1/200)



第5章　まとめ　－古代の集落構造－

古代の集落を構成する主要な遺構は竪穴住居跡5棟（ここでは10号住は除外する。）、掘立柱建物15棟が確認されている。しかし、そのそれれにおいて遺物から導き出される状況をもって或る時期の集落構成を考えることは、前述のとおりほぼ不可能に近く、もとより掘立柱建物についてはその柱穴より出土した遺物は抜き取り痕に付隨する等の確認がない限り、その上限を示すに過ぎない。したがって、ここでは掘立柱建物に見られる柱穴掘り方の特徴や大きさ（平面規模、プラン含む）、また常套手段ではあるがそれぞれの建物の軸方位による分類等から各単位時期の集落構成に迫ることを試みることとする。

まず、主要遺構のみを抽出した遺構全体図（第65図）を見ると、古代の竪穴住居及び掘立柱建物は全て南北に主軸を取った南北棟で構成されており、中央の古墳時代以前と思われる1・2号掘立を除けば大きく北群と南群に別れることがわかる。加えて、個々の建物の重複状況より少なくとも3回以上の建て替えが行われていることも確認される。この内竪穴住居4棟（5・7・8・9号住居）については、覆土の確認より順に3・5・10・13号掘立に先行しており、集落全体の景観から考えて直接切り合い関係はない6号住居についても、同様に掘立柱建物に先行すると考えた方が自然であろう。以下、各々の掘立柱建物を①主軸方位、②床面積、③桁行きと梁行きの対比、の3要素について検証して行くこととする。

①主軸方位による分類

A類……主軸を3～5°東へ振るもの。8・9・14号掘立がある。

B類……主軸がほぼ磁北を指すか、僅かに東（1°）へ振れるもの。7・12・15号掘立がある。

C類……主軸をやや西（1～4°）へ振るもの。5・11・13・16・17号掘立がある。

D類……主軸が大きく西へ振れるもの（6～10°）。3・4・6・10号掘立がある。

②床面積での分類

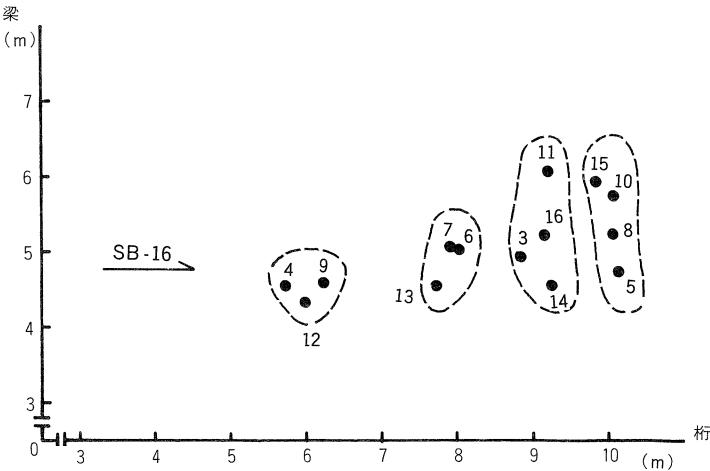
1類……30m²未満のもの。4・9・12号掘立がある。すべて平面プランは3×2間である。

2類……40m²～50m²のもの。当遺跡の主体をなす。3・5・6・7・13・14・17号掘立がある。5×2間、4×2間の建物が混在するが、5×2間の建物については桁行き柱間距離がいずれも160cm～170cm前後と短いものである。全形の知れない16号掘立も梁行きから推定して本類に含まれると思われる。

3類……50m²を越えるもの。8・10・11・15号掘立がある。5×2間の柱穴掘り方方形を基本とするが、11号掘立だけは5×3間で掘り方は不定な略楕円形を示す。

③桁行きと梁行きの対比

掘立柱建物を類型化するひとつの手法として、梁行きに対する桁行きの比率をもってするのが通有であるが（田嶋1983、楠1987、前田1990等）、当遺跡の建物群を分類する時、梁行き4m代後半から5m代前半のグループと、6m前後を測るグループに2分されむしろ桁行きにこそその差



附表1 (3) 要素分類

が明確に表れているように思える(附表1)。したがってここでは前者をI類、後者をII類として更に杭行きによりa～dの4類に細分する。

a類……杭行き6m前後のもの。4・9・12号掘立がある。すべて平面プランは3×2間であり、I類のみである。

b類……同じく8m前後のもの。6・7・13号掘立がある。すべてI類のみで構成される。

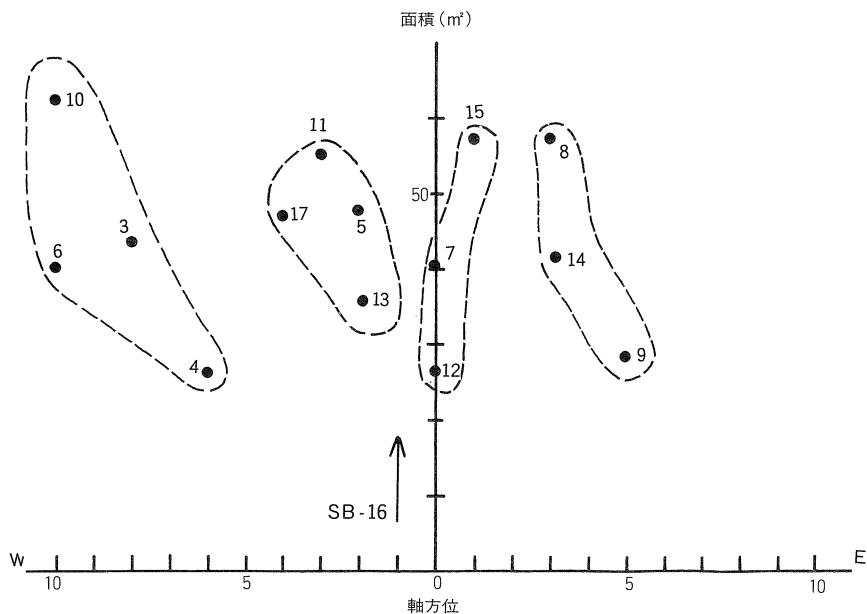
c類……同じく9m前後のもの。3・11・14・17号掘立がある。5×2間のI類を基本とし、11号のみII類の5×3間である。

d類……同じく10m前後のもの。I類の5・8号掘立、II類の10・15号掘立がある。

以上、各要素によりそれぞれの掘立柱建物を類別すると、以下の表のようになる。

No.	類別	No.	類別	No.	類別
3	D 2 I c	8	A 3 I d	13	C 2 I b
4	D 1 I a	9	A 1 I a	14	A 2 I c
5	C 2 I d	10	D 3 II d	15	B 3 II d
6	D 2 I b	11	C 3 II c	16	C 2 I □
7	B 2 I b	12	B 1 I a	17	C 2 I c

これらの要素の内、最も主体的な要素となり得ると予想される①を基本とし、②を合成したものが附表2である。ここから看取される縦軸による近似値を基本としてグルーピングを行い、各掘立柱建物に再度序列を施す、



附表2 ①+②要素分類

A群……8号(3Ⅰd)、14号(2Ⅰc)、9号(1Ⅰa)

B群……15号(3Ⅱd)、7号(2Ⅰb)、12号(1Ⅰa)

C群……11号(3Ⅱc)、5号(2Ⅰd)、17号(2Ⅰc)、13号(2Ⅰb)、(16号)

D群……10号(3Ⅱd)、3号(2Ⅰc)、6号(2Ⅰb)、4号(1Ⅰa)

となる。これらを遺構図上で示したものが第66~69図である。今、便宜的に②による類別3・2・1を順に大・中・小型建物とすると、A~D各群にはほぼバランス良く各々の大きさの建物が含まれることがわかる。これらの群の構成及び遺構図から看取される状況を端的に文章で表現すると、以下のようにまとめることができる。

A群……北群が準主屋級1棟で構成され、南群は主屋級1棟もしくは付属屋1棟で構成される。

ただし、南群においては8・9号掘立で重複が見られ、同時存在はない。時期的な差異については直接干渉していないためなお保留する。

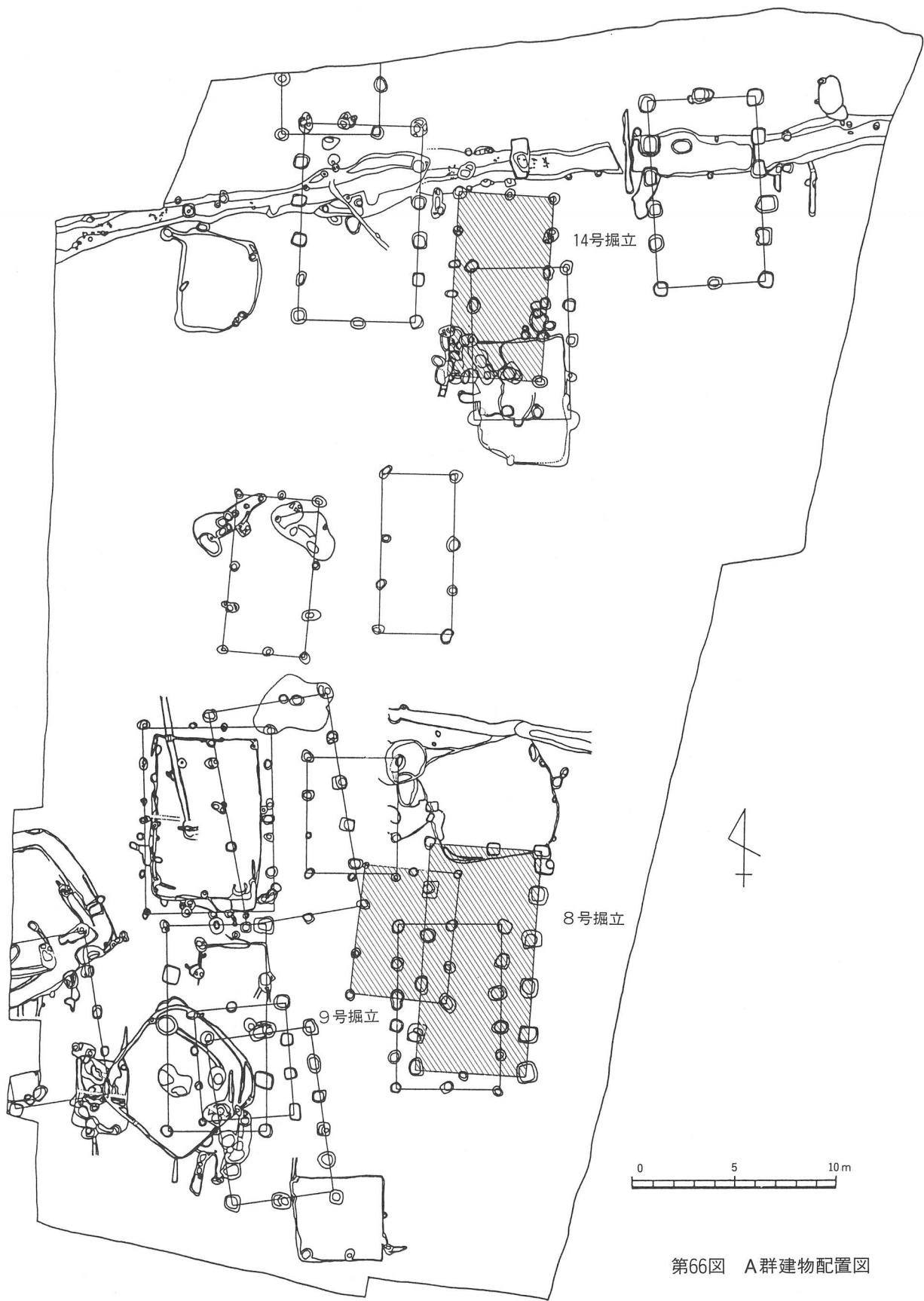
B群……北群に主屋級1棟、南群に規模のみから考えると付属屋2棟が存在する。しかし、7号掘立については大きさこそ付属屋のそれであるが、桁行き5間はここで言う準主屋級以上のものであり、ここでは主屋相当の機能を有するものと理解したい。なお、柱穴の切り合いから7号掘立は9号掘立に後続することが確認される。

C群……北群は準主屋級1棟と付属屋2棟で構成され、南群は主屋級1棟、準主屋級1棟で構成される。ただし南群の5号掘立と11号掘立は距離にして僅か0.6mしか離れておらず、同時に存在することは不可能であろう。床面積と梁行きでは11号掘立が勝っているが、桁行き及び柱穴掘り方に方形を採用するという点では5号掘立が優位にある。

切り合い等からはその先後関係を確認することはできないが、11号掘立が8号竪穴住居からの建て替えといった様相を強く見せることから、ここでは5号掘立に先行するものとして捉えておきたい。

D群……北群には本群に分類される建物は見られない。南群は主屋級1棟、準主屋級1棟、付属屋2棟で構成されるが、4号掘立と3号掘立は重複しており、基本的な配置は3棟であろう。これらの内10号掘立は東南角の柱穴において9号掘立の西桁第2柱穴と干渉しており、切り合いから9号掘立に後続している。また、3号掘立については北梁中柱が5号掘立の東桁第3柱穴と干渉しており、やはり5号掘立に後続することがわかる。7号掘立と比較すると桁行きでやや上回るもの、柱間の狭い5間構造は共通しており、同様に主屋級の機能を有するものと理解したい。

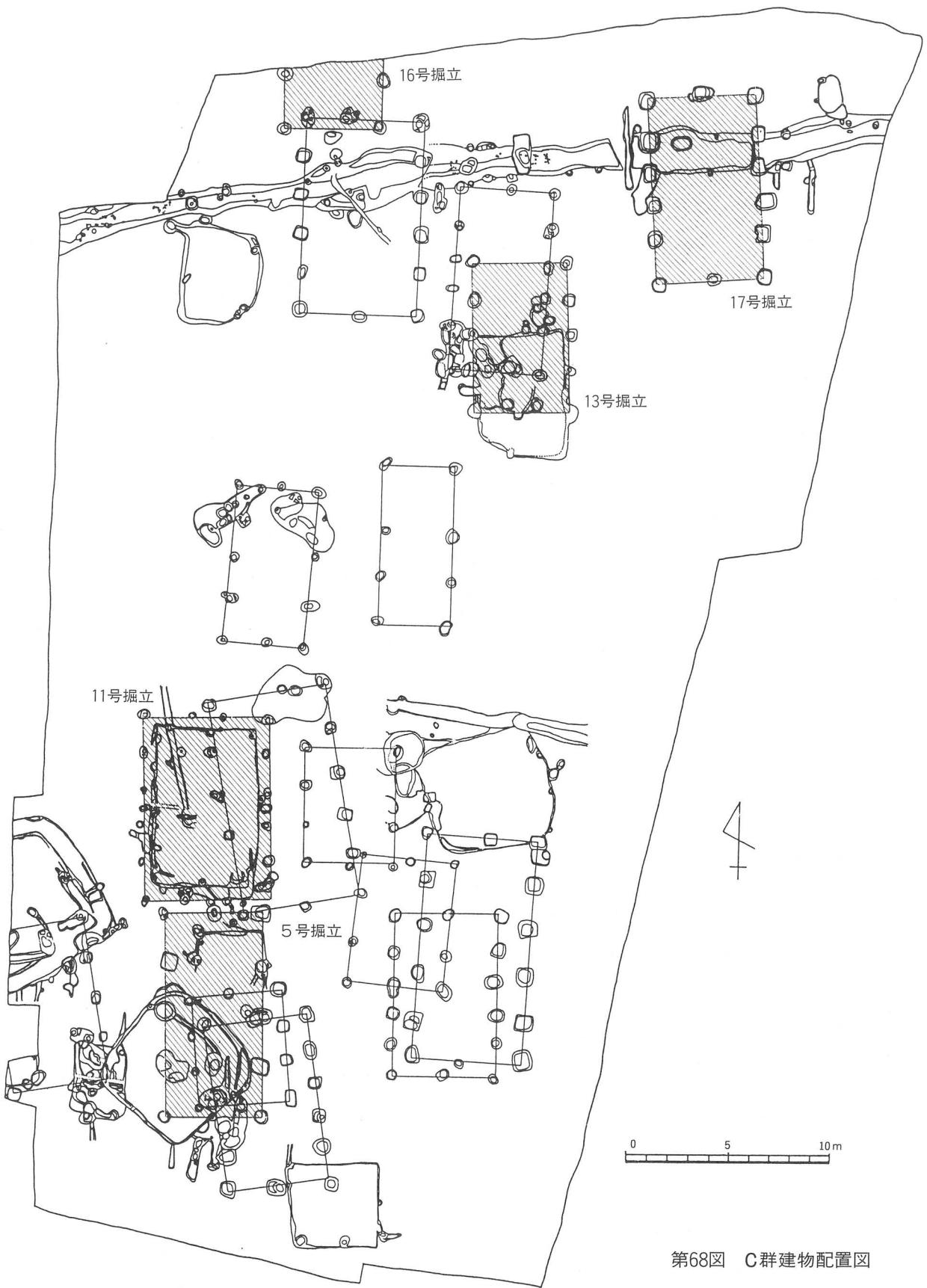
これらを総合して考えられることは、まず各群に分類された掘立柱建物の切り合い関係から最初にC群が建てられて後にA群が建てられており、A群に續いてB・D群が建てられていることである。B・D群に関しては直接的な切り合い関係が見られないため俄には判別し難い。しかし、前者に属する7号掘立と後者の3号掘立の間にはプランこそ奈良・平安時代に見られる通有の建物のそれであるが、桁柱間を5間としたところに機能的な意識の継承が窺われる。また、僅か1点ずつの出土ではあるが、12号掘立を構成するS P - O 9と15号掘立を構成するS P - 3 5に付随する須恵器（第58図2・14）は、6号掘立を構成するS P - O 6に付随する土師器甕（第59図1）に先行する様相を見せており、B・D群の先後関係はB群→D群と捉えられる。これらのことを総合し、当遺跡の古代における建物群の変遷は、竪穴住居で構成される段階→C群建物の段階→A群建物の段階→B群建物の段階→D群建物の段階の5期にわたるものと考えておきたい。次に個々の建物の評価についてであるが、上記A～D群の中で主屋級、準主屋級としたものは、いずれも梁行きに対する桁行きの比が2：1に近い値を示すものであり、庇を持たないもののこれまでの見解では初期莊園の庄屋跡の主屋級に匹敵する規模を有する（楠1987）。ただし、この問題については一人この遺跡をもってのみその性格を完結することは考えておらず、粟田遺跡も含め、ここから北へさらに1km余りにわたって展開する南部遺跡群全体の在り方の中で検討されるべきものである。その評価が北安田北遺跡に見られる「文献にあらわれない在地有力首長経営に係る庄園庄屋建物群」（前田1990）に匹敵するものかどうかは次年度以降報告予定のシリーズ中できらに検討していくこととするが、近年の発掘成果により蓄積された事実から5×3（2）間の掘立柱建物の普遍性とその再評価も必要な時期に来ていると言えよう。大方のご批判とさらなるご指導を仰ぎたい。



第66図 A群建物配置図



第67図 B群建物配置図



第68図 C群建物配置図



第69図 D群建物配置図

参考文献

石川考古学研究会・北陸古代土器研究会	『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』	報告編	1988年
楠 正勝 金沢市教育委員会	『金沢市千木ヤシキダ遺跡』		1987年
楠 正勝 金沢市教育委員会	『西念・南新保遺跡IV』		1996年
小嶋芳孝他(社)石川県埋蔵文化財保存協会	『粟田遺跡発掘調査報告書』		1991年
高橋由知 松任市教育委員会	『松任市源波遺跡II』		1997年
田嶋明人 石川県立埋蔵文化財センター	『漆町遺跡I』		1986年
田嶋明人 石川県立埋蔵文化財センター	『篠原遺跡』		1987年
田嶋明人 石川県立埋蔵文化財センター	『漆町遺跡II』		1988年
田嶋正和 加賀市教育委員会	『篠原シンゴウ遺跡発掘調査報告』		1983年
出越茂和 金沢市教育委員会	『金沢市千木ヤシキダ遺跡・II』		1991年
出越茂和 金沢市教育委員会	『上荒屋遺跡I』		1995年
北陸古代手工業生産史研究会	『北陸古代手工業生産史の研究』		1989年
前田清彦 松任市教育委員会	『松任市北安田北遺跡II』		1990年
前田清彦 松任市教育委員会	『松任市北安田北遺跡IV』		1992年
吉岡康暢 松任市教育委員会・石川考古学研究会	『東大寺領横江庄遺跡』		1983年
吉田 淳 野々市町教育委員会	『御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）		
	発掘調査報告書I』	1984年	

土 器 觀 察 表

図版 番号	土器 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	備 考
				口 頸 部	体 部	底 部				
1 2	1	甕	C・19.6 N・15.8	a・摩耗 b・摩耗			a・灰褐色 b・淡橙褐色	並	S-1	
	2	甕	C・13.6 N・10.2	a・ナデ b・ナデ			橙褐色	並	S-2	
	3	小型 土器	C・7.8 N・6.2	a・ミガキ b・ミガキ	a・摩耗 b・ミガキ		淡橙褐色	並	S-0 海綿骨針	
	4	土師質 土器	C・10.2	a・ミガキ b・ミガキ			淡橙褐色	並	S-1	内外赤彩 混入品
	5	高坏			a・ミガキ		橙褐色	並	S-1 海綿骨針	
	6	脚部	B・12.8			a・ミガキ b・ハケ・ナデ	淡橙褐色	良	S-1	
	7	脚部	B・16.8			a・ミガキ b・ケズリ・ナデ	淡橙褐色	並	S-0	
1 5	1	甕	C・17.2 N・15.0	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ		淡黄褐色	並	S-1 海綿骨針	床面
	2	甕	C・16.6 N・13.6	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		淡黄褐色	並	S-2	特殊P
	3	甕	C・18.0 N・14.6	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		淡褐色	並	S-2 海綿骨針	
	4	甕	C・20.0 N・16.4	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ナデ		淡褐色	並	S-1	
	5	甕	C・24.4 N・20.0	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ		淡橙褐色	並	S-1	床面
	6	甕	C・30.4 N・25.8	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		淡橙褐色	並	S-1 M-1	
	7	甕	C・16.6 N・13.8 W・22.6	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ・ナデ		淡褐色	並	S-2 M-1	
	8	甕	C・18.8 N・16.0	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ		淡褐色	並	S-1 海綿骨針	床面
	9	甕	C・15.2 N・12.9	a・ナデ b・ナデ			暗褐色	並	S-1	外側周溝
	10	底部	B・3.0			a・ハケ b・ケズリ	淡褐色	良	S-1 M-2 L-1	
	11	底部	B・2.7			a・ハケ b・ケズリ	暗褐色	並	S-1 M-1	
	12	底部	B・4.8			a・ハケ b・ハケ	淡橙褐色	並	S-1	特殊P
	13	甕	C・24.4 N・22.2	a・ナデ b・ナデ			淡橙褐色	良	S-1 M-1	床面
	14	甕	C・25.8 N・23.4	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ→ナデ		淡橙褐色	並	S-1	
	15	甕	C・27.0 N・23.6	a・ナデ b・ナデ			淡橙褐色	並	S-1 M-1	外側周溝
	16	甕	C・15.6 N・14.0	a・ナデ b・ナデ						
	17	甕	C・18.8 N・17.2	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ケズリ		淡褐色	並	S-2	

図版 番号	土器 番号	器種 形式	法量 (cm)	調整			色調	焼成	胎土	備考
				口頸部	体部	底部				
1 6	1 8	甕	C・20.0 N・17.4	a・ナデ b・ナデ					S-2	床面
	1 9	甕	C・18.4 N・17.0	a・ナデ b・ナデ			淡黄褐色	不良	S-1 海綿骨針	床面
	2 0	壺	C・19.0	a・摩耗 b・摩耗			橙褐色	不良	S-1 M-1	床面
	2 1	甕	C・13.2 N・11.2	a・ハケ	a・ハケ		暗褐色	並	S-1	
	2 2	鉢	C・12.0 W・14.8 B・8.0 H・13.7	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ハケ	a・ナデ b・ナデ	暗茶褐色	良	S-1	床面
	2 3	鉢	C・14.8 B・5.0 H・7.3	a・ハケ	a・ハケ		淡褐色	並	S-1	
	2 4	小型 土器	B・5.2	a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ b・摩耗		橙褐色	並	S-1	
	2 5	壺	C・11.8 N・8.6	a・ミガキ b・ミガキ			淡黄褐色	並	S-1	
	2 6	小型 土器	C・8.2 N・6.9 W・7.2	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ハケ		淡橙褐色	良	S-1	床面
	2 7	底部				a・ミガキ b・ミガキ	淡橙褐色	良	S-0	赤彩文様 床面
	2 8	高坏			a・ハケ→ミガキ b・剥離		暗褐色	並	S-2	内外赤彩 床面
	2 9	高坏			a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ	明茶褐色	並	S-1 海綿骨針	
	3 0	高坏				a・ミガキ b・ハケ	橙褐色	並	S-1	
1 7	3 1	高坏				a・ミガキ b・ナデ	淡黄褐色	並	S-1	
	3 2	脚部		a・ミガキ b・ケズリ			淡橙褐色	並	S-1 赤色粒	
	3 3	須恵器 坏	C・12.0 B・10.0 H・2.4	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ	b・ナデ	灰色	並		小片 混入品
	1	甕	C・17.6 N・14.4	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		茶褐色	並	S-1 M-1	
	2	甕	C・17.0 N・15.0	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ					
	3	壺	C・13.0 N・10.4 W・13.4	a・ナデ b・ナデ	a・ヘラ状工具横ナデ b・ケズリ→ナデ→ミガキ		橙褐色	良	S-1	
	4	底部	B・4.6			a・ハケ b・ケズリ		並	S-2 海綿骨針	
1 7	5	底部	B・2.5			a・ハケ b・ケズリ		並	S-1 M-1	
	6	高坏			a・ミガキ b・ミガキ		明茶褐色	並	S-1 M-1	床面
	7	高坏			a・ミガキ b・ミガキ		橙褐色	並	S-1	二次被熱 痕あり

図版 番号	土器 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	備 考
				口 頸 部	体 部	底 部				
1 7	8	甕	C・18.0 N・15.7	a・ナデ b・カキ目			淡橙褐色	良	S-1	住居内 ピット
	9	甕	C・29.8 N・24.4	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		暗茶褐色	並	S-1 M-1 L-1	床面
	10	須恵器 有台坏	B・6.0		a・ナデ b・ナデ		灰 色	並		住居内 ピット
2 1	1	甕	C・18.0 N・14.8	a・摩耗 b・摩耗						
	2	甕	C・17.2 N・14.4	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ケズリ→ナデ		淡褐色	並	S-1	
	3	甕	C・18.4 N・13.8	a・ナデ b・ナデ		b・ケズリ→ナデ	暗茶褐色	良	S-0	
	4	椀	C・17.6	a・ミガキ b・ミガキ						内外赤彩
	5	土師質 土器	C・8.4	a・摩耗 b・摩耗	a・摩耗 b・摩耗	a・摩耗 b・摩耗	淡黄褐色	良	S-0	
	6	須恵器 坏蓋	C・16.0	a・ナデ b・ナデ			暗灰色	並	S-1	
2 3	1	甕	C・16.0 N・12.8	a・ナデ b・ナデ	b・ハケ		暗褐色	並	S-1 SP-18 1号掘立	
	2	甕	C・20.0 N・16.8	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ハケ		淡橙褐色	並	S-1 SP-18 1号掘立	
	3	高坏			a・ミガキ b・剝離		赤褐色	並	S-2 SP-18 1号掘立	
	4	甕	C・22.0 N・19.6	a・ナデ b・ナデ			淡褐色	良	S-1 SP-17 1号掘立	
2 6	1	甕	C・17.4 N・15.4	a・ナデ b・ナデ			暗褐色	不良	S-1 M-2 海綿骨針	
	2	甕	C・18.2 N・15.8	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		明茶褐色	良	S-1	
	3	底部	B・2.8			a・ハケ→ナデ b・ケズリ	黄褐色	良	S-1 M-1	
	4	小型 土器	C・10.6 N・8.6 W・9.1 B・1.6 H・10.5	a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ	a・淡橙褐色 b・橙褐色	良	S-1	
	5	甕	C・18.0 N・15.4	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		淡橙褐色	並	S-2 M-1	
	6	小型 土器	C・11.5 B・4.8 H・5.7	a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ b・ミガキ	橙褐色	良	S-1	
	7	土師質 土器	C・11.4				淡黄褐色	良	精練	黒褐色 付着物
	8	高坏	B・11.8			a・ミガキ b・ナデ	淡橙褐色	良	S-2	外面 赤彩
	9	高坏	B・14.0			a・ミガキ b・ハケ→ナデ	橙褐色	並	S-1 海綿骨針	
	10	脚部	B・14.0			a・ミガキ b・ハケ→ナデ	橙褐色	良	S-1	

図版 番号	土器 番号	器種 形式	法量 (cm)	調整			色調	焼成	胎土	備考
				口頸部	体部	底 部				
2 6	1 1	甕	C・29.4 N・25.6 W・34.0	b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		a・淡橙褐色 b・茶褐色	並	S-2 M-2	
2 7	1 2	甕	C・15.0 N・12.2	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ		淡黃褐色	良	S-2 M-1	
	1 3	甕	C・16.6 N・13.6	a・ナデ b・ナデ			淡橙褐色	並	S-1 M-2	
2 8	1 4	甕	C・16.2 N・12.2	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ		淡黃褐色	良	S-1	
	1 5	甕	C・17.6 N・14.2	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ		淡黃灰色	良	S-2	
2 9	1 6	甕	C・17.2 N・14.0 W・22.4	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		橙褐色	並	S-1 M-1	
	1 7	底部	B・4.0			a・ハケ b・ケズリ	茶褐色	並	S-1 M-2	
3 0	1 8	底部	B・5.5			a・ハケ b・ケズリ→ナデ	黃褐色	良	S-1 M-2	
	1 9	甕	C・15.8 N・13.0 W・28.8	a・ナデ b・ナデ	a・摩耗 b・ケズリ		a・淡褐色 b・茶褐色	良	S-2 M-1 L-1	
3 1	2 0	甕	C・14.8 N・12.4	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		淡茶褐色	並	S-1 M-1 L-1 海綿骨針	
	2 1	甕	C・17.6 N・14.2	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ		茶褐色	良	S-1	
3 2	2 2	甕	C・18.4 N・15.4	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ナデ		淡橙褐色	良	S-1 M-1 海綿骨針	
	2 3	甕	C・19.4 N・15.8	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		橙褐色	並	S-2	
3 3	2 4	甕	C・29.0 N・24.6	a・ナデ b・ナデ			明茶褐色	良	S-1 M-1 赤色粒	
	2 5	甕	C・27.2 N・24.7	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		a・橙褐色 b・灰褐色	並	S-2 M-1	
3 4	2 6	甕	C・19.2 N・18.4	a・ハケ b・ハケ	a・ハケ b・ケズリ		茶褐色	良	S-1 M-2 L-1	
	2 7	甕	C・14.6 N・12.8	a・ナデ b・ナデ			淡黃褐色	良	M-1	
3 5	2 8	甕	C・15.0 N・13.2	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		淡褐色	並	S-1 M-2	
	2 9	甕	C・16.0	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ→ナデ		淡褐色	良	S-1	
3 6	3 0	甕	C・17.4 N・15.2 W・18.0 B・2.1	a・ハケ b・ケズリ	a・ハケ b・ケズリ	a・ハケ b・ケズリ	a・橙褐色 b・暗灰褐色	良	S-1 M-2	
	3 1	壺	C・9.4 N・8.0	a・摩耗 b・ハケ→ナデ	a・ハケ b・ハケ→ナデ		淡黃褐色	並	S-1	内外赤彩

図版番号	土器番号	器種形式	法量(cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	備 考
				口 頸 部	体 部	底 部				
2 8	3 2	壺	C・不明 N・7.8	a・ハケ b・ハケ→ナデ			黄褐色	並	S-1	
	3 3	壺	N・22.0 B・6.0		a・摩耗 b・摩耗	a・ハケ b・ハケ	橙褐色	並	S-1 M-2	
	3 4	小型土器	N・3.4 W・8.0		a・ミガキ b・ナデ		橙褐色	並	S-1 M-1	
	3 5	鉢?	B・9.4		a・ミガキ b・ナデ	a・ミガキ b・ミガキ	a・黄褐色 b・赤褐色	良	S-1 海綿骨針	外面赤彩
2 9	3 6	細頸壺	C・8.8 N・4.2 W・13.9	a・ミガキ b・ナデ	a・ミガキ b・ナデ		a・淡橙褐色 b・橙褐色	良	S-1	外面赤彩
	3 7	壺	C・16.0 N・10.2	a・ミガキ b・ミガキ			橙褐色	並	S-1 M-2	
	3 8	高坏	C・30.4 (推定)	a・摩耗 b・摩耗			橙褐色	不良	S-1 M-2 L-1	
	3 9	高坏	C・20.0	a・ミガキ b・ハケ→ナデ			淡橙褐色	良	S-1	
	4 0	高坏	C・22.0	a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ b・ミガキ		橙褐色	良	M-1 赤色粒	
	4 1	高坏	C・22.0	a・摩耗 b・ミガキ	a・摩耗 b・摩耗		橙褐色	不良	S-0 海綿骨針	
	4 2	高坏	C・9.5	a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ b・ミガキ		赤褐色	良	S-1 M-1	内外面赤彩
	4 3	高坏	C・12.6	a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ b・ミガキ		赤褐色	良	S-0 海綿骨針	内外面赤彩
	4 4	高坏			a・ミガキ b・摩耗		橙褐色	不良	S-0	
	4 5	高坏	B・15.0			a・ミガキ b・ハケ	橙褐色	良	S-2	外面赤彩
3 0	4 6	脚部	B・12.8			a・ミガキ b・ナデ	橙褐色	不良	S-1 M-1 L-1	
	4 7	脚部	B・12.0			a・ミガキ b・ハケ	淡橙褐色	良	S-1 M-1 赤色粒	
	4 8	脚部	B・11.6			a・ミガキ b・ナデ	a・橙褐色 b・淡橙褐色	良	S-1	
	4 9	器台	W・3.1	a・ミガキ			淡橙褐色	良	S-2	外面赤彩
	5 0	高坏	C・20.5	a・ハケ→ミガキ b・ミガキ	a・ハケ→ミガキ b・ミガキ		明茶褐色	良	S-1 L-1	70と同一個体の可能性あり
	5 1	器台	B・10.4			a・ミガキ b・ミガキ	橙褐色	良	S-1	
	5 2	器台	B・10.0			a・ミガキ b・ナデ	a・橙褐色 b・赤褐色	並	S-1 M-2 L-1	外面赤彩
	5 3	甕	C・16.0 N・13.2	a・ナデ b・ナデ			淡黄褐色	並	S-2	
	5 4	甕	C・16.6 N・12.4	a・ナデ b・ナデ			a・橙褐色 b・暗灰色	不良	S-2 M-1	
	5 5	甕	C・19.2 N・16.0	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		淡橙褐色	並	S-2 M-1	

図版 番号	土器 番号	器種 形式	法量 (cm)	調整			色調	焼成	胎土	備考
				口頸部	体部	底 部				
3 0	5 6	甕	C・31.6 N・26.6	a・ナデ b・摩耗	a・ハケ b・ケズリ		橙褐色	並	S-2 M-1	
	5 7	甕	C・13.2 N・10.2	a・ナデ b・ナデ			茶褐色	並	S-1	
	5 8	甕	C・13.8 N・11.2	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ→ナデ		茶褐色	不良	S-1 M-2 海綿骨針	
	5 9	甕	C・16.0 N・14.1	a・ナデ b・ナデ	b・ハケ		a・淡橙褐色 b・明茶褐色	並	S-1 M-1 海綿骨針	
	6 0	甕	C・18.4 N・15.0	a・ナデ b・ナデ			茶褐色	良	S-1	
	6 1	甕	C・20.0 N・15.8	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ		明茶褐色	良	S-1	
	6 2	甕	C・23.4 N・20.1	a・ナデ b・ナデ			淡黃褐色	良	S-1 海綿骨針	
	6 3	底部	B・3.8			a・ハケ b・ハケ		並	S-2 M-1	
	6 4	甕	C・26.8 N・24.4	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ケズリ		a・茶褐色 b・黒褐色	並	S-1 M-2	
3 1	6 5	壺	C・16.8	a・ハケ b・ミガキ			暗褐色	不良	S-1	
	6 6	壺	C・8.4 N・8.2	a・ミガキ b・ケズリ→ナデ	a・ハケ→ミガキ b・ナデ		淡褐色	良	S-2	
	6 7	甕	C・29.6	a・ナデ b・ミガキ			淡橙褐色	良	S-0 海綿骨針	
	6 8	底部	B・5.2			a・ミガキ b・ナデ	茶褐色	良	海綿骨針	
	6 9	脚部				a・ミガキ b・ナデ	淡橙褐色	良	S-1	
	7 0	脚部	B・14.0			a・ミガキ b・ナデ	明茶褐色	良	S-1	50と同一個体の可能性あり
	7 1	脚部	B・16.4			a・ミガキ b・ハケ	淡橙褐色	良	S-1	外面赤彩
	7 2	甕	C・24.0 N・20.6	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		明茶褐色	良	S-1 M-2 L-1	
	7 3	甕	C・20.4 N・16.2	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ→ミガキ		明茶褐色	並	S-1 M-1	
3 2	7 4	小型 土器	C・8.8 B・4.6 H・4.8	a・ミガキ b・ナデ	a・ミガキ b・ナデ	a・ミガキ b・ナデ	茶褐色	良	S-1	
	7 5	甕	C・30.6 N・26.8	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		淡褐色	並	S-2 M-1	
6 2	7	甕	C・17.4 N・13.2	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		茶褐色	並	S-1 赤色粒 04	
	8	甕	C・19.8	a・ナデ b・ナデ			淡褐色	良	S-1 M-1 06	
3 4	1	小型 土器	C・11.2 N・8.0	a・ナデ				並	S-1 SP-03	
	2	甕	C・16.0 N・13.8	a・ナデ b・ナデ			茶褐色	並	S-1 M-1 04	

図版 番号	土器 番号	器種 形式	法量 (cm)	調整			色調	焼成	胎土	備考
				口頸部	体部	底 部				
3 4	3	甕	C・15.8 N・13.2	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		茶褐色	並	S-1 石英	SP-04
	4	細頸壺	C・8.6	a・ミガキ b・ケズリ			赤褐色	並	S-1	SP-04 外面赤彩
	5	器台			a・摩耗 b・摩耗		橙褐色	並	M-1 海綿骨針	SP-05
	6	高坏			a・ミガキ		淡橙褐色	並	S-2	SP-10
	7	脚部	B・13.5			a・ミガキ b・ミガキ	明茶褐色	並	S-1 海綿骨針	SP-14
	8	甕	C・11.0 N・8.9	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ		淡褐色	並	S-2	SP-19
	9	甕	C・22.4 N・18.6	a・ナデ b・ナデ			橙褐色	並	S-1 海綿骨針	SP-20
	10	高坏				a・ミガキ b・ナデ	淡橙褐色	良	S-1	SP-21
	11	甕	C・16.0 N・12.2	a・ナデ b・ナデ			淡黄褐色	並	S-1 M-1	SP-30
	12	甕	C・17.8 N・16.6	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ→ナデ		茶褐色	並	S-1 M-1 赤色粒	SP-34
	13	底部	B・3.1			a・ハケ	a・橙褐色 b・灰褐色	並	S-2 M-1	SP-36
3 5	1	甕	C・32.0 N・26.6	a・ナデ b・ナデ			茶褐色	並	S-1 M-1	
	2	甕	C・16.6 N・13.6	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ		淡褐色	良	S-1	
	3	甕	C・16.8 N・15.0	a・ナデ b・ナデ			橙褐色	並	S-1 M-1 海綿骨針	
	4	椀型 土器	C・13.0 B・6.0 H・4.5	a・ミガキ b・ミガキ			淡橙褐色	良	S-1	
	5	底部穿 孔土器	B・1.4			a・ハケ b・ケズリ	橙褐色	並	S-1 M-1	孔径10mm
	6	高坏				a・ミガキ b・ミガキ	橙褐色	並	S-1 M-1 L-1	内外赤彩
	7	器台				a・ミガキ b・ミガキ	淡橙褐色	良	S-1	内外赤彩
	8	高坏	C・23.0	a・ミガキ b・摩耗			明茶褐色	良	S-1 海綿骨針 赤色粒	
3 7	1	坏	C・13.3 B・7.3 H・3.8	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ	a・回転ケズリ →ナデ b・ナデ	淡黄灰色	不良		
	2	坏蓋	C・16.5	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ	a・回転ケズリ →ナデ b・ナデ	淡黄灰色	不良		内面黒褐色 付着物
	3	坏蓋	C・16.6	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ	a・回転ケズリ →ナデ b・ナデ	灰色	良		重ね焼き痕 あり

図版番号	土器番号	器種形式	法量(cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	備 考
				口 頸 部	体 部	底 部				
3 7	4	甕	C・17.6 N・16.2 W・19.8	a・ナデ b・ナデ	a・カキ目 b・カキ目		淡橙褐色	並	S-2 赤色粒	
	5	甕	C・14.2 N・12.8 W・15.0	a・ナデ b・ナデ	a・カキ目 b・カキ目		淡橙褐色	並	S-0	
	6	蓋	C・16.0	a・ナデ b・ナデ	a・回転ケズリ b・ナデ		灰色	良	S-0	
3 9	1	甕	C・23.0 N・19.8	a・ナデ b・ナデ	a・カキ目 b・カキ目		a・橙褐色 b・淡黄褐色	良	S-0	
	2	甕	C・23.4 N・19.8	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ハケ		淡褐色	並	S-1	
	3	甕	C・13.4 N・11.2	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ		暗褐色	並	S-1	
	4	甕	C・13.6 N・12.8	a・ナデ b・ナデ	a・カキ目		淡褐色	並	S-1	
	5	底部	B・10.8			a・ナデ b・ナデ	橙褐色	良	S-0	内外赤彩
	6	甕	C・16.4 N・12.6	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		明茶褐色	並	S-2 海綿骨針	床面
	7	壺	C・11.0 N・9.8	a・ハケ b・ナデ→ミガキ			淡褐色	並	S-1 海綿骨針	
	8	壺	N・8.4	a・ナデ b・ナデ			橙褐色	並	S-1 海綿骨針	
	9	蓋		a・ミガキ b・ミガキ			a・淡褐色 b・暗褐色	並	S-1	外面赤彩 内面黑色炭化物
	10									
4 1	1	坏	C・11.0 B・5.0 H・4.4	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ		灰色	並	S-1	
	2	坏	C・13.0 B・8.6 H・3.5	a・ナデ b・ナデ		a・ナデ	灰色	良	S-1	床面
	3	坏	C・13.6 B・8.0 H・3.3	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ	灰色	良	S-1	床面
	4	坏	C・15.0 B・9.4 H・4.1	a・ナデ b・ナデ			暗灰色	並		
	5	坏	B・8.0			a・ナデ b・ナデ	灰色	並	S-1	
	6	鉢	C・28.0 W・29.4	a・ナデ b・ナデ	b・ナデ		灰色	並	S-1	
	7	甕	C・23.2 (推定)	a・ナデ b・ナデ			茶褐色	並	S-1 M-1	床面
	8	甕	C・13.8 N・12.6 W・14.1	a・ナデ b・ナデ	a・カキ目		淡橙褐色	良	S-1	床面
	9	甕	C・12.6 N・11.7	a・ナデ b・ナデ	a・剥離 b・ハケ		淡褐色	並	S-1	
	10	甕	C・14.6	a・ナデ b・ナデ			暗褐色	並	S-1	

図版 番号	土器 番号	器種 形式	法量 (cm)	調整			色調	焼成	胎土	備考
				口頸部	体部	底部				
4 1	1 1	甕	C・16.4 N・13.6	a・ナデ b・ナデ	b・ケズリ		茶褐色	並	S-1	
	1 2	土錘	L・2.9 W・1.7					並		孔径6mm 7.1g
	1 3	土錘	L・3.2 W・1.7					並		孔径6mm 7.9g
	1 4	土錘	L・2.9 W・1.6					並		孔径6mm 7.0g
	1 5	土錘	L・4.6 W・2.3					良	S-0	孔径6.5mm 21.0g
	1 6	土錘	L・4.7 W・2.3					良	S-0	孔径6mm 20.5g
	1 7	土錘	L・4.8 W・2.1					良	S-0	孔径6.5mm 16.9g
	1 8	土錘	L・5.0 W・1.9					並		孔径6mm 15.3g
	1 9	土錘	L・5.4 W・2.2					並		孔径8mm 22.3g
5 8	1	壺	N・11.2	a・ナデ	b・ナデ		灰色	良		外面自然釉 SP-01
	2	盤	C・14.0 B・9.6 H・2.6	a・ナデ b・ナデ		a・ナデ b・ナデ	灰色	並	S-2	SP-09
	3	蓋	C・11.0	a・ナデ b・ナデ			灰色	並	S-1	SP-11
	4	壺	B・7.6			a・摩耗 b・摩耗	灰色	並	S-2 M-1	外面自然釉 SP-13
	5	蓋	C・13.4	a・ナデ b・ナデ	a・ケズリ b・ナデ		灰色	並	S-2	SP-15
	6	壺	C・13.6	a・ナデ	a・ナデ	a・ナデ	青灰色	良		SP-
			B・9.2 H・3.7	b・ナデ	b・ナデ	b・ナデ				16
	7	壺	C・12.0	a・ナデ b・ナデ			灰色	並	S-0	SP-22
	8	壺	C・10.4 B・6.6 H・3.7	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ	a・ケズリ b・ナデ	a・暗灰色 b・暗青灰色	並	S-1	SP-23
	9	壺	B・8.6		a・ナデ b・ナデ		暗灰色	並	S-1	外面自然釉(沸) SP-24
	10	壺	C・13.8 B・9.4 H・3.9	a・ナデ b・ナデ		a・ナデ b・ナデ	灰色	並		SP-25
	11	蓋	C・13.3	a・ナデ b・ナデ			暗灰色	良	S-2	SP-27
	12	壺	B・8.2			a・ナデ b・ナデ	青灰色	並	S-2	SP-29
	13	蓋	C・16.4	a・ナデ b・ナデ			淡黃灰色	不良	S-1	SP-33
	14	壺	B・11.0		a・ナデ b・ナデ		灰色	並		SP-35

図版番号	土器番号	器種形式	法量(cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	備 考
				口 頸 部	体 部	底 部				
5 8	1 5	坏	C・11.8 B・8.2 H・4.2	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ→ケズリ	黄灰色	並	S-1	SP-37
	1 6	蓋	C・14.8	a・ナデ b・ナデ	a・回転ケズリ		灰色	並	S-1	SP-38
5 9	1 7	甕			a・平行タタキ b・同心円タタキ		a・自然釉 b・灰色	良	M-1	SP-39
	1 8	高坏	C・19.4	a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ b・ミガキ		a・赤褐色 b・暗赤褐色	並		SP-39 内外面赤彩
5 9	1 9	坏	C・11.4 B・8.6 H・2.9	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・雜なナデつけ	淡青灰色	並	S-2	SP-41 重ね焼痕
	2 0	坏	B・10.9			a・回転ヘラケズリ b・ナデ	a・淡青灰色 b・暗青灰色	並		SP-42
6 0	2 1	坏	C・11.2 B・7.6 H・4.2	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ		淡青灰色	並		SP-43
	2 2	蓋			a・回転ケズリ b・ナデ		灰色	並	S-1	SP-43
6 0	2 3	蓋	C・12.0 H・2.1	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ		a・暗灰色 b・淡灰色	並	M-1	SP-44
	1	甕	C・13.0 N・11.9	a・ナデ b・ナデ			暗褐色	良	S-1	SP-06
6 0	2	甕	C・13.6 N・12.0	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ハケ		淡褐色	並	S-1	SP-08
	3	甕	C・22.6 N・19.3	a・ナデ b・カキ目			淡黃褐色	良	S-1	SP-26
6 0	4	壺	C・29.0	a・ナデ b・ナデ			明茶褐色	良	S-1	SP-28
	5	甕	C・20.3	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ		橙褐色	良	M-1	SP-28
6 0	6	甕	C・13.4 N・11.4	a・ナデ b・ハケ	a・ハケ b・ナデ		橙褐色	並	S-1	SP-31 海綿骨針
	7	長胴甕	C・22.8 N・19.6	a・ナデ b・カキ目	a・カキ目 b・カキ目		淡橙褐色	並	S-1	SP-32
6 2	8	内黒椀	B・5.9			a・ナデ b・ミガキ	a・橙褐色 b・黒褐色	並	赤色粒	SP-45
	9	赤彩椀	C・13.8	a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ b・ミガキ		a・橙褐色 b・淡橙褐色	並		SP-46
6 2	10	鉄製品	L・6.5 W・2.2 D・1.4							SP-40 17.9g
	1	坏	C・13.6	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ		灰色	並	S-1	SK-01
6 2	2	蓋	C・15.7	a・ナデ b・ナデ			灰色	並	S-2	SK-02
	3	甕	C・14.6 (推定)	a・摩耗 b・摩耗			茶褐色	並	S-2	SK-03 海綿骨針
6 2	4	底部			a・ナデ・ケズリ b・ナデ		青灰色	良	S-1	SK-03

図版番号	土器番号	器種形式	法量(cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	備 考
				口 頸 部	体 部	底 部				
6 2	5	甕	C・15.0 N・13.2 W・15.4	a・ナデ b・カキ目	a・カキ目 b・ナデ		黄褐色	並	S-1 海綿骨針	SK-05
	6	甕	C・12.8 N・11.2 W・11.9	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ		a・橙褐色 b・褐色	並	S-1	SK-05
	9	甕	C・24.0 N・20.2	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ケズリ		暗茶褐色	並	S-2 M-1	SK-16
	10	壺	C・16.0 B・10.2 H・5.7	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ		淡灰色	並	M-1	SK-11
	11	甕	C・17.8	a・ナデ b・ナデ	a・ハケ b・ハケ		淡茶褐色	並	S-2	SK-12
	12	壺	C・13.8 B・10.2 H・3.1	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ	a・雜ハケ b・ナデ	灰色	並	M-1	SK-13 重ね焼痕
	13	蓋	C・17.2	a・ナデ b・ナデ			淡灰色	並	S-1	SK-13
	14	壠	C・40.0	a・ナデ b・ナデ	a・カキ目 b・カキ目		淡橙褐色	並	S-2 M-1	SK-14
	15	壺	C・14.4 B・10.0 H・3.8	a・ナデ b・ナデ	a・ナデ b・ナデ	a・雜ヘラ起こし b・ナデ	灰色	並		SK-15
	16	蓋	C・16.5	a・ナデ b・ナデ	a・ケズリ→ナデ b・ナデ		淡灰色	並	M-1	SK-15 裏面一部自然釉
6 3	1	長胴甕	C・22.0 N・19.4	a・ナデ b・カキ目→ナデ	a・カキ目 b・摩耗		a・淡褐色 b・淡黃褐色	並	M-1 L-1	
	2	甕	C・23.4 N・20.8	a・ナデ b・ナデ			淡褐色	並	S-1	
	3	甕	C・21.2 N・18.5	a・ナデ b・摩耗			淡褐色	並	S-1 M-1	
	4	甕	C・18.4 N・15.8	a・ナデ b・ナデ			淡褐色	並	S-2	
	5	椀	C・18.2	a・ミガキ b・ミガキ	a・ミガキ b・ミガキ		橙色	良	S-1	内外面赤彩
	6	蓋		a・ナデ b・ナデ			灰色	良	S-1	
	7	蓋	C・15.4	a・ナデ b・ナデ	a・ケズリ b・ナデ		灰色	良		
	8	蓋	C・3.3 (つまみ径)		a・ケズリ b・ナデ		灰色	並		
	9	壺	C・12.2 B・8.4 H・7.2	a・ナデ b・ナデ		a・ナデ b・ケズリ	灰色	並	S-1	
	10	壺	C・12.8 B・8.4 H・4.1	a・ナデ b・ナデ			灰色	良	S-0	外面自然釉付着
	11	壺	B・8.0			a・摩耗 b・ナデ	灰色	良	S-0	
	12	底部	B・10.4				a・暗灰色 b・灰色	並		

図版 番号	土器 番号	器種 形式	法量 (cm)	調整			色調	焼成	胎土	備考
				口頸部	体部	底部				
6 3	1 3	底部	B・ 8. 6			a・ナデ b・ナデ	暗灰色	並	海綿骨針	
	1 4	壺	N・2 2. 8 W・4 2. 8		a・タキ→ナデ b・タキ→ナデ		a・暗灰色 b・灰色	良	S - 1	
6 4	1	土錘	L・ 3. 6 W・ 1. 3					良	海綿骨針	孔径3mm 5.4 g
	2	土錘	L・ 3. 0 W・ 1. 2		a・摩耗			並	海綿骨針	孔径4mm 3.3g
	3	土錘	L・ 3. 0 W・ 1. 6					並		孔径6mm 6.6g 9H至近
	4	土錘	L・ 4. 5 W・ 1. 3					良		孔径3mm 8.0g
	5	土錘	L・ 3. 5 W・ 1. 7					良	S - 0	孔径6mm 8.6g

* 法量　単位はすべてcmで統一し、Cは口径を、Nは頸部径を、Wは胴部最大径を、Bは底径を、Hは器高を、Lは全長を表している。

調整　口頸部、体部、底部に大まかに分けて観察した。色調も含めて外面、内面の区別は前者をaで、後者をbで表している。

胎土　主に海綿骨針、シャーモット、赤色粒、黒色粒、黒雲母の有無について観察を行った。また細礫については粒の大きさをS(1mm以下)、M(1~3mm)、L(3mm以上)とし、量を0(ほとんど含まない)、1(少量含む)、2(やや多い)、3(多い)で表した。

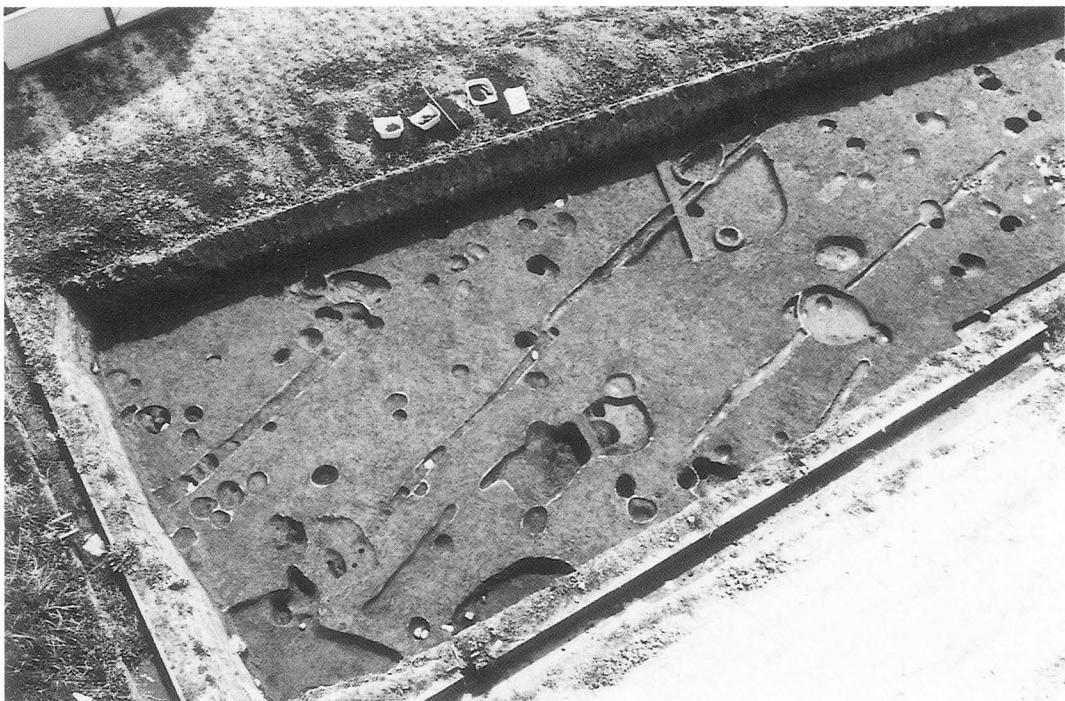
写 真 図 版

遺 物 写 真 図 版

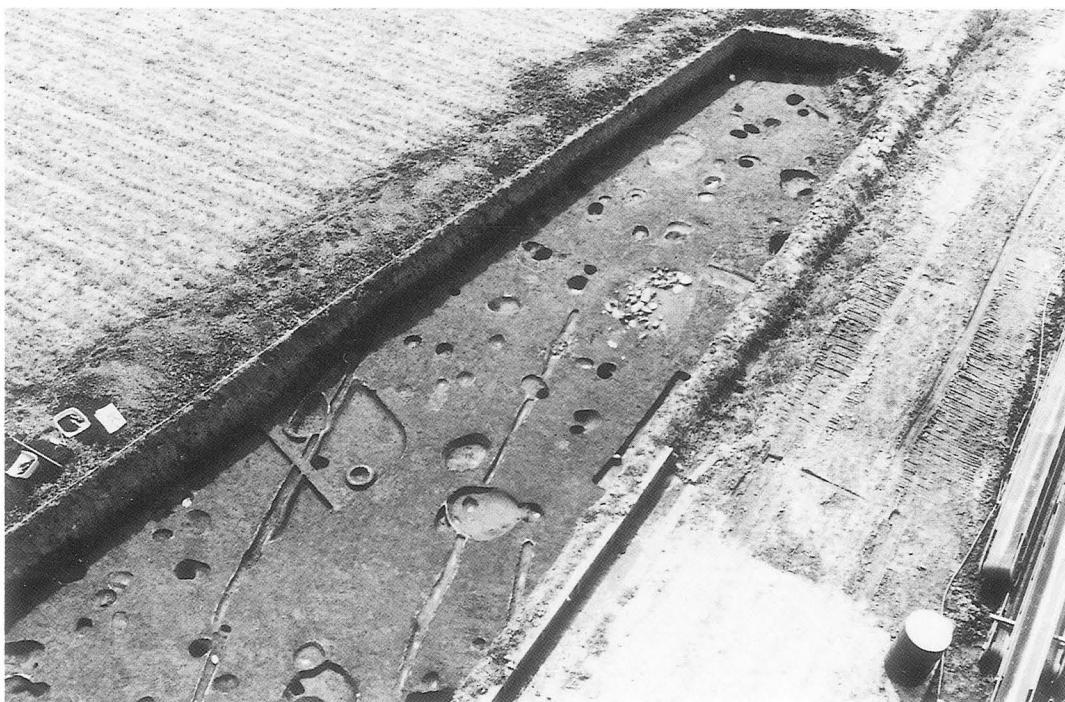


遺跡遠景（上方中央、栗田遺跡上空より）

（社）石川県埋蔵文化財保存協会提供



A区完掘状況（北半）



A区完掘状況（南半）



B·C区完掘状況（全景－南より）



B·C区完掘状況（全景－北東より）



B·C区南群掘立柱建物群



B·C区北群掘立柱建物群



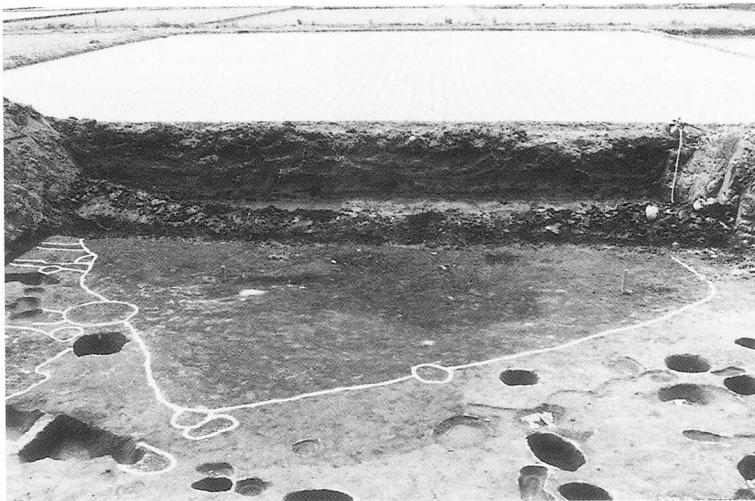
1号竪穴住居（上層）



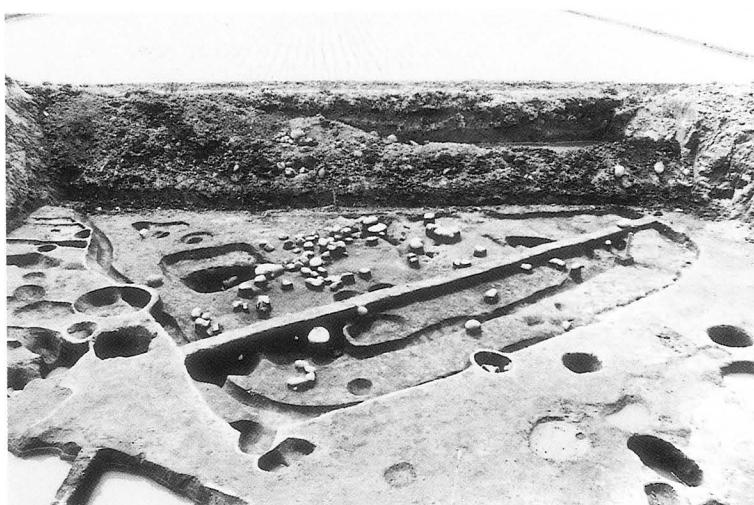
1号竪穴住居南西隅
SX（風倒木痕）



1号竪穴住居完掘状況
(床面下)



2号竪穴住居検出状況



2号竪穴住居（上層）



2号竪穴住居特殊ピット
完掘状況



2号竪穴住居上層
遺物出土状況



2号竪穴住居完掘状況
(床面下)



3号竪穴住居完掘状況
(南より)



3号竪穴住居完掘状況
(東より)



4号竪穴住居完掘状況
(南東より)



1号掘立柱建物 (南より)



1号溝全景（東より）



1号溝全景（西より）



1号溝完掘状況（東半）



1号溝完掘状況（西半）



1号溝遺物出土状況
(西端)



1号溝遺物出土状況
(西側)



1号溝遺物出土状況
(中央付近)



1号溝遺物出土状況
(東側)



1号溝遺物出土状況
(東端)



SK-09



SK-10



SK-10
遺物出土状況



5号竪穴住居完掘状況
(東より)



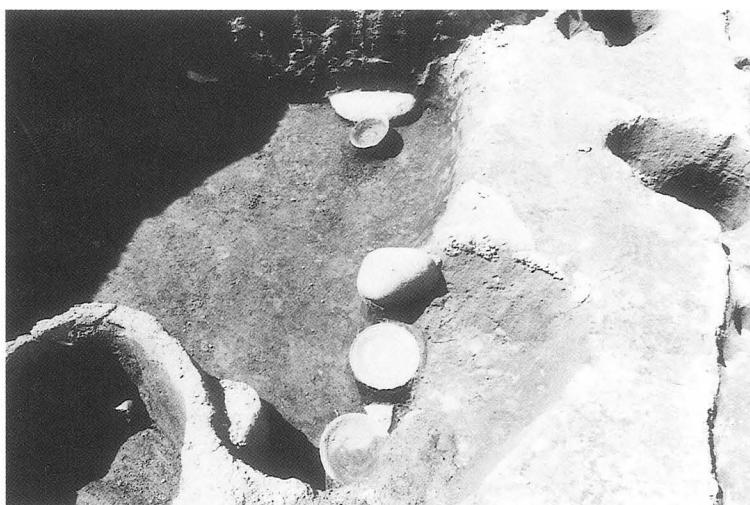
5号竪穴住居完掘状況
(西より)



5号竪穴住居
カマド検出状況



6号竪穴住居コーナー部
検出状況（拡張前）



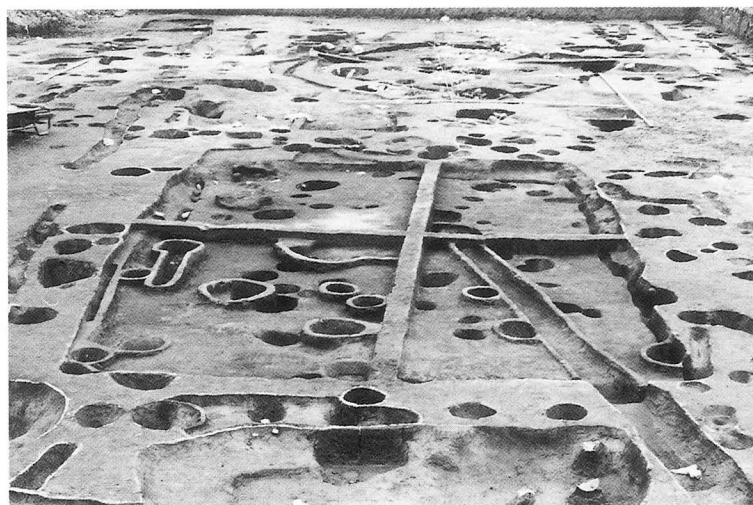
6号竪穴住居完掘状況
(拡張後)



7号竪穴住居完掘状況
(南より)



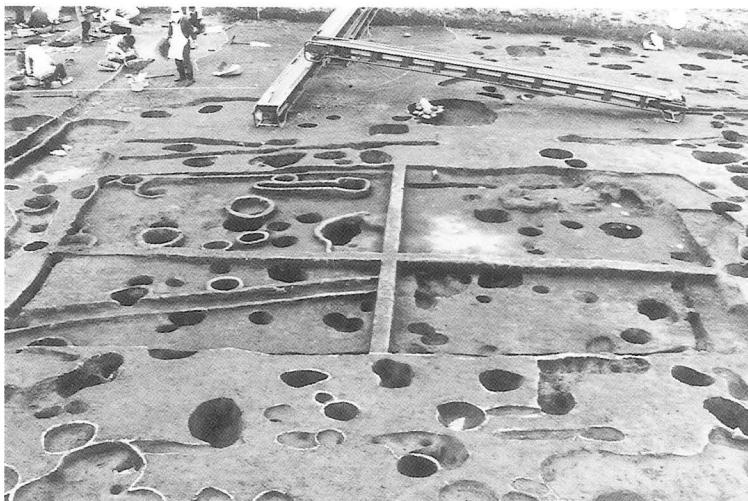
7号竪穴住居完掘状況
(西より)



8号竪穴住居床面検出状況
(北より)



8号竪穴住居床面検出状況
(南より)



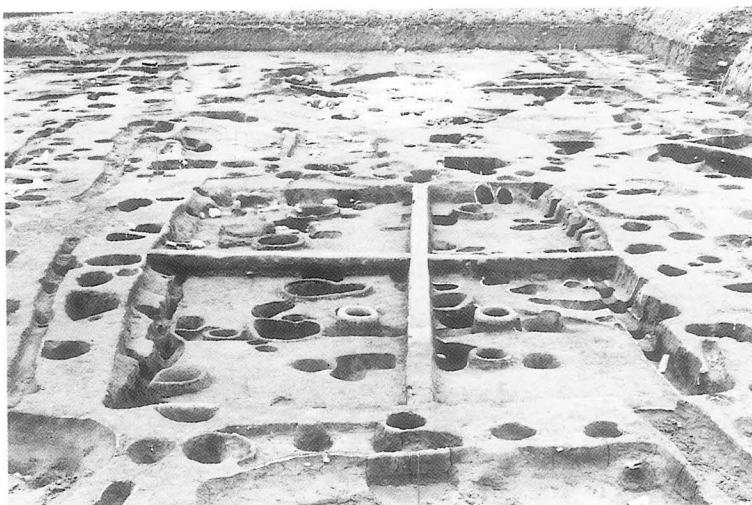
8号竪穴住居床面検出状況
(西より)



8号竪穴住居カマド・
焼土塊検出状況



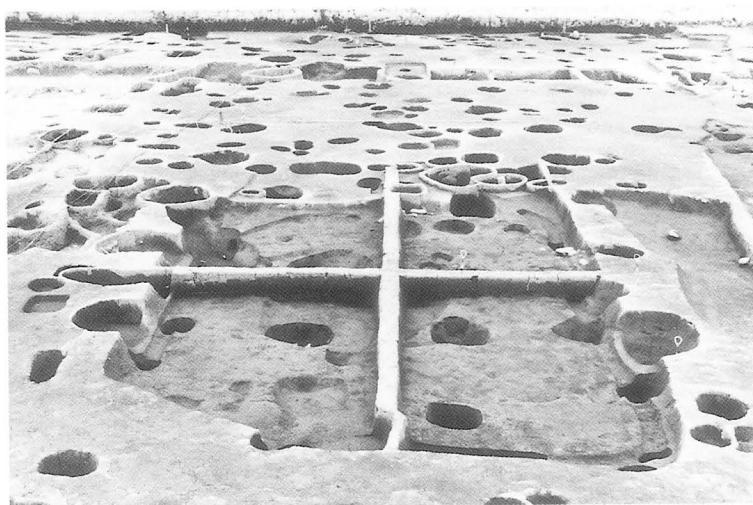
8号竪穴住居カマド内桂穴
検出状況（未掘）



8号竪穴住居床面下
検出状況（北より）



8号竪穴住居床面下
検出状況（南より）



9号竪穴住居完掘状況
(南より)



9号竪穴住居完掘状況
(東より)



9号竪穴住居北西
コーナー部検出状況



9号竪穴住居南西コーナー部
検出状況（入口部）



9号竪穴住居南東
コーナー部検出状況



10号竪穴住居完掘状況
(A区)



主要遺構全体配置状況
(南より)



3・4・5号掘立柱建物
配置状況



3号掘立柱建物（南より）



4号掘立柱建物（南より）



5・6号掘立柱建物
配置状況



5号掘立柱建物（南より）



6号掘立柱建物（南より）



7・8・9号掘立柱建物
配置状況



7・8号掘立柱建物
(南より)



10号掘立柱建物
(南より)



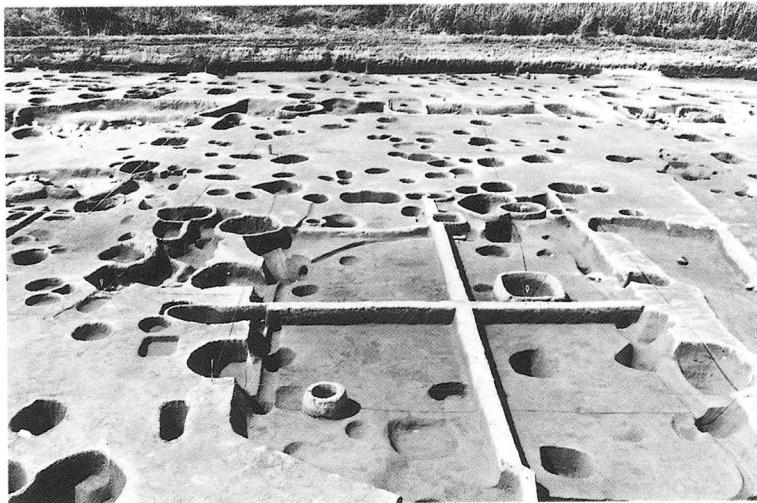
11号掘立柱建物
(南より)



12号掘立柱建物
(南より)



13・14号掘立柱建物
配置状況



13・14号掘立柱建物
(南より)



15号掘立柱建物
(南より)



16号掘立柱建物
(南より)



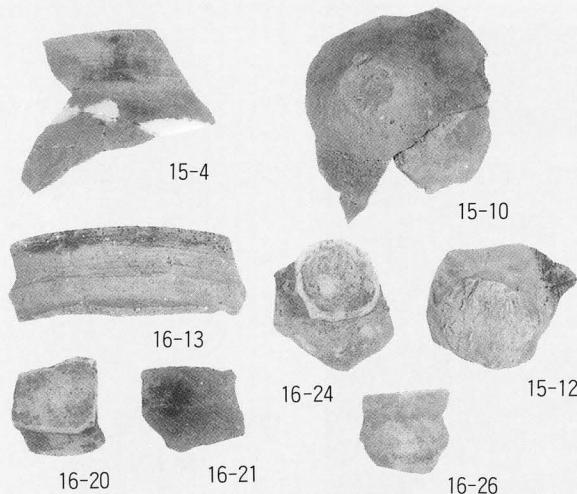
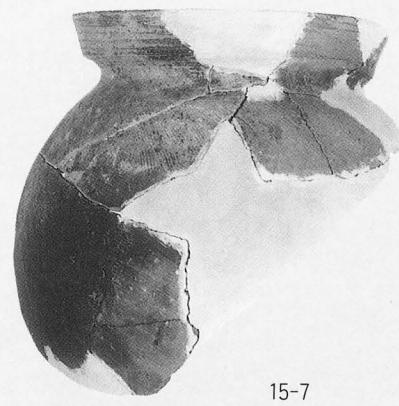
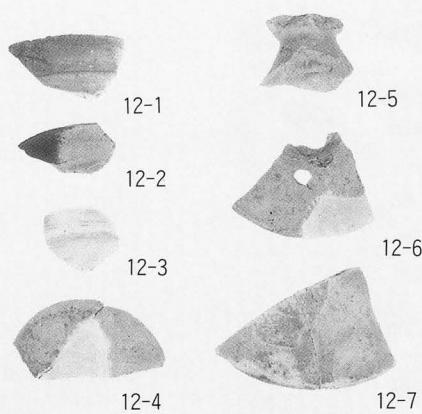
17号掘立柱建物全景



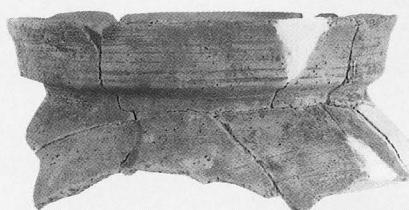
17号掘立柱建物
(南より)



17号掘立柱建物
柱穴検出状況



15-12
16-26





16-27



23-1



23-3



23-2



23-4



17-1



17-4



17-6



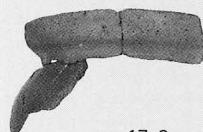
17-2



17-5



17-7



17-3

17-8



17-10



26-1



26-2



26-5



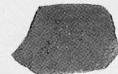
27-16



27-21



21-1



21-4



21-2



21-5



21-3



21-6



27-22



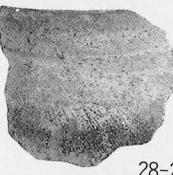
28-26



28-24



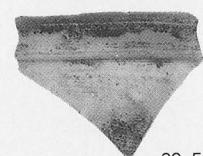
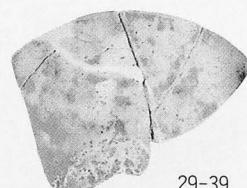
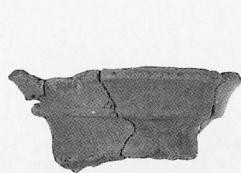
28-31



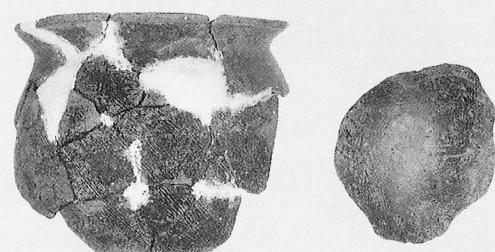
28-25

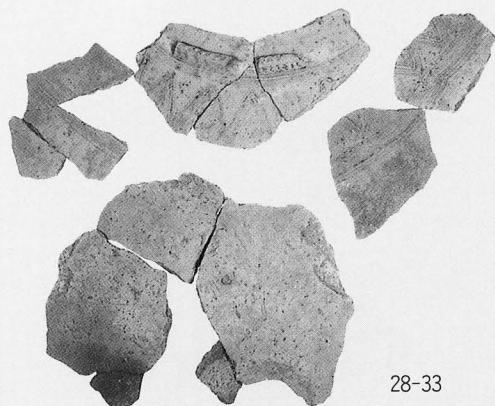


28-32



30-56





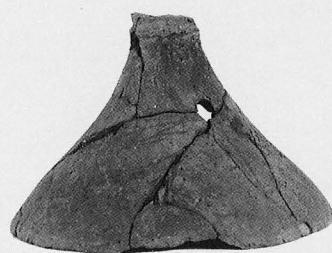
28-33



29-44



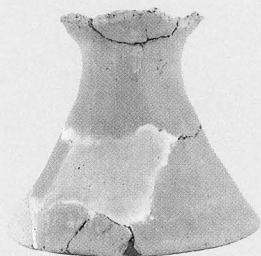
28-35



29-45



29-36



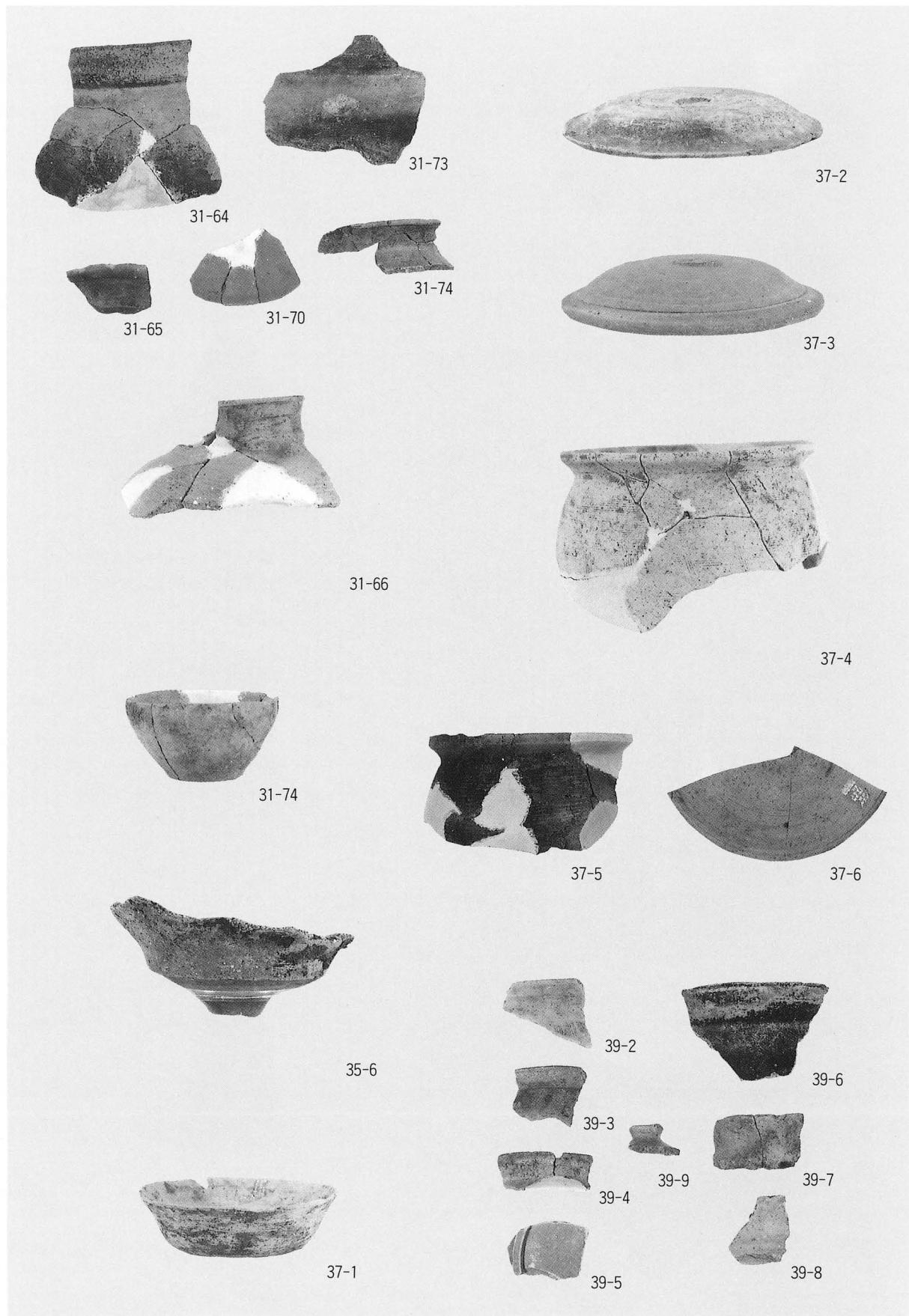
30-51

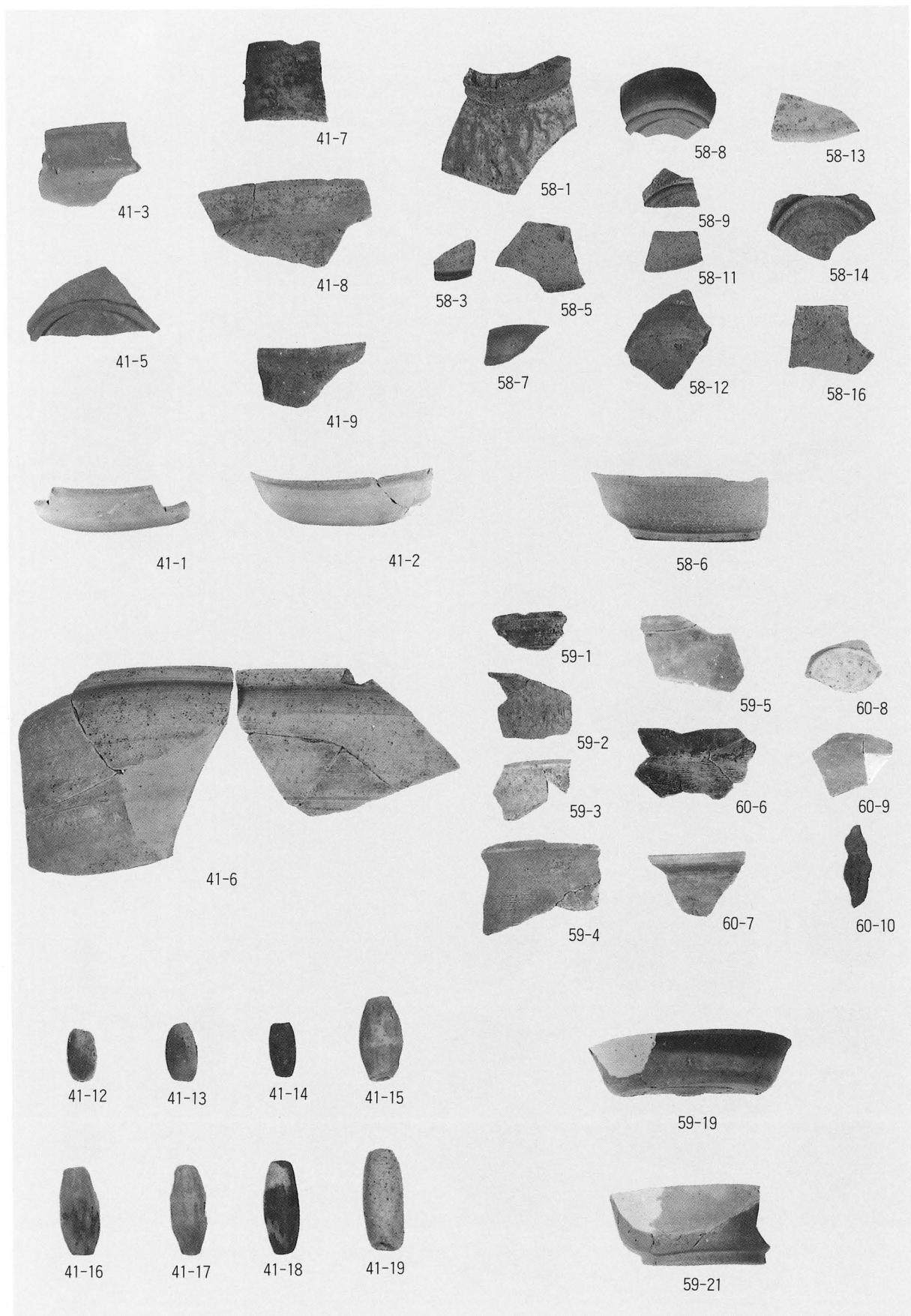


29-43



30-52







59-17



62-16



59-18



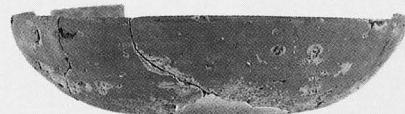
63-1



63-13



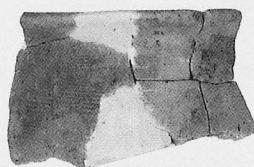
59-23



63-5



62-1



62-5



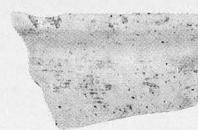
62-10



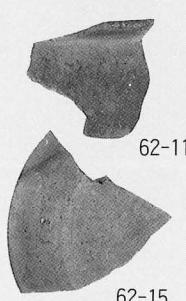
62-3



62-6



62-14



62-11

62-15



64-1



64-3



64-2



64-4



64-5

報告書抄録

ふりがな	かみしんじょうにしうらいせき							
書名	上新庄ニシウラ遺跡							
副書名	野々市町南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	横山 貴広							
編集機関	野々市町教育委員会							
所在地	〒921-8815 石川県石川郡野々市町本町5丁目4番1号							
発行年月日	西暦 1998年 3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′ / ″	° / ′ / ″		面積m ²	
かみしんじょう 上新庄ニシ ウラ遺跡	いしかわけんいしかわ 石川県石川 ぐんののいちまち 郡野々市町 かんばやしいちょうめ 上林1丁目、 しんじょうにちょうめ 新庄2丁目	17344	16002	36° 29' 54"	136° 36' 37"	19890404 l 19890620	2,500	土地区画 整理事業 (組合施行)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上新庄 ニシウラ	集落跡	弥生末～古墳 初頭 古代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝 土坑 ピット	弥生土器 古式土師器 須恵器 土師器 土製品	弥生時代末～古 墳時代初頭の集 落跡を検出。 奈良時代～平安 時代前期の掘立 柱建物群と竪穴 式住居跡からな る集落跡を検出。			

上新庄ニシウラ遺跡

発 行 1998年3月31日（平成10年）

編集発行 野々市町教育委員会

〒921-8815

石川県石川郡野々市町本町5丁目4番1号

☎076-246-2344

印 刷 株式会社 笠間製本印刷所

